

一般国道 11 号大内白鳥バイパス改築工事に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告 第 9 冊

内 間 遺 跡

第 1 分冊

2024. 1

香 川 県 教 育 委 員 会
国 土 交 通 省 四 国 地 方 整 備 局

序 文

香川県埋蔵文化財センターでは、平成 20 年度より一般国道大内白鳥バイパス建設予定地に所在する埋蔵文化財の現地での発掘調査と平成 26 年度から整理作業を実施しています。また、整理作業が完了した遺跡から調査報告書を刊行しています。

本書は、上記事業調査報告書の第 9 冊として、香川県東かがわ市町田に所在する内間遺跡の調査成果を収録するものです。

内間遺跡の発掘調査では、縄文時代後期から江戸時代の幅広い時代の遺構・遺物を確認していますが、中でも古代 7 世紀から 8 世紀にかけての大型灌漑水路は、当時の耕地開発の具体的な方法や規模、ひいては古代国家や地域社会がすすめた国土開発の一端を物語るものとして、重要な資料となるものです。本報告書が、本県の歴史研究の資料として広く活用されるとともに、埋蔵文化財保護に関する理解と関心を深める一助になれば幸いです。

最後になりましたが、現地の発掘調査から整理作業、報告書刊行に至るまでの間、国土交通省四国地方整備局並びに関係機関、地元関係者の各位より、多大なご協力とご指導をいただきましたことに、深く感謝申し上げますとともに、今後ともご支援を賜りますようお願いいたします。

令和 6 年 1 月 31 日

香川県埋蔵文化財センター

所長 佐藤 竜馬

例 言

1 本報告書は、一般国道 11 号大内白鳥バイパス改築工事に伴い発掘調査を実施した、香川県東かがわ市町田に所在する内間遺跡（うちまいせき）の報告である。

2 発掘調査は香川県埋蔵文化財センターが実施した。

3 発掘調査時及び整理作業時の調査担当機関における組織構成は、次のとおりである。

（発掘調査）

第 1 次調査

期間 平成 26 年 6 月 1 日～平成 26 年 9 月 30 日

香川県教育委員会事務局生涯学習・文化財課

総括 課長 増田宏 副課長 川上泰

文化財グループ 課長補佐 片桐孝浩 主任文化財専門員 山下平重

文化財専門員 松本和彦

香川県埋蔵文化財センター

総括 所長 真鍋昌宏 次長 前田和也

調査課 課長 森格也 （調査担当） 主任文化財専門員 佐藤竜馬

技師 真鍋貴匡

第 2 次調査

期間 平成 27 年 7 月 1 日～平成 28 年 1 月 31 日

香川県教育委員会事務局生涯学習・文化財課

総括 課長 増田宏 副課長 小柳和代

文化財グループ 課長補佐 片桐孝浩 主任文化財専門員 山下平重

文化財専門員 乗松真也

香川県埋蔵文化財センター

総括 所長 真鍋昌宏 次長 前田和也

調査課 課長 森格也 （調査担当） 主任文化財専門員 佐藤竜馬

技師 竹内裕貴

第 3 次調査

期間 平成 29 年 9 月 1 日～平成 30 年 1 月 31 日

香川県教育委員会事務局生涯学習・文化財課

総括 課長 小柳和代 副課長 片桐孝浩

文化財グループ 課長補佐（兼） 片桐孝浩 主任文化財専門員 信里芳紀・乗松真也

香川県埋蔵文化財センター

総括 所長 増田宏 次長 森格也

調査課長（兼） 森格也 （調査担当） 文化財専門員 宮崎哲治

(整理作業)

期間 令和3年5月1日～令和3年11月30日

香川県教育委員会事務局生涯学習・文化財課

総括 課長 渡邊智子 副課長 佐藤竜馬

文化財グループ 主任文化財専門員 森下英治 文化財専門員 宮崎哲治

香川県埋蔵文化財センター

総括 所長 高原 康 次長 北山健一郎

資料普及課 課長 信里芳紀 (整理担当) 主任文化財専門員 蔵本晋司

期間 令和4年5月

香川県教育委員会事務局生涯学習・文化財課

総括 課長 荻原絢嗣 副課長 佐藤竜馬

文化財グループ 主任文化財専門員 森下英治 文化財専門員 宮崎哲治

香川県埋蔵文化財センター

総括 所長 高原 康 次長 北山健一郎

資料普及課 課長 信里芳紀 (整理担当) 主任文化財専門員 蔵本晋司

- 4 調査にあたっては次の方々、関係機関の協力を得た。記して謝意を表したい。
大賀克彦、大久保徹也、田村朋美、益崎卓己
国土交通省四国地方整備局香川河川国道事務所、東かがわ市教育委員会、地元自治会、
地元水利組合 (順不同、敬称略)
- 5 報告書の作成は香川県埋蔵文化財センターが実施した。執筆・編集は蔵本晋司・信里芳紀が担当した。
このうち第5章は信里芳紀が執筆した。
- 6 本報告書で用いる座標系は国土座標第IV系(世界測地系)で、方位の北は国土座標第IV系による。
また、標高は東京湾平均海水面を基準とした。
- 7 遺構は次の略号により表示した。
SB 掘立柱建物 SP 柱穴・小穴 SK 土坑 SD 溝 SE 井戸 SG 溜池・溜め井
SR 旧河道 ST 墳墓 SX 性格不明遺構
- 8 遺構断面図の水平線上の数値は水平線の標高線(単位m)である。
- 9 遺構断面図中の注記の色調は、小山正忠・竹原秀雄編『新版標準土色帖 32版』を参照した。
- 10 土器観察表の色調は小山正忠・竹原秀雄編『新版標準土色帖 32版』を、玉類観察表の色調は長崎
盛輝 2006『新版 日本の伝統色－その色名と色調－』, 株式会社青幻舎をそれぞれ参照した。また、

残存率は遺物の図化部分に占める割合であり、完形品に対する割合ではない。

11 遺物の時期や分類は次の文献を参照した。

須恵器： 田辺昭三 1981 『須恵器大成』，角川書店

大阪府立近つ飛鳥博物館編 2006 『年代のものさし -大阪府立近つ飛鳥博物館図録 40
-』

輸入陶磁器：上田秀夫 1982 「14～16世紀の青磁碗の分類」『貿易陶磁研究』No.2，日本貿易陶磁
研究会

国産陶磁器：九州近世陶磁学会編 2000 『九州陶磁の編年』

本文目次

(第1分冊)

第1章 調査に至る経緯と経過

第1節 調査の経緯……………1

第2節 調査・整理作業の経過……………3

第2章 立地と環境

第1節 歴史・地理的環境……………4

第3章 調査の成果

第1節 調査の方法と成果……………13

第2節 基本層序……………13

第3節 遺構・遺物……………72

(第2分冊)

第4章 自然科学的分析の成果

第1節 香川県内間遺跡出土木製品の樹種調査結果……………349

第2節 香川県内間遺跡出土木製品の樹種調査結果……………351

第3節 内間遺跡出土木材の樹種同定……………357

第4節 内間遺跡から出土した大型植物遺体……………378

第5節 香川県内間遺跡出土漆製品の塗膜構造調査……………381

第6節 放射性炭素年代測定……………387

第7節 土器胎土分析及び放射性炭素年代測定……………394

第8節 内間遺跡出土鍛冶関連遺物の調査……………446

第5章 総括……………457

挿図目次

第1図	遺跡位置図1	1	第57図	ST03平・断面・出土遺物実測図	83
第2図	路線と調査遺跡	2	第58図	SD018平・断面・出土遺物実測図	84
第3図	遺跡周辺地質図	5	第59図	SD039平・断面・出土遺物実測図	85
第4図	遺跡周辺地形分類図	7	第60図	SD155平・断面・出土遺物実測図	86
第5図	遺跡周辺10cmコンタ図	9	第61図	SD225・SD226平・断面・出土遺物実測図	87
第6図	周辺遺跡分布図	10	第62図	SD227平・断面・出土遺物実測図	88
第7図	調査区配置図	15	第63図	SD244平・断面図	90
第8図	1～5トレンチ断面図	16	第64図	SD244出土遺物実測図1	91
第9図	1区東壁土層断面図	17～18	第65図	SD244出土遺物実測図2	92
第10図	1区西壁土層断面図	19～20	第66図	SD244出土遺物実測図3	93
第11図	1区南壁土層断面図	21～22	第67図	SD244出土遺物実測図4	94
第12図	1a区北・東壁土層断面図	24	第68図	SD244出土遺物実測図5	95
第13図	2区トレンチ①・②土層断面図	26	第69図	SD251平・断面・出土遺物実測図	97
第14図	3区東壁土層断面図	27	第70図	SD256・SD258・SD260・SD261 平・断面・出土遺物実測図	98
第15図	3区北壁土層断面図	28	第71図	SD273平・断面・出土遺物実測図	99
第16図	3区中央トレンチ土層断面図	29	第72図	SX03平・断面・出土遺物実測図	100
第17図	4区北壁土層断面図	30	第73図	SX17平・断面図	102
第18図	4区西壁土層断面図	32	第74図	SX17出土遺物実測図	103
第19図	5区北壁土層断面図	33	第75図	SR01・SR02平面図	104
第20図	6区東壁土層断面図	34	第76図	SR01・SR02出土遺物実測図	105
第21図	6区北・西壁土層断面図	35～36	第77図	古代遺構配置図	106
第22図	6区南壁A土層断面図	37	第78図	SB03平・断面・出土遺物実測図	108
第23図	6区南壁B土層断面図	38	第79図	SB04平・断面・出土遺物実測図	109
第24図	7区東壁土層断面図	39	第80図	SB05平・断面図	110
第25図	7区北壁土層断面図	40	第81図	SK090・SK124・SK125 平・断面・出土遺物実測図	111
第26図	8区東壁土層断面図	41	第82図	SD087平・断面・出土遺物実測図	112
第27図	8区北壁土層断面図	42	第83図	SD093・SD219平・断面図	115～116
第28図	8区南壁土層断面図	43～44	第84図	SD093平・断面図2	117～118
第29図	8区西壁土層断面図	45	第85図	SD093平・断面図3	119
第30図	9区南壁土層断面図	47	第86図	SD093杭列検出状況	120
第31図	10区南壁土層断面図	49～50	第87図	SD093木群出土状況	121～122
第32図	11区北壁土層断面図	51	第88図	SD093出土遺物実測図1	123
第33図	11区南壁土層断面図	52	第89図	SD093出土遺物実測図2	124
第34図	11区西壁土層断面図	53	第90図	SD093出土遺物実測図3	125
第35図	11s区南壁土層断面図	54	第91図	SD093出土遺物実測図4	126
第36図	12区東壁土層断面図	55	第92図	SD093出土遺物実測図5	127
第37図	12区南壁土層断面図	56	第93図	SD093出土遺物実測図6	128
第38図	12区トレンチ東壁土層断面図	57	第94図	SD093出土遺物実測図7	129
第39図	13区東壁土層断面図	58	第95図	SD093出土遺物実測図8	130
第40図	13区北壁土層断面図	59～60	第96図	SD093出土遺物実測図9	131
第41図	13区南壁土層断面図	61～62	第97図	SD093出土遺物実測図10	132
第42図	13区西壁土層断面図	63	第98図	SD093出土遺物実測図11	133
第43図	14区東・西壁土層断面図	65	第99図	SD093出土遺物実測図12	135
第44図	14区北壁土層断面図	67～68	第100図	SD093出土遺物実測図13	136
第45図	14区南壁土層断面図	69～70	第101図	SD093出土遺物実測図14	137
第46図	縄文時代遺構配置図	71	第102図	SD272平・断面図	138
第47図	SR03平・断面・出土遺物実測図	73	第103図	SD272出土遺物実測図1	139
第48図	SR04平・断面・出土遺物実測図	74	第104図	SD272出土遺物実測図2	140
第49図	弥生時代遺構配置図	75	第105図	SX13平・断面・出土遺物実測図	141
第50図	SH01平・断面・出土遺物実測図	76	第106図	SD092・149・150・151・154・158 平・断面図	142
第51図	SK033・SK034平・断面・出土遺物実測図	77	第107図	中世前半遺構配置図	144
第52図	SK035平・断面図	78	第108図	SB01平・断面・出土遺物実測図	146
第53図	SK068・SK069・SK081 平・断面・出土遺物実測図	79	第109図	SB02平・断面図	147
第54図	SK083・SK091平・断面・出土遺物実測図	80	第110図	SB06平・断面・出土遺物実測図	148
第55図	ST02平・断面図	81			
第56図	ST02出土遺物実測図	82			

第 111 図	SB07 平・断面・出土遺物実測図	149
第 112 図	SB08 平・断面図	150
第 113 図	SB08 出土遺物実測図	151
第 114 図	SB12 平・断面図	152
第 115 図	SB14 平・断面・出土遺物実測図	153
第 116 図	SB15 平・断面図	154
第 117 図	SB16 平・断面図	155
第 118 図	SB17 平・断面図	156
第 119 図	SB18 平・断面図	157
第 120 図	SB20 平・断面・出土遺物実測図	158
第 121 図	柱穴出土遺物実測図 1	159
第 122 図	柱穴出土遺物実測図 2	161
第 123 図	柱穴出土遺物実測図 3	162
第 124 図	柱穴出土遺物実測図 4	163
第 125 図	柱穴出土遺物実測図 5	164
第 126 図	柱穴出土遺物実測図 6	165
第 127 図	柱穴出土遺物実測図 7	166
第 128 図	柱穴出土遺物実測図 8	167
第 129 図	柱穴出土遺物実測図 9	168
第 130 図	柱穴出土遺物実測図 10	169
第 131 図	柱穴出土遺物実測図 11	170
第 132 図	柱穴出土遺物実測図 12	171
第 133 図	SK001 平・断面図	172
第 134 図	SK002・SK003 平・断面・出土遺物実測図	173
第 135 図	SK009～SK014 平・断面・出土遺物実測図	175
第 136 図	SK016・SK017・SK019・SK020 平・断面・出土遺物実測図	177
第 137 図	SK022・SK030・SK031・SK066 平・断面・出土遺物実測図	179
第 138 図	SK074・SK076～SK078 平・断面・出土遺物実測図	181
第 139 図	SK096・SK098・SK102・SK105 平・断面・出土遺物実測図	183
第 140 図	SK106・SK107・SK113・SK116・SK117 平・断面・出土遺物実測図	185
第 141 図	SK119～SK121・SK127・SK128・SK135 平・断面・出土遺物実測図	187
第 142 図	SK130・SK131・SK134・SK136・SK137・SK142 平・断面・出土遺物実測図	189
第 143 図	ST01 平・断面・出土遺物実測図	191
第 144 図	SE01 平・断面図	192
第 145 図	SE02 平・断面図・出土遺物実測図	193
第 146 図	SE03 平・断面図	195～196
第 147 図	SE03 出土遺物実測図 1	197
第 148 図	SE03 出土遺物実測図 2	198
第 149 図	SE03 出土遺物実測図 3	199
第 150 図	SE03 出土遺物実測図 4	200
第 151 図	SG03・SG04 平・立面図	203～204
第 152 図	SG03・SG04 断面図	205
第 153 図	SG03 出土遺物実測図 1	206
第 154 図	SG03 出土遺物実測図 2	207
第 155 図	SG03 出土遺物実測図 3	208
第 156 図	SG03 出土遺物実測図 4	209
第 157 図	SG03 出土遺物実測図 5	210
第 158 図	SG03 出土遺物実測図 6	211
第 159 図	SG03 出土遺物実測図 7	212
第 160 図	SG03 出土遺物実測図 8	213
第 161 図	SG03 出土遺物実測図 9	214
第 162 図	SG04 出土遺物実測図 1	215
第 163 図	SG04 出土遺物実測図 2	216
第 164 図	SG04 出土遺物実測図 3	217
第 165 図	SG04 出土遺物実測図 4	218
第 166 図	SG04 出土遺物実測図 5	219
第 167 図	SG04 出土遺物実測図 6	220
第 168 図	SG04 出土遺物実測図 7	221
第 169 図	SG04 出土遺物実測図 8	222
第 170 図	SG04 出土遺物実測図 9	223
第 171 図	SD011 平・断面・出土遺物実測図	224
第 172 図	SD017・SD030 平・断面・出土遺物実測図	225
第 173 図	SD026～SD028 平・断面・出土遺物実測図	226
第 174 図	SD035 平・断面図	227
第 175 図	SD066～SD069・SD072・SD074・SD082・SD083・ SD085・SD086・SD088～SD090・SD094・SD136・ SD145～SD147 平・断面・出土遺物実測	229～230
第 176 図	SG02・SD084 平・断面図	235～236
第 177 図	SG02 平・立面図	237
第 178 図	SG02・SD084 出土遺物実測図 1	238
第 179 図	SG02・SD084 出土遺物実測図 2	239
第 180 図	SG02・SD084 出土遺物実測図 3	241
第 181 図	SG02・SD084 出土遺物実測図 4	242
第 182 図	SG02・SD084 出土遺物実測図 5	243
第 183 図	SD124 平・断面・出土遺物実測図	244
第 184 図	SD167 平・断面・出土遺物実測図	245
第 185 図	SD172 平・断面・出土遺物実測図	246
第 186 図	SD191 平・断面・出土遺物実測図	247
第 187 図	SD192 平・断面図	248
第 188 図	SD217 平・断面・出土遺物実測図	249
第 189 図	SD228 平・断面・出土遺物実測図	250
第 190 図	SD229～SD235・SD237 平・断面・出土遺物実測図	251
第 191 図	SD274 平・断面図	252
第 192 図	SD278・SD279 平・断面・出土遺物実測図	253
第 193 図	SD280 平・断面図	254
第 194 図	SD283 平・断面図	255
第 195 図	SD294・SD296・SD298 平・断面・出土遺物実測図	256
第 196 図	SD300・SD301 平・断面・出土遺物実測図	257
第 197 図	SX01 平・断面・出土遺物実測図	258
第 198 図	SX04 平・断面・出土遺物実測図	259
第 199 図	SX05 平・断面・出土遺物実測図	261
第 200 図	SX08 平・断面・出土遺物実測図	262
第 201 図	SX10 平・断面・出土遺物実測図	263
第 202 図	SX11 平・断面・出土遺物実測図	264
第 203 図	SX12 平・断面図	265
第 204 図	SX16 平・断面・出土遺物実測図	266
第 205 図	SX19 平・断面・出土遺物実測図	267
第 206 図	1 区鋤溝群平面・出土遺物実測図	269
第 207 図	1 区鋤溝群断面図	270
第 208 図	3・4 区鋤溝群平・断面図	271～272
第 209 図	3・4 区鋤溝群出土遺物実測図	273
第 210 図	中世後半遺構配置図	275
第 211 図	SB11 平・断面・出土遺物実測図	277
第 212 図	SB12 出土遺物実測図	278
第 213 図	柱穴出土遺物実測図	279
第 214 図	SE04 平・断面図	280
第 215 図	SE04 出土遺物実測図	281
第 216 図	SG01 平・断面図	283
第 217 図	SG01 護岸施設平・断・立面図	284
第 218 図	SG01 断面図	285

第 219 図	SG01 出土遺物実測図 1	286
第 220 図	SG01 出土遺物実測図 2	287
第 221 図	SG01 出土遺物実測図 3	288
第 222 図	SG01 出土遺物実測図 4	289
第 223 図	SG01 出土遺物実測図 5	290
第 224 図	SG01 出土遺物実測図 6	291
第 225 図	SG01 出土遺物実測図 7	292
第 226 図	SD034・SD187 平・断面・出土遺物実測図	294
第 227 図	SD207 平・断面・出土遺物実測図	295
第 228 図	SD208 平・断面・出土遺物実測図	296
第 229 図	SD210 平・断面・出土遺物実測図	298
第 230 図	SD215 平面図	300
第 231 図	SD215 断面・東側護岸施設平・立・断面図	301
第 232 図	SD215 西側護岸施設平・立・断面図	302
第 233 図	SD215 出土遺物実測図 1	303
第 234 図	SD215 出土遺物実測図 2	304
第 235 図	SD215 出土遺物実測図 3	305
第 236 図	SD215 出土遺物実測図 4	306
第 237 図	SX15 平・断面・出土遺物実測図	307
第 238 図	近世遺構配置図	308
第 239 図	SB09 平・断面・出土遺物実測図	309
第 240 図	SB10 平・断面図	310
第 241 図	SB10 出土遺物実測図 1	311
第 242 図	SB10 出土遺物実測図 2	312
第 243 図	近世柱穴出土遺物実測図	313
第 244 図	SK023～SK026 平・断面・出土遺物実測図	315
第 245 図	SK027～SK029・SK036 平・断面・出土遺物実測図	317
第 246 図	SK037～SK042 平・断面図	318
第 247 図	SK044 平・断面・出土遺物実測図	319
第 248 図	SK056・SK058 平・断面・出土遺物実測図	320
第 249 図	SK063 平・断面・出土遺物実測図	321
第 250 図	SK065・SK075 平・断面・出土遺物実測図	322
第 251 図	SE05 平・断・立面・出土遺物実測図 1 ……………	323～324
第 252 図	SE05 出土遺物実測図 2	325
第 253 図	SE05 出土遺物実測図 3	326
第 254 図	SD091・SD143・SD144 平・断面・出土遺物実測図	328
第 255 図	SD220・SD221 平・断面・出土遺物実測図	330
第 256 図	SD239 平・断面・出土遺物実測図	331
第 257 図	SD240 平・断面・出土遺物実測図	332
第 258 図	SD271・SD264・SD265・SD266・SD267・SD268・ SD269 平・断面・出土遺物実測図	333
第 259 図	SB13 平・断面図	334
第 260 図	SB19 平・断面図	335
第 261 図	SK059 平・断面・出土遺物実測図	336
第 262 図	SK129 平・断面・出土遺物実測図	337
第 263 図	SD016 平・断面・出土遺物実測図	338
第 264 図	SD080・SD081 平・断面・出土遺物実測図	339
第 265 図	SD214 平・断面・出土遺物実測図	340
第 266 図	SD222・SD223・SD224 平・断面・出土遺物実測図	341
第 267 図	SD250 平・断面・出土遺物実測図	342
第 268 図	SD284 平・断面・出土遺物実測図	343
第 269 図	包含層出土遺物実測図 1	344
第 270 図	包含層出土遺物実測図 2	345
第 271 図	包含層出土遺物実測図 3	346

表目次

表1	国道11号大内白鳥バイパス調査・整理一覧……………	2
表2	周辺遺跡一覧……………	11

第1章 調査に至る経緯と経過

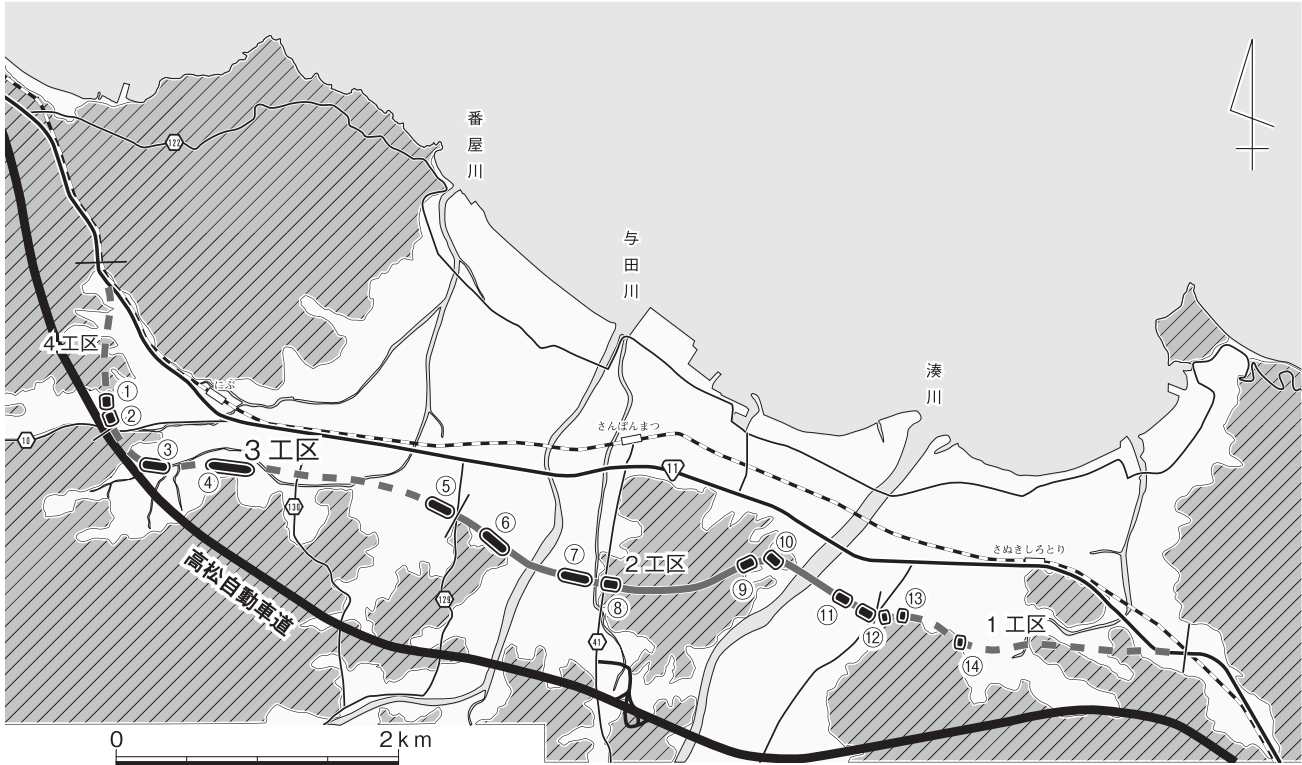
第1節 調査の経緯

一般国道11号大内白鳥バイパスについては、国土交通省四国地方整備局香川河川国道事務所（以下、「国交省」という）により県東部の東かがわ市での交通の混雑緩和や安全確保、インターチェンジ（IC）へのアクセス性向上等を目的に、平成12年度から整備が進められてきた。こうしたなか香川県教育委員会（以下、「県教委」という）では、国交省に対して路線内に所在する埋蔵文化財の取り扱いについて断続的に協議を行ない、平成18年度より用地取得が完了し条件の整った2・3工区から順次試掘調査等を実施し、埋蔵文化財の包蔵状況が確認され、保護措置が必要と判断された箇所については、工事実施に先立ち本発掘調査を行ない、文化財保護法に基づく保護措置に努めてきた。内間遺跡は、県教委が平成24・25年度に東かがわ市町田において試掘調査を実施した際に新たに確認された包蔵地であり、9,698㎡の保護措置が必要と判断された。

なお、本事業に伴う全体の埋蔵文化財保護状況については第2図・表1のとおりである。



第1図 遺跡位置図1



1. 中山北遺跡 2. 中山遺跡 3. 三殿北遺跡 4. 内間遺跡 5. 西村遺跡 6. 誉水中筋遺跡 7. 仲戸遺跡 8. 仲戸東遺跡 9. 湊山下古墳 10. 山下岡前遺跡 11. 田中遺跡 12. 城泉遺跡 13. 城泉東遺跡 14. 赤坂古墳群

第2図 路線と調査遺跡

番号	遺跡名	所在地	調査面積 (㎡)	発掘調査	整理作業	報告書	内容
1	中山北遺跡	東かがわ市中山	2,066	R4.10 ~ 12			縄文包含層、中世集落、近世集落
2	中山遺跡	東かがわ市土居・中山	2,866	R1.8 ~ 10、R2.6 ~ 8、R4.10 ~ 12			古代~中世河川、近世溜池・耕作地
3	三殿北遺跡	東かがわ市三殿	3,645	H28.10 ~ H29.1、H29.6 ~ 8	H30.7 ~ H31.1	R2.3	古代大型灌漑水路、中世集落
4	内間遺跡	東かがわ市町田	6,877	H26.6 ~ 9、H27.7 ~ H28.1、H29.9 ~ H30.1	R3.6 ~ 12、R4.6 ~ 12	本書	縄文時代河川、弥生時代集落、古代集落・大型灌漑水路、中世集落・灌漑施設
5	西村遺跡	東かがわ市西村	3,660	H25.6 ~ 9、H26.6 ~ 11	H29.6 ~ 12	H31.3	弥生時代集落、古代~中世集落・鍛冶関連遺構
6	誉水中筋遺跡	東かがわ市中筋	4,459	H20.9 ~ H21.3	H27.7 ~ 10	H29.3	中世集落・墳墓
7	仲戸遺跡	東かがわ市川東	3,695	H20.7 ~ H21.1	H26.6 ~ 11	H28.3	縄文時代晩期河川、弥生時代河川・大型水路
8	仲戸東遺跡	東かがわ市川東	1,251	H20.7 ~ H20.10、H25.3	H26.6 ~ 11	H28.3	古墳時代後期埴輪製作関連、古代大型水路
9	湊山下古墳	東かがわ市湊	1,600	H24.11 ~ H25.2	R1.6 ~ 7	R3.3	古墳時代前期古墳 (円墳)
10	山下岡前遺跡	東かがわ市湊	2,757	H24.11 ~ H25.3	R1.6 ~ 12、R2.4 ~ 6	R3.3	弥生時代集落、古墳時代後期墳墓、古代寺院
11	田中遺跡	東かがわ市白鳥	2,655	H22.6 ~ 10	H27.11 ~ H28.1	H29.3	縄文時代河川、弥生時代後期集落、古墳時代後期集落、古代~中世集落
			4,486	H23.6 ~ H24.3	H28.7 ~ H29.1、H29.4	H30.3	古墳時代中期河川、古代~中世集落
12	城泉遺跡	東かがわ市白鳥	2,488	H30.6 ~ 10、R2.9 ~ 10			弥生時代後期集落、古墳時代中期集落
			320	R3.6 ~ 11			
13	城泉東遺跡	東かがわ市白鳥	1,207	R3.6 ~ 11			縄文時代晩期河川、近世集落
14	赤坂古墳群	東かがわ市婦菜		R3.6 ~ 11			

表1 国道11号大内白鳥バイパス調査・整理一覧 (令和4年3月31日現在)

第2節 調査・整理作業の経過

本発掘調査は、香川県埋蔵文化財センターを調査担当とし、平成26年6月～9月、平成27年7月～平成28年1月、平成29年9月～平成30年1月の3次にわたって実施した。平成26・29年度は1班、平成27年度は2班体制で調査を実施した。また、平成26年度は直営方式（基準点測量は委託）、平成27・29年度は支援委託方式により調査を行なった。この間、平成27年10月3日に現地説明会を開催し、調査成果の一部を公開した。

主たる整理作業は、令和3年5月1日～11月30日、令和4年6月1日～12月31日に実施した。それに先立ち令和2年度中に、出土遺物の注記作業を株式会社イビソクに、出土土器の接合・復元、実測遺物の抽出作業を株式会社九州文化財研究所に、それぞれ委託して実施した。また令和3年度には、出土土器の実測・浄書作業を株式会社島田組に委託して実施した。土器以外の出土遺物の実測・浄書、出土遺物の写真撮影、遺構図の浄書、遺構写真の整理等の作業は、令和3・4年度に埋蔵文化財センターにおいて行なった。出土遺物の整理と平行して、自然科学的分析については株式会社パレオ・ラボ、日鉄テクノロジー株式会社、パリノ・サーヴェイ株式会社に、木製品・金属製品の保存処理については株式会社吉田生物研究所に、それぞれ委託して実施し、分析等の成果については本書に掲載した。

出土遺物量は、28ℓ入りコンテナ242箱である。遺構については、遺跡を評価する上で必要と認めるすべての遺構について報告することとし、現場において作成した図面等については、ほぼ全てを掲載した。

第2章 立地と環境

第1節 歴史・地理的環境

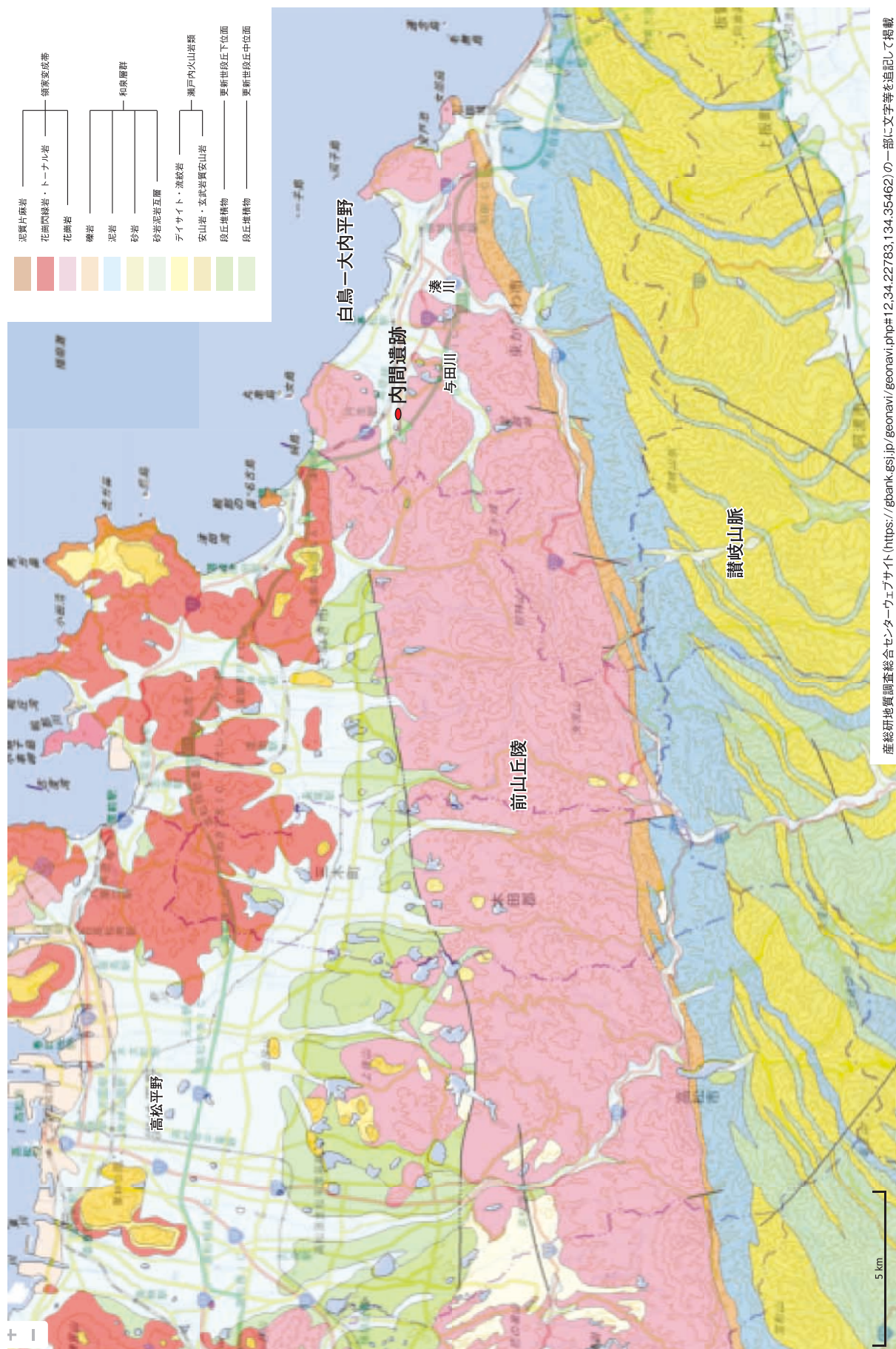
内間遺跡は、香川県東部の白鳥－大内平野南西奥部に所在する。現在の行政区分上は東かがわ市町田、平成16年度の市町合併前は大川郡大内町町田である。白鳥－大内平野の南縁には讃岐山脈が東西走り、徳島県との県境をなす。遺跡から徳島県境までの最短直線距離は約8.5km、現海岸線までの同距離は約2.7kmである。

白鳥－大内平野は、東部は湊川や中川、西部は与田川と番屋川等のいずれも二級河川の下流部に形成された、東西約8km、南北2～3km、面積約9.7kmの扇状地性の小規模な広義の海岸平野で、北東は播磨灘に面する。与田川や湊川の河口域には、現海岸線に平行して幅約350mの数列の浜堤(砂州・砂堆)が形成され、その背後には後背湿地(海岸平野・三角州)が南の丘陵近くまで広がる(第4図)。後背湿地は現在、主に水田等として利用されているが、中世以前には潟湖や埋没途上の低湿地であったと考えられ、現状で遺跡の分布は確認されていない(第6図)。また、中世の石造物は、第4図に示したように、砂州・砂堆や谷底平野、扇状地や段丘面、低丘陵上等に分布し、後背湿地には西村集会場の17世紀の豊島型五輪塔(図中A)を除いて分布しない(東かがわ歴史研究会2018・2019)。後背湿地の耕地や居住域への開発は、おそらくは近世以降を待たなければならなかったと考えられる。したがって弥生時代以降の集落は、前山丘陵や讃岐山脈にへばりつくように所在する段丘面や扇状地、あるいは与田川や湊川等が開析した谷底平野周辺に重層的に存在する。

なお、与田川は後述する領家変成帯に水源があり、流域は花崗岩質の堆積層を形成し、湊川の水源地は和泉層群に達し、河床には砂岩や泥岩等の堆積岩が花崗岩類に混じって多く見られる。弥生時代以降、和泉層群に由来する砂岩の河床礫は、砥石等の素材として利用されていたことが、遺跡からの出土資料により確認できる。

平野周囲の丘陵の谷部には、大小無数の谷池が築池され、平野部を貫流する河川とともに、丘陵前面の平野部の灌漑に現在も利用されている。谷池のいくつかは、古代や中世に遡るものが含まれる可能性は否定できない。一方平野部には、高松平野や丸亀平野に普遍的な平池は見られない。海浜部の平野部の大半が、上述した低湿な後背湿地で占められ、谷底平野や氾濫平野は丘陵前面裾部と湊川や与田川の流域に限られることから、谷池と河川のみで必要な灌漑用水が確保できたことが、平池を必要としなかった要因と想像される。

平野南部の讃岐山脈は、標高600～1000mの定高性に優れた尾根が連なる地壘山脈で、中生代後期白亜紀の珪長質深成岩類(領家変成帯)を基盤に、後期白亜紀に主に海底に堆積した礫岩や砂岩、泥岩等の和泉層群が、それを不整合に覆う。讃岐山脈北側の前山部分は、領家変成帯に属する花崗岩が分布する、風化の進んだ標高400～600mの丘陵性山地で、南側は檜原断層や田中断層により、讃岐山脈北面に数百mの高低差をもつ北向きの急斜面を形成し、北部を長尾断層が東西に走行して、平野部の南縁部を画している(長谷川・斉藤1989)。白鳥－大内平野は、その前山丘陵東端部に位置し、平野の周囲は標高200～400mの北山や那智山、虎丸山、与治山等の山塊によって圍繞される。それら山塊の山麓部は、風化によりマサ化した丘陵斜面部が天水等により浸食され、無数の舌状丘陵が発達し、標高を徐々に減じて7m付近まで続いて、平野に埋没する。その丘陵裾部に接して、例えば北山の東斜面部や、本



第3図 遺跡周辺地質図

遺跡東側の西村地区等に、小規模な更新世段丘が点在する。

白鳥・大内平野は、上述したように東～南～西の3方を、前山丘陵に連なる山塊により画された閉鎖的な空間を形成する。しかし、東は明神川上流の帰来山と翼山との鞍部(標高約20m)を介して引田地区と、南は湊川上流の鶴の田尾峠(標高約370m)を介して徳島県吉野川下流域と、西は玉の池川上流の北山南麓の小砂地区の峠(標高約40m)を介して津田湾沿岸地域や、北川上流の田面峠(標高約50m)を介して長尾盆地と、陸路によりそれぞれ連絡することが可能で、さらに各河川を利用した内陸部との舟運や、湊川あるいは与田川河口部に想定される『兵庫北関入船納帳』(林屋編1981)に記載された港津「三本松」を介して、海上交通により遠隔地ともアクセス可能な、交通の結節点としての恵まれた条件が付与された地域と評価できる。

さて遺跡は、番屋川南岸、那智山から北へ派生した舌状丘陵との間の谷底平野上に位置する。調査地と南側丘陵部との間は麓屑面に分類され、表土は浅く、基盤層には礫が多く混入し、耕作には不向きな地形面とされる。調査によって検出された大型灌漑水路SD093が、調査区内をほぼ東西に走行していることは、溝の開削が困難で漏水の危険性のある麓屑面を避けた可能性が考えられよう。

第5図は、遺跡周辺の耕作地の地表面の標高値を、国土地理院HPの地理院タイルより求め、それをもとに株式会社Cubicの描画ソフト「遺構くん2022」を用いて10cmコンタを描いたものである。近年の圃場整備等による土地の改変や、宅地等の造成による測点数の減少により、地形面の起伏が読み取りにくくなっており、その点は今後の周辺の考古学的調査により補う必要がある。しかしながら、図より概ね南西より北東方向へ流下する複数条の埋没河川が存在を指摘することが可能である。つまり、調査地周辺の微地形は、丘陵谷部より流下する埋没河川により、複数の微高地に区分されると考えられる。

江戸時代には町田村に編成され、寛永国絵図では入野郷に含まれる。寛永17年(1640)の生駒領高覚帳の町田村の高481石余であった。江戸後期には、商品作物である甘蔗の栽培と砂糖の生産が活発となった(小山泰弘1989「大川郡」『日本歴史地名大系第38巻 香川県の地名』)。

引用・参考文献

香川県 1974『阿讃山地開発地域土地分類基本調査 高松南部』

蔵本晋司 2019「香川県周辺地域における火花式発火法の導入と展開」『県道中徳三谷高松線建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告第1冊 上林遺跡』, 香川県教育委員会

長谷川修一・斉藤実 1989「讃岐平野の生い立ち-第一瀬戸内累層群以降を中心に-」『URBAN KUBOTA』No.28, 久保田鉄工株式会社

報告書

阿河鋭二 2002『高松廃寺・成重遺跡・樋端墳丘墓 白鳥町内所在遺跡発掘調査報告書』, 白鳥町教育委員会

阿河鋭二 2006『神越5号墳 民間土地造成事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』, 東かがわ市教育委員会

阿河鋭二 2007『王子の谷遺跡 農村総合整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』, 東かがわ市教育委員会

阿河鋭二 2010『寺前遺跡 工場誘致用地に係る埋蔵文化財調査報告書』, 東かがわ市教育委員会

阿河鋭二 2018『城泉遺跡 民間商業施設建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』, 東かがわ市教育委員会

植松邦浩 1998「西谷遺跡」『四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査概報 平成9年度』, 財団法人香川県埋蔵文化財調査センター

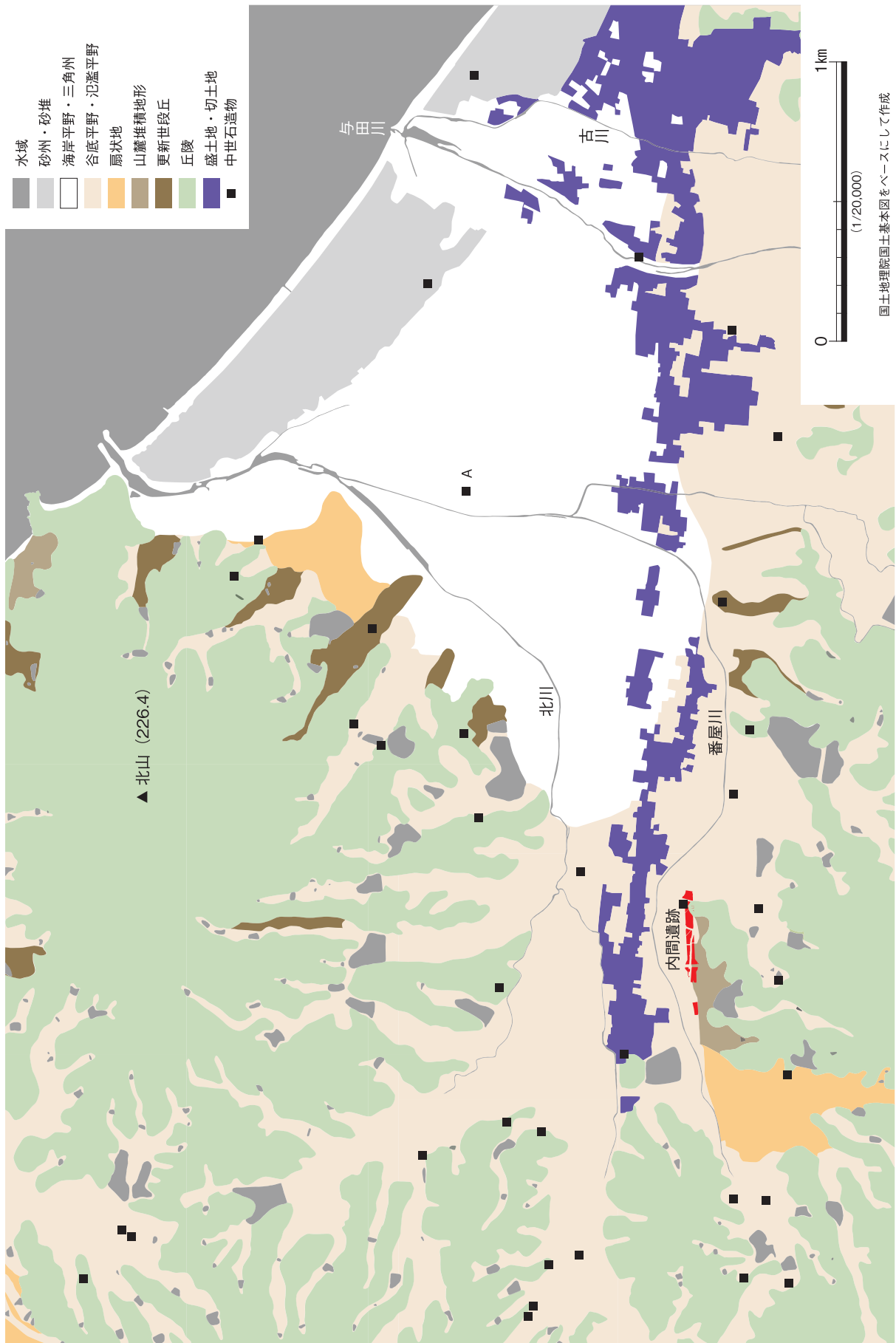
小野秀幸 2002『四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告第40冊 坪井遺跡』, 香川県教育委員会

香川県教育委員会 2003『香川県中世城館跡詳細分布調査報告書』

片桐孝浩 2002a『四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告第39冊 原間遺跡Ⅰ』, 香川県教育委員会

片桐孝浩 2002b『四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告第42冊 原間遺跡Ⅱ』, 香川県教育委員会

片桐孝浩 2002c『四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告第43冊 樋端遺跡』, 香川県教育委員会

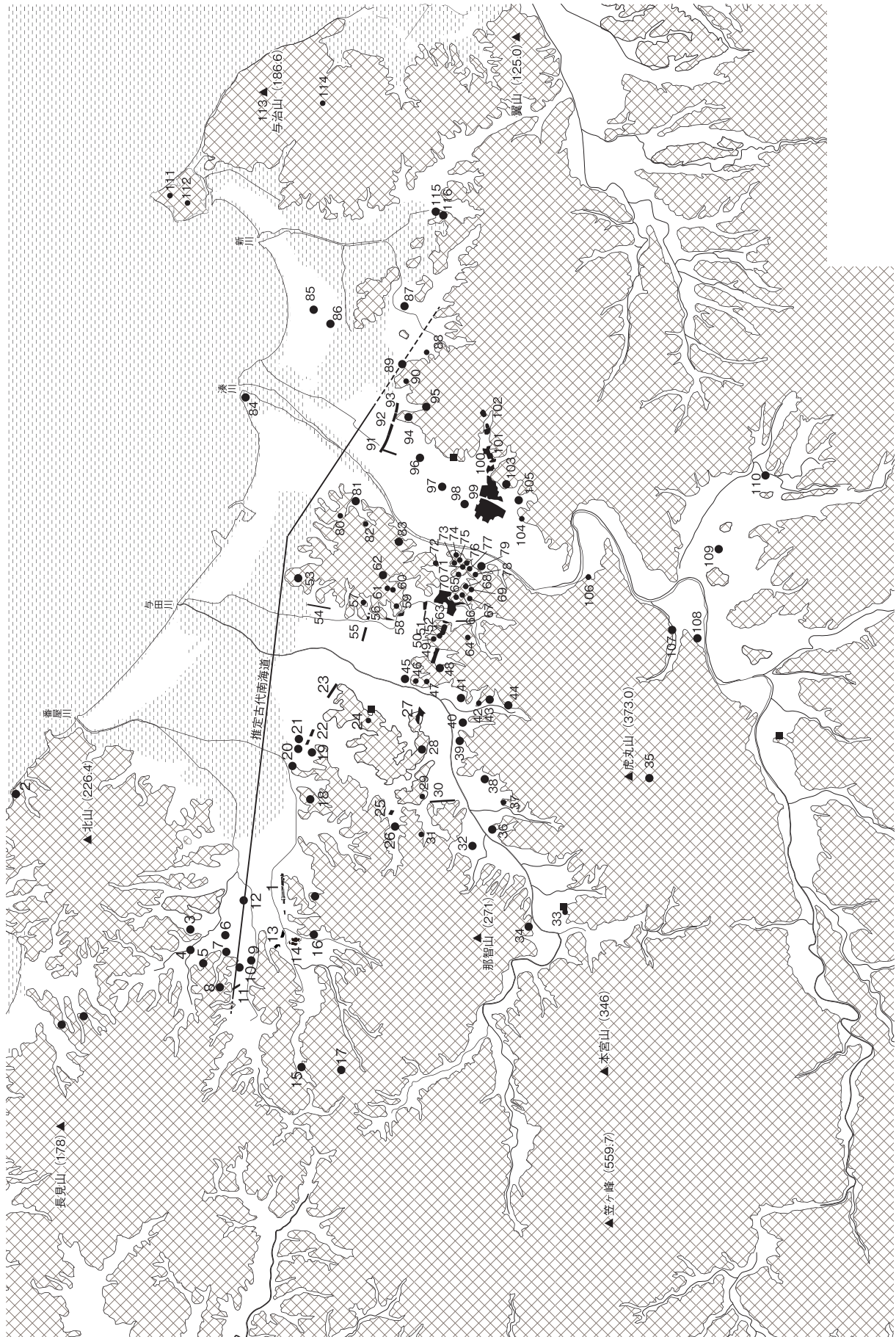


第4図 遺跡周辺地形分類図

- 蔵本晋司 2016 『国道 11 号大内白鳥バイパス改築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告第 1 冊 仲戸遺跡・仲戸東遺跡』, 香川県教育委員会
- 蔵本晋司 2017 『国道 11 号大内白鳥バイパス改築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告第 2 冊 誉水中筋遺跡』, 香川県教育委員会
- 蔵本晋司 2017 『国道 11 号大内白鳥バイパス改築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告第 3 冊 田中遺跡』, 香川県教育委員会
- 蔵本晋司 2018 『中小規模河川古川改修事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 小僧遺跡』, 香川県教育委員会
- 蔵本晋司 2020 『国道 11 号大内白鳥バイパス改築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告第 6 冊 三殿北遺跡』, 香川県教育委員会
- 蔵本晋司 2021 『国道 11 号大内白鳥バイパス改築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告第 7 冊 湊山下古墳』, 香川県教育委員会
- 長井博志 2004 『四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告第 52 冊 谷遺跡』, 香川県教育委員会
- 西岡達哉 2003 『四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告第 46 冊 池の奥遺跡・金毘羅山遺跡Ⅱ』, 香川県教育委員会
- 丹羽佑一・二川正徳・大守良太 1984 『藤井古墳』, 白鳥町教育委員会
- 信里芳紀 2017 『国道 11 号大内白鳥バイパス改築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告第 4 冊 城泉遺跡』, 香川県教育委員会
- 乗松真也・小野秀幸 2017 『県道白鳥引田線及び大内白鳥インター線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 川北遺跡・住屋遺跡』, 香川県教育委員会
- 乗松真也・山元素子 2021 『国道 11 号大内白鳥バイパス改築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告第 8 冊 山下岡前遺跡』, 香川県教育委員会
- 東かがわ歴史研究会 2019 『東かがわ市内中世石造物調査報告書』第 2 編 (旧白鳥町編), 東かがわ市歴史民俗資料館
- 東かがわ歴史研究会 2022 『東かがわ市内中世石造物調査報告書』第 3 編 (旧大内町編・補遺), 東かがわ市歴史民俗資料館
- 藤好史郎 1984 『大日山古墳・原間古墳』『香川県埋蔵文化財調査概報』, 香川県教育委員会
- 古野徳久 2004a 『四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告第 50 冊 善門池西遺跡』, 香川県教育委員会
- 古野徳久 2004b 『四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告第 51 冊 川北遺跡・三殿出口遺跡』, 香川県教育委員会
- 松田朝由 2019 『岡前地神社古墳』, 東かがわ市教育委員会
- 松本和彦・山元素子 2004 『四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告第 48 冊 大山遺跡・中谷遺跡・楠谷遺跡』, 香川県教育委員会
- 森下英治 2019 『国道 11 号大内白鳥バイパス改築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告第 5 冊 西村遺跡』, 香川県教育委員会
- 森格也 2001 『古川河川改修に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 原間遺跡』, 香川県教育委員会
- 森格也・信里芳紀・長井博志 2004 『四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告第 47 冊 成重遺跡Ⅰ』, 香川県教育委員会
- 森格也・長井博志 2005 『四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告第 54 冊 成重遺跡Ⅱ』, 香川県教育委員会
- 山下平重 2000 『四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告第 36 冊 金毘羅山遺跡Ⅰ・塔の山南遺跡・庵の谷遺跡』, 香川県教育委員会
- 山元素子・小野秀幸 2005 『県道大内白鳥インター線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 原間遺跡』, 香川県教育委員会



第5図 遺跡周辺 10cmコンタ図



第6図 周辺遺跡分布図

表2 周辺遺跡一覧

番号	遺跡名	所在地	種別	内容	調査年	調査主体	文献
1	内間遺跡	町田	集落	縄文自然河川、弥生土坑・土器棺墓・溝、古代掘立柱建物・土坑・溝、中世掘立柱建物・土坑・溝・溜井、近世	平成 26・27・29	県教委	本書
2	小磯北山狼煙場跡		城館	近世狼煙場			香川県教委 2003
3	王子の谷遺跡	土居	集落	古代～中世掘立柱建物群・溝	平成 8	旧大内町教委	阿河 2007
4		小砂	包蔵地	弥生			
5		小砂	包蔵地	中世			
6	土居居館跡	土居ほか	城館	中世			香川県教委 2003
7		土居	墓				
8	善光坊古墳	中山	古墳	古墳			
9	中山遺跡	土居・中山	その他	弥生～中世自然河川、近世井戸・溝	令和 1・2・4	県教委	
10	中山北遺跡	中山	集落	縄文晩期竪穴建物？、中世掘立柱建物、近世井戸	令和 4	県教委	
11	坪井遺跡	中山	集落	弥生溝、古代掘立柱建物・井戸・道路、中世掘立柱建物	平成 10	県教委	小野 2002
12	土居遺跡	土居	包蔵地				
13	三殿北遺跡	三殿	集落	古代土坑・大型水路、中世掘立柱建物・土坑・井戸	平成 28・29	県教委	蔵本 2020
14	三殿出口遺跡	三殿	集落	弥生土坑、中世火葬墓、近世井戸・砂槽竈	平成 11	県教委	吉野 2004
15	円仏寺北遺跡	中山	集落	中世			
16	三殿経塚	三殿	経塚	中世			
17	城守山城跡	三殿・中山	城館	中世			香川県教委 2003
18	西村清塚	西村	経塚	中世			
19	落合遺跡	落合・西村	包蔵地	弥生			
20	清塚古墳	西村	古墳	古墳円墳			
21	西村古墳	西村	古墳	古墳円墳			
22	西村遺跡	西村	集落	弥生竪穴建物、古代掘立柱建物・溝・鍛冶炉・銅溶炉	平成 25・26	県教委	森下 2019
23	誉水中筋遺跡	中筋	集落	弥生～古墳自然河川、中世掘立柱建物・土坑・火葬墓	平成 20	県教委	蔵本 2017
24	与田寺山古墳	中筋	古墳	古墳			
25	楠谷遺跡	水主	集落	弥生掘立柱建物、古墳溝	平成 9	県教委	松本・山元 2004
26	川田池西遺跡	水主	集落	古代			
27	金尾羅山遺跡	水主	包蔵地	弥生竪穴建物・土器棺墓・溝・自然河川、古墳竪穴建物、方墳、中世掘立柱建物・土坑、近世井戸・砂槽竈	平成 10・11	県教委	山下 2000・西岡 2003
28	高原遺跡	水主	墓	弥生土器棺墓			
29	北山遺跡	水主	包蔵地	弥生土器棺墓？			
30	仲善寺遺跡	水主	包蔵地				
31	楠谷古墳	水主	古墳	古墳			
32	大社遺跡	水主	包蔵地	弥生			
33	水主神社古墳	水主	古墳	古墳			
34	西内遺跡	水主	包蔵地				
35	虎丸城跡	水主	山城	中世			香川県教委 2003
36	長尾山遺跡	水主	包蔵地				
37	岩瀬古墳	水主	古墳	古墳			
38	風呂遺跡	水主	包蔵地				
39	登塚遺跡	水主	包蔵地	弥生土器棺墓？			
40	城ノ内遺跡	水主	包蔵地				
41	別所池田遺跡	水主	包蔵地				
42	別所古墳	水主	古墳	古墳			
43	別所遺跡	水主	包蔵地	弥生土器棺墓？			
44	飛谷遺跡	水主	包蔵地				
45	杖ノ端遺跡	水主	包蔵地				
46	塔の山遺跡	水主	その他の墓	弥生			
47	塔の山南遺跡	川東	古墳	弥生～古墳石蓋土壇墓・箱式石棺・土壇墓	平成 10	県教委	山下 2000
48	西谷南遺跡	川東	集落	中世			
49	西谷遺跡	川東	集落	中世掘立柱建物・溝	平成 9	県教委	植松 1998
50	原岡 3号墳	川東	古墳	古墳中期円墳（粘土器 2）	平成 10	県教委	片桐 2002b
51	原岡 4号墳	川東	古墳	古墳中期円墳（木棺直葬）	平成 10	県教委	片桐 2002b
	原岡 7号墳	川東	古墳	古墳中期円墳（箱式石棺）	平成 10	県教委	片桐 2002b
52	原岡 8号墳	川東	古墳	古墳箱式石棺墓	平成 10	県教委	片桐 2002b
	原岡 9号墳	川東	古墳	古墳中期円墳	平成 10	県教委	片桐 2002b
	原岡 10号墳	川東	古墳	古墳中期円墳（粘土器）	平成 10	県教委	片桐 2002b
53	讃登道八の瀬跡	三本松	窯	近世陶器窯			
54	住居遺跡	川東	集落	古墳竪穴建物・掘立柱建物	平成 9・10	県教委	乗松・小野 2017
55	仲戸遺跡	川東	集落	縄文自然河川、弥生溝・自然河川、中世土坑	平成 20	県教委	蔵本 2016
56	仲戸東遺跡	川東	生産	古墳埴輪生産関連遺構、古代掘立柱建物・溝	平成 20・25	県教委	蔵本 2016
57	古墳	川東	古墳	古墳円墳（竪穴式石室？）			
58	小僧遺跡	川東	集落	弥生～古墳自然河川、中世耕作痕、近世土坑	平成 12	県教委	蔵本 2018
59	大日山 3号墳	川東	古墳	古墳			
60	大日山古墳	川東	古墳	古墳前期前方後円墳			藤好 1984
61	大日山 2号墳	川東	古墳	古墳前期箱式石棺			
62	高松庵寺	白鳥	寺院	古代瓦陶兼兼窯・木炭窯	平成 10・11	旧白鳥町教委	阿河 2002
63	原岡遺跡	川東	集落	弥生竪穴建物・土坑・土器棺墓・溝・自然河川、古墳竪穴建物・円墳、古代掘立柱建物・土坑・井戸・溝、中世掘立柱建物・土坑、近世砂槽竈	平成 9・11～13	県教委	森 2001、片桐 2002a、山元・小野 2005
64	原岡古墳	川東	古墳	古墳後期円墳（横穴式石室）			藤好 1984
65	原岡 2号墳	川東	古墳	古墳後期円墳（横穴式石室）	平成 10	県教委	片桐 2002b
66	原岡 5号墳	川東	古墳	古墳中期円墳（土壇墓 2）	平成 10	県教委	片桐 2002b
67	原岡 6号墳	川東	古墳	古墳中期円墳（木棺直葬）	平成 10	県教委	片桐 2002b
68	桶塚 1号墳	白鳥	古墳	古墳円墳	平成 10	県教委	片桐 2002c
69	桶塚 2号墳	白鳥	古墳	古墳中期円墳（木棺直葬？）	平成 10	県教委	片桐 2002c
70	桶塚墳丘墓	白鳥	弥生	弥生墳丘墓（木塚？）	平成 12	旧白鳥町教委	阿河 2002
71	神越 1号墳	白鳥	古墳	古墳			
72	神越 6号墳	白鳥	古墳	古墳			
73	神越 5号墳	白鳥	古墳	古墳後期円墳（横穴式石室）	平成 15	市教委	阿河 2006
74	桶塚北遺跡	白鳥	弥生	弥生土壇墓（木棺墓）群・土器棺墓	平成 13	旧白鳥町教委	阿河 2006
75	神越 4号墳	白鳥	古墳	古墳			
76	神越 2号墳	白鳥	古墳	古墳後期円墳（横穴式石室）	平成 10	県教委	片桐 2002c
77	寺前遺跡	白鳥	弥生	弥生土壇墓（木棺墓）群・土器棺墓群、近世土壇墓	平成 21	市教委	阿河 2010
78	桶塚遺跡	白鳥	弥生	弥生竪穴建物・台状墓・土壇墓（木棺墓）群・土器棺墓群	平成 10	県教委	片桐 2002c
79	神越 3号墳	白鳥	古墳	古墳中期円墳（木棺直葬）	平成 10	県教委	片桐 2002c
80	神越遺跡	白鳥	包蔵地				
81	岡前地神社古墳	白鳥	古墳	古墳中期前方後円墳？（銅板式石棺）	平成 28～30	市教委	松田 2019
82	山下前遺跡	白鳥	寺院	古代寺院（法起寺式）			
83	山下古墳	白鳥	古墳	弥生竪穴建物、古墳後期竪穴式石室 4、古代掘立柱建物（簡房）・溝	平成 24	県教委	乗松・山元 2021
84	漆川狼煙場跡	漆	城館	近世	平成 24	県教委	蔵本 2021
85	松原遺跡	松原	包蔵地	弥生			香川県教委 2003
86	須崎山遺跡	松原	生産	古代須置器窯？			
87	帰来遺跡	帰来	包蔵地	中世			

内間遺跡 (香川県教育委員会 2024年)

番号	遺跡名	所在地	種別	内容	調査歴	調査主体	文献
88	赤坂古墳	福来	古墳	古墳後期円墳(横穴式石室)	令和3	県教委	
89	田高田北遺跡	福来	包蔵地	古代			
90	秋葉神社古墳	福来	古墳	古墳			
91	田中遺跡	白鳥	集落	縄文自然河川、弥生堅穴建物・掘立柱建物・土坑・古墳堅穴建物、古代掘立柱建物、中世土坑・溝、近世土坑・溝	平成22	県教委・市教委	蔵本2017
92	城泉遺跡	白鳥	集落	弥生土坑・古墳堅穴建物・土坑・溝・自然河川、古代掘立柱建物	平成23・26・30・令和2・3	県教委・市教委	信里2017、阿河2018
93	城泉東遺跡	白鳥	集落	縄文自然河川、近世土坑・井戸	令和3	県教委	
94	白鳥城跡	白鳥	城館	中世			香川県教委2003
95	田ノ口東奥遺跡	白鳥	包蔵地	弥生			
96	寺元遺跡	白鳥	包蔵地	弥生			
97	藪西遺跡	白鳥	包蔵地	中世			
98	中戸遺跡	白鳥	集落	古代、中世			
99	成重遺跡	白鳥	集落	縄文包含層、弥生堅穴建物・掘立柱建物・土坑・井戸・土器棺墓・周溝墓、古墳堅穴建物・円墳(横穴式石室)、自然河川、古代掘立柱建物・土坑、中世掘立柱建物・土坑・井戸・溝、近世土坑・砂踏籠・溝	平成9～11	県教委・旧白鳥町教委	阿河2002、森・信里・長井2004、森・長井2005
100	谷遺跡	白鳥	生産	弥生堅穴建物、中世掘立柱建物・土坑・溝、近世階段状連房式登窯	平成11	県教委	長井2004
101	善門池西遺跡	白鳥	集落	弥生堅穴建物・土坑・溝、古墳堅穴建物・土坑、中世土坑・溝、近世墓	平成9～11	県教委	古野2004a
102	池の奥遺跡	白鳥	集落	弥生堅穴建物・土坑・溝・谷	平成10	県教委	西岡2003
103	成重北遺跡	白鳥	集落	弥生			
104	観音谷古墳	白鳥	古墳	古墳			
105	成重南遺跡	白鳥	包蔵地	弥生			
106	藤井古墳	白鳥	古墳	古墳後期円墳(横穴式石室)		旧白鳥町教委	丹羽・三川・大守1984
107	金明寺跡	西山	寺院	中世			
108	漆遺跡	西山	包蔵地	中世			
109	東門坊遺跡	東山	包蔵地	中世			
110	薄森遺跡	東山	集落	中世			
111	遠見香所跡	松原	城館	近世			香川県教委2003
112	蕨越山鎧塚跡	松原	城館	近世			香川県教委2003
113	鑿山城跡	松原	城館	中世			香川県教委2003
114	蜀峯狼煙場跡	松原・引田	城館	近世			香川県教委2003
115	上伊座北遺跡	伊座	包蔵地				
116	上伊座南遺跡	伊座	包蔵地				

第3章 調査の成果

第1節 調査の方法と成果

調査対象地は、東西延長約446.1 m、南北幅25～39 mと東西に長く、調査前は後述するように基本的に水田等の耕作地として利用されていた。また、調査区内を農道や水路等が縦横に横断し、こうした工作物や地割等を勘案して、調査区を東より順に1～14区の14調査区25小区に区分して、調査を実施した(第7図)。なお、2・3区の南側には、北へ張り出した舌状丘陵の先端部が用地に含まれており、この部分については平成26年度に5箇所のトレンチを設定して調査を実施した。各調査区の実掘面積は、最小は9区の137㎡、最大は3区の780㎡である。また、現地表面の標高は、西端の14区が17.2 m前後、東端の1区が11.4 m前後と緩やかに東へ傾斜する。

調査は、平成26年度は埋蔵文化財センターが作業員を直接雇用する直営方式、平成27・29年度は業者に委託する支援委託方式により実施した。基本的に重機により遺構面まで掘削し、それ以下は人力にて掘り下げを行なった。遺構面下の包含層の掘り下げは、一部重機を使用した。また、測量に要する基準杭は、業者に委託して設置した。調査に際してグリットは設定せず、各調査小区が比較的狭小なため、包含層等の出土遺物については、必要に応じてトータルステーションで出土位置を測量・記録し、出土状況を写真撮影して取り上げた。調査で作成した遺構平面図は、調査員等がトータルステーションで測量し、株式会社CUBICの描画ソフト「遺構くんCUBIC」で作図・作成した。遺物の出土状況等の詳細な図面や土層断面図等は、現地で調査員等が手実測により作成した。また、遺構や遺物出土状況等の調査時の写真は、調査員が撮影した。

遺構名は、調査時には各調査区単位に付したが、本書を作成するにあたり、柱穴を除いた全ての遺構について、新たな番号に変更して統一した。遺構の種別については、調査時の担当者の所見を尊重し、調査時に土坑としたものが、掘立柱建物の柱穴であった等の明らかに齟齬が生じたものを除いて、基本的に変更していない。なお、調査区名は調査時のものをそのまま踏襲した。

第2節 基本層序

土層序の観察は、基本的に各調査区の壁面において記録した。調査地は、専ら水田等の耕作地として利用されており、主に近世以降の耕地造成時の地下げや盛土、近年の圃場整備等による大規模な改変、そして旧地形の相違等により、各調査区の層序の堆積状況には多少の相違が認められる。以下に、丘陵部とそれ以外の個別の調査区単位に、層序の堆積記録を掲載し所見を記載する。なお、既述したように調査は複数年次に及び、多数の調査員が土層序の記録に携わっているが、層序の記載にさほど大きな矛盾等は認められず、後述した点を改めた以外は、些細な語句を統一したのみで、調査時の記録を掲載した。

なお、各調査区の層序記録について、ほぼ全ての調査区で、記録された堆積物が旧耕作土等や遺構埋土等の人為的な堆積物であるのか、包含層や無遺物層等の自然堆積物であるのかの判断は、一部を除いて記載されていなかった。それらについては、妥当と判断される範囲で、土層図とそれに記載された堆積物の色調や土質から判断し、写真等の調査記録を参照して、調査時の記録と区別するため「？」を付して記載し、後述する遺構面の判断材料とした。また、調査時の所見を改めた点については、根拠を提

示して改変を行なった。遺構面の記載も認められなかったため、遺構埋土と考えられる堆積物を鍵として、平面記録を参照しながら、土層図に追記した。さらに、土色や土質の不記載や、隣接する小区間の同一堆積物における色調や土質の相違、複数の堆積物間において上下関係の逆転、層界線の断絶、平面記録との不整合等が見られたが、それらについては追記や改変等を行わず、調査記録のまま提示した。

丘陵部

2・3区南側の丘陵地区は、平成26年度の試掘調査前には4段程度の階段状に大きく改変され、下位段には果樹が植栽され、頂部は墓地として利用されていた。上述したように、丘陵端の下位3段が用地内に位置し、中位2段についてトレンチ調査を実施した(第7図)。下位段に2・4・5トレンチ、上位段に1・3トレンチを、等高線にそれぞれ直交ないし平行になるように設定した。土層序はトレンチ壁面において観察し、記録した。

各トレンチの層序は、基本的には現耕作土下で各2～3層に細分される旧耕作土や流入土とされる花崗土が緩やかに斜面堆積し、近世以降の遺物が出土した。その下面で、無遺物の花崗土や岩盤が露出し、ベース面となる。2トレンチでは、ベース層上面で樹木根の擾乱によるとみられる起伏が顕著にみられ、上位段の1・3トレンチでは、現耕作土下で上面を大きく削奪されたベース層が露出した。かろうじて3トレンチ北半部において、斜面堆積した花崗土下で削奪を免れた丘陵斜面部を確認したが、遺構は認められなかった。

上述した調査結果より、丘陵部のテラス面は近世以降と考えられる耕地化により大きく削奪されており、2トレンチを中心に少量の弥生土器とみられる土器小片が出土したことから、弥生時代の遺構が所在した可能性も考えられたが、それ以外の時期を含め、後世の削奪により消滅した可能性が高いと判断した。

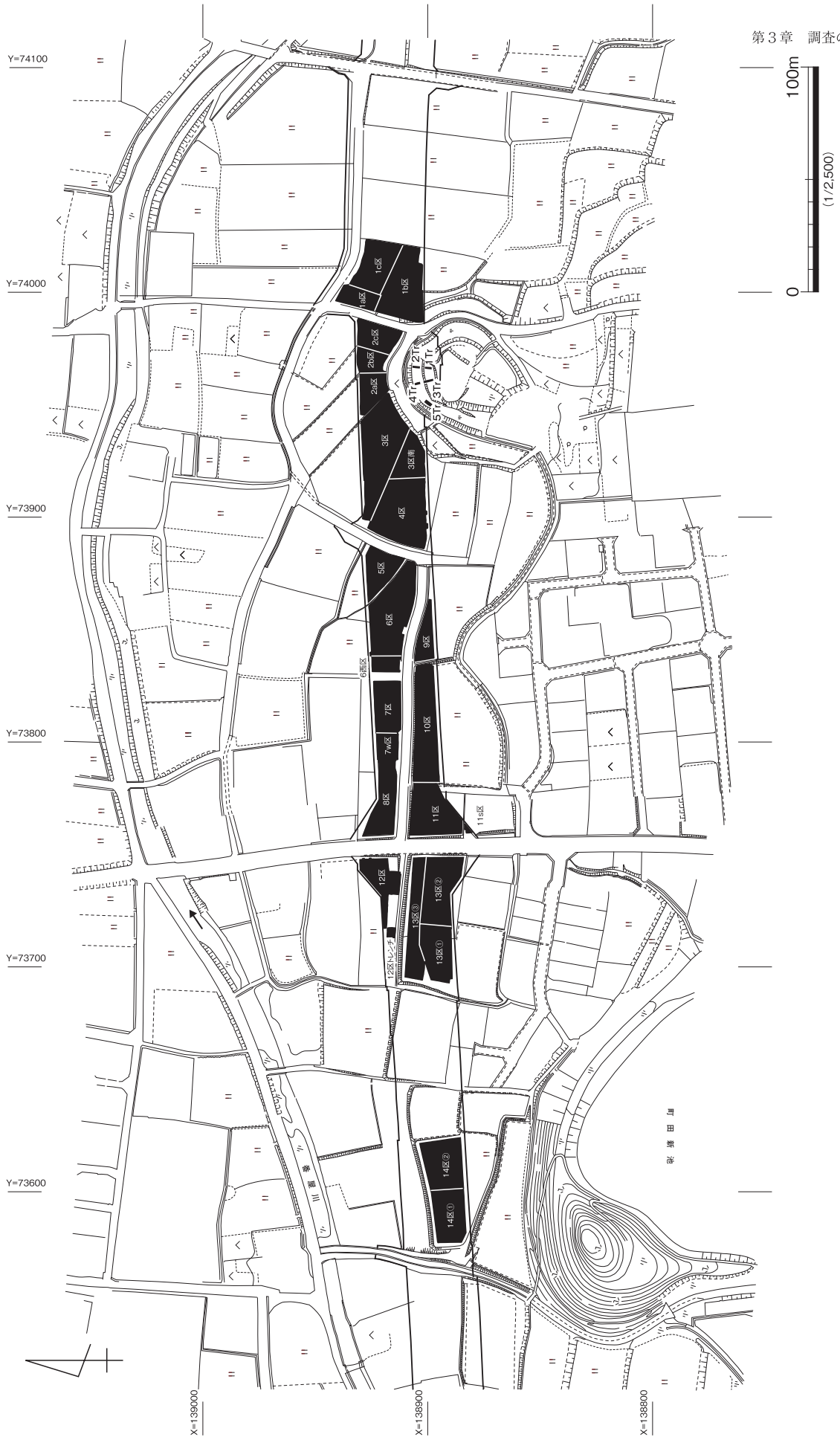
以上の結果より、丘陵部については、試掘調査のみで本発掘調査は不要と判断された。

1区

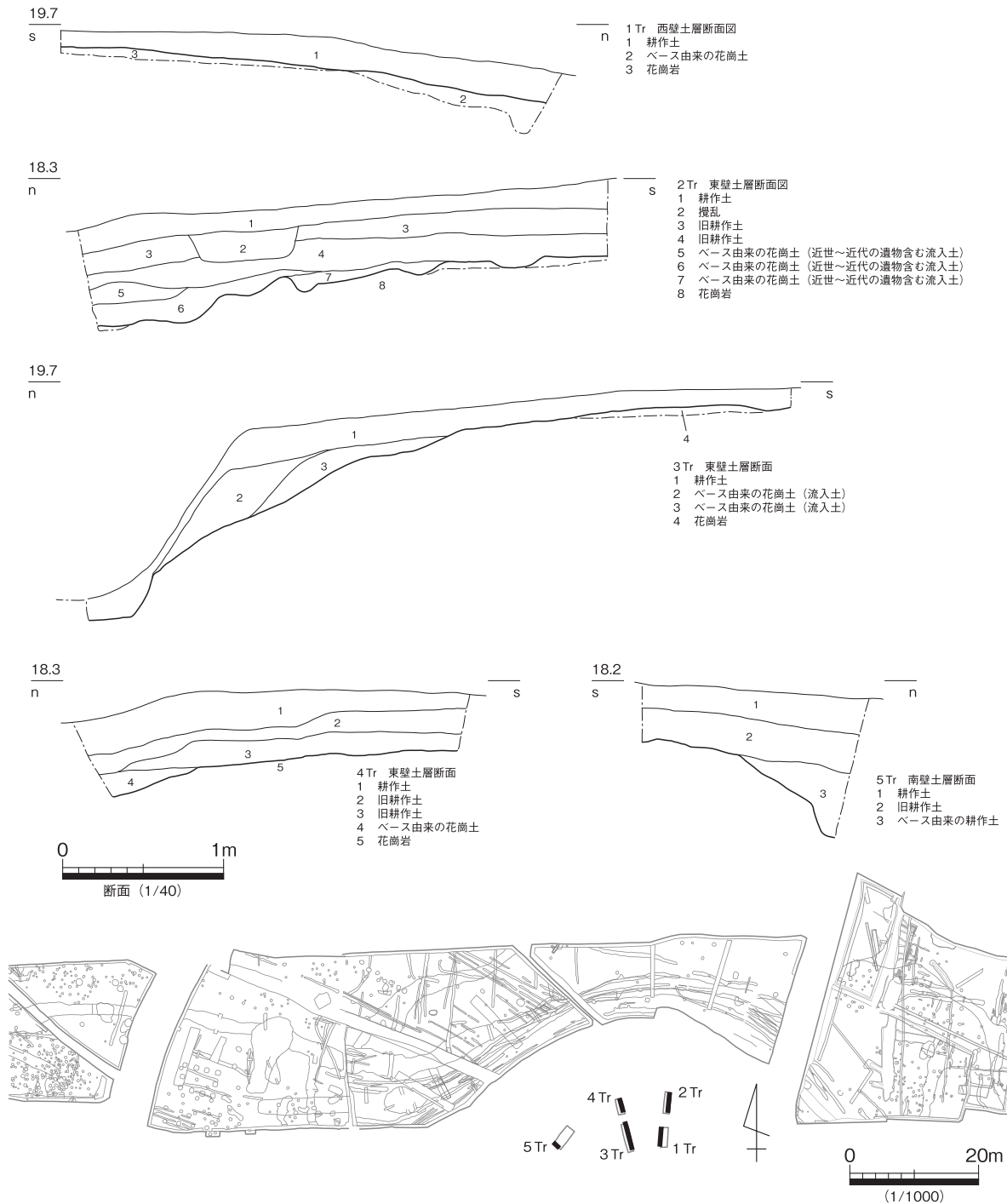
1区は、調査地東端の調査区で、1-a・1-b・1-c区の3小区に区分して調査を実施した。実掘面積は約958㎡で、調査前は2筆に分筆され、北側が宅地、南側が耕作地として利用されていた。小区毎に壁面の観察記録が作成されており、東・西・南壁については各小区の記録を編集し、1-a区北・東壁については個別に以下報告する。基本層序は各壁面により相違が認められることから、壁面毎に記載する。

東壁(第9図)では、宅地に伴う造成土(1層)の下位に、宅地化以前の耕作土(2層)の水平堆積が残存し、その下位に13層に細分される旧耕作土や床土の水平堆積(4～9・12～18層)が認められた。これら旧耕作土や床土の下面で、SX01(19層)やSD017(20層)等の遺構を確認し、本遺構面を第1遺構面とする。第1遺構面の標高は、11.8～11.9m前後である。SX01やSD017からは、中世13～14世紀代の遺物が出土しており、本遺構面は中世前半期以降の時期が想定される。また、本遺構面に帰属する21層は、土色等の記録はなく単に「中世の落ち込み」として記録されているが、平面図等に当該遺構に関する記録はなく、詳細は不明である。なお、調査時の記録では、21層の南側の22層とした部分は、同様に「中世の落ち込み」との記録があるのみであったが、土層の連続性から考えて、第1遺構面のベース層である包含層に連続する堆積層とした。

この22層は、調査区中央部付近から南にかけて層厚0.1m前後で水平堆積しており、層下面には顕

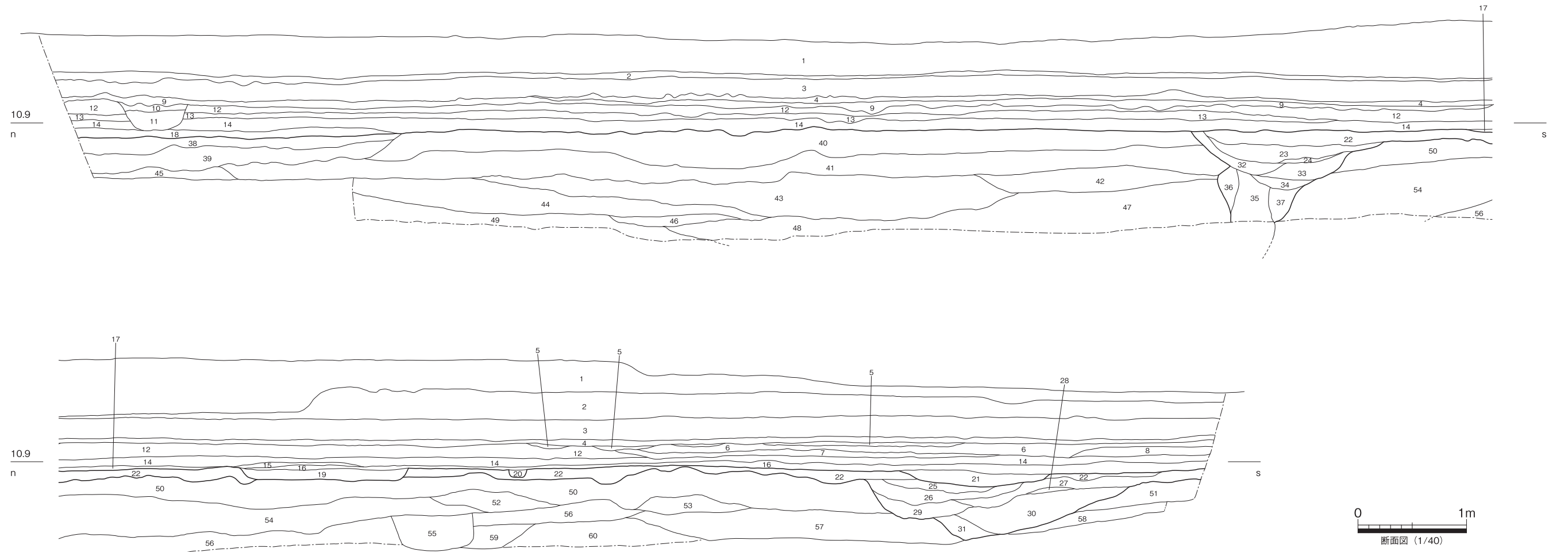


第7図 調査区配置図



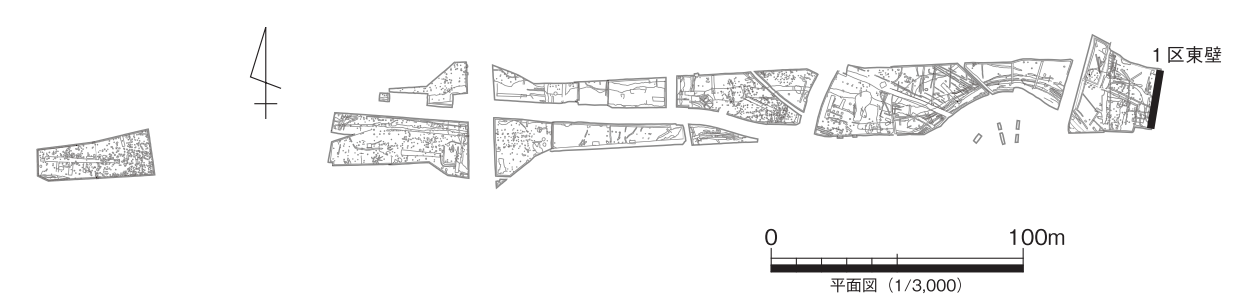
第8図 1～5トレンチ断面図

著な起伏が認められる。調査記録で「旧耕作土」としているが、本層からの出土遺物は皆無で、堆積時期は不明である。本層の下面で、SD016 (23～25層)を確認したことから、本遺構面を第2遺構面とする。第2遺構面の標高は、11.7～11.85mを測り、若干の起伏が認められる。23・24層の下面には、32～34層がレンズ状に堆積し、その下位には35～37層が堆積する。調査記録では、32～34層は遺構の埋土であるのか、包含層であるのか記載がなく不明である。また、35・36層は後述する自然河川SR01の堆積層の一部として記録されているが、37層を含めて一連の堆積層との理解も可能で、SR01

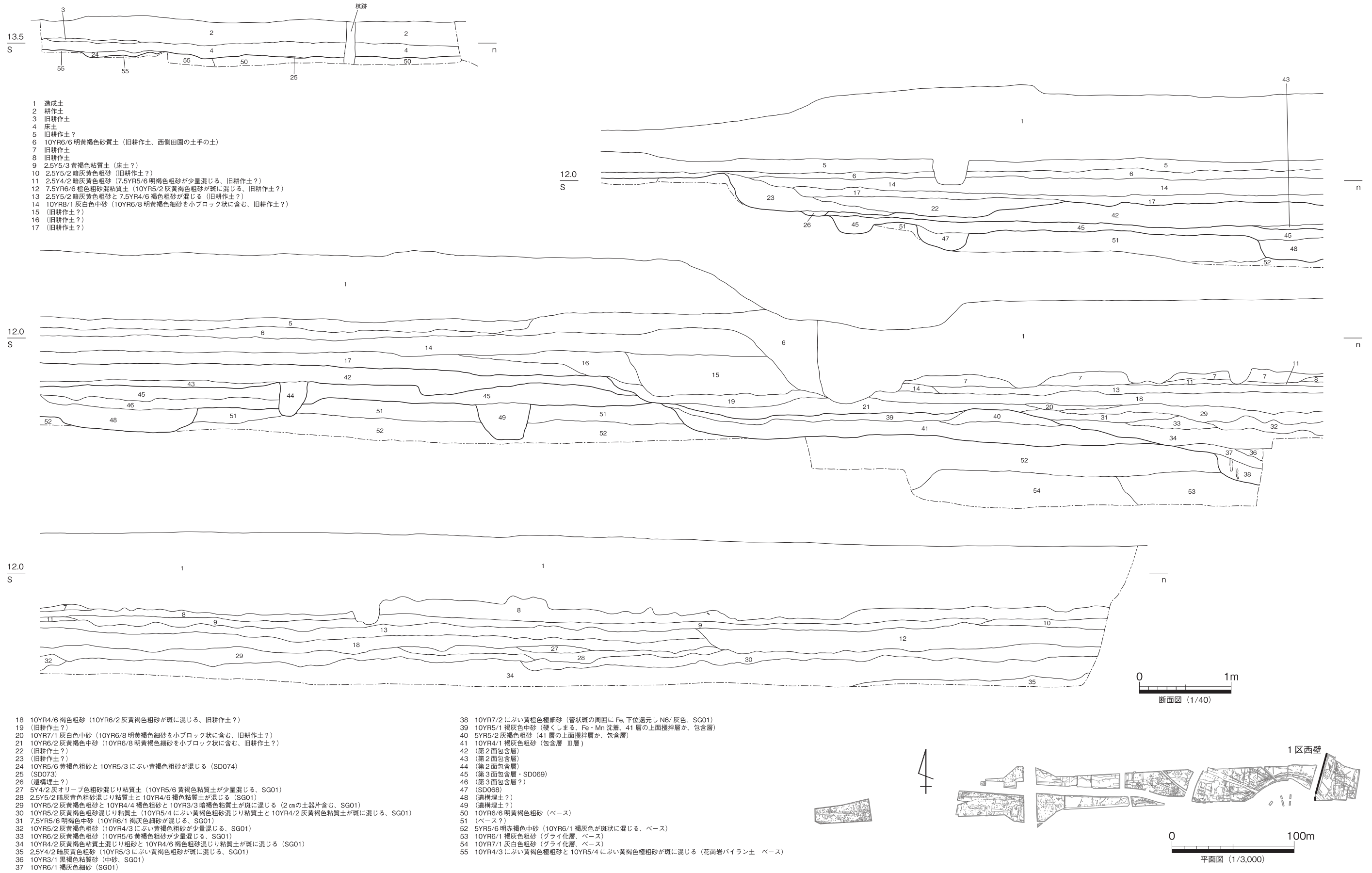


- 1 花崗土 (宅地造成のための造成土)
- 2 耕作土 (地上後の耕作土)
- 3 花崗土 (盛土)
- 4 旧耕作土
- 5 旧耕作土
- 6 床土
- 7 床土
- 8 床土
- 9 床土
- 10 (近・現代水路)
- 11 (近・現代水路)
- 12 床土
- 13 床土
- 14 床土
- 15 床土
- 16 床土
- 17 床土
- 18 床土
- 19 (SX01)
- 20 (SD017)
- 21 (中世包含層)
- 22 10YR4/2 灰黄褐色粗砂混じり粘質土と10YR4/6 褐色粘質土が混じる (上位にMn沈着、包含層?)
- 23 10YR4/3 にぶい黄褐色細砂混じり粘質土と10YR3/4 暗褐色粘質土がブロック状に混じる (土器が完形に近い状態で出土、SD016)
- 24 (SD016)
- 25 10YR4/2 灰黄褐色細砂混じり粘質土 (10YR3/4 暗褐色粘質土が混じる、土器が完形に近い状態で出土、SD016)
- 26 10YR4/2 灰黄褐色極細砂～細砂混じり粘質土 (10YR4/6 褐色粘質土が小ブロック状に少量混じる、遺構埋土?)
- 27 10YR4/2 灰黄褐色粗砂混じり粘質土 (10YR3/4 暗褐色粘質土がブロック状に混じる、遺構埋土?)
- 28 10YR4/2 灰黄褐色粗砂混じり粘質土 (10YR3/4 暗褐色粘質土が少量混じる、遺構埋土?)
- 29 10YR4/1 褐灰色極細砂混じり粘質土 (10YR4/3 にぶい黄褐色粘質土が混じる、遺構埋土?)
- 30 10YR3/2 黒褐色粗砂・砂礫・細砂がラミナ状に堆積 (SD018)
- 31 10YR5/2 灰黄褐色極細砂～細砂 (SD018)
- 32 10YR4/2 灰黄褐色極細砂 (土器少片を少量含む、遺構埋土?)
- 33 10YR5/2 灰黄褐色極細砂混じり粘質土と10YR4/4 褐色粘質土が混じる (遺構埋土?)
- 34 10YR5/2 灰黄褐色極細砂混じり粘質土と10YR4/5 褐色粘質土が混じる (遺構埋土?)
- 35 10YR3/2 黒褐色粗砂混じり粘質土 (花崗岩由来の礫が目立つ、遺構埋土?)
- 36 10YR4/2 灰黄褐色粘質土混じり極細砂 (遺構埋土?)
- 37 10YR4/3 にぶい黄褐色粘質土混じり粗砂 (遺構埋土?)
- 38 10YR4/3 にぶい黄褐色極細砂～粗砂 (固くよくしまりMn沈着、SR01)
- 39 10YR3/3 暗褐色細砂～粗砂 (Feが少量沈着、SR01)
- 40 10YR5/4 にぶい黄褐色細砂～砂礫 (Mn沈着、SR01)

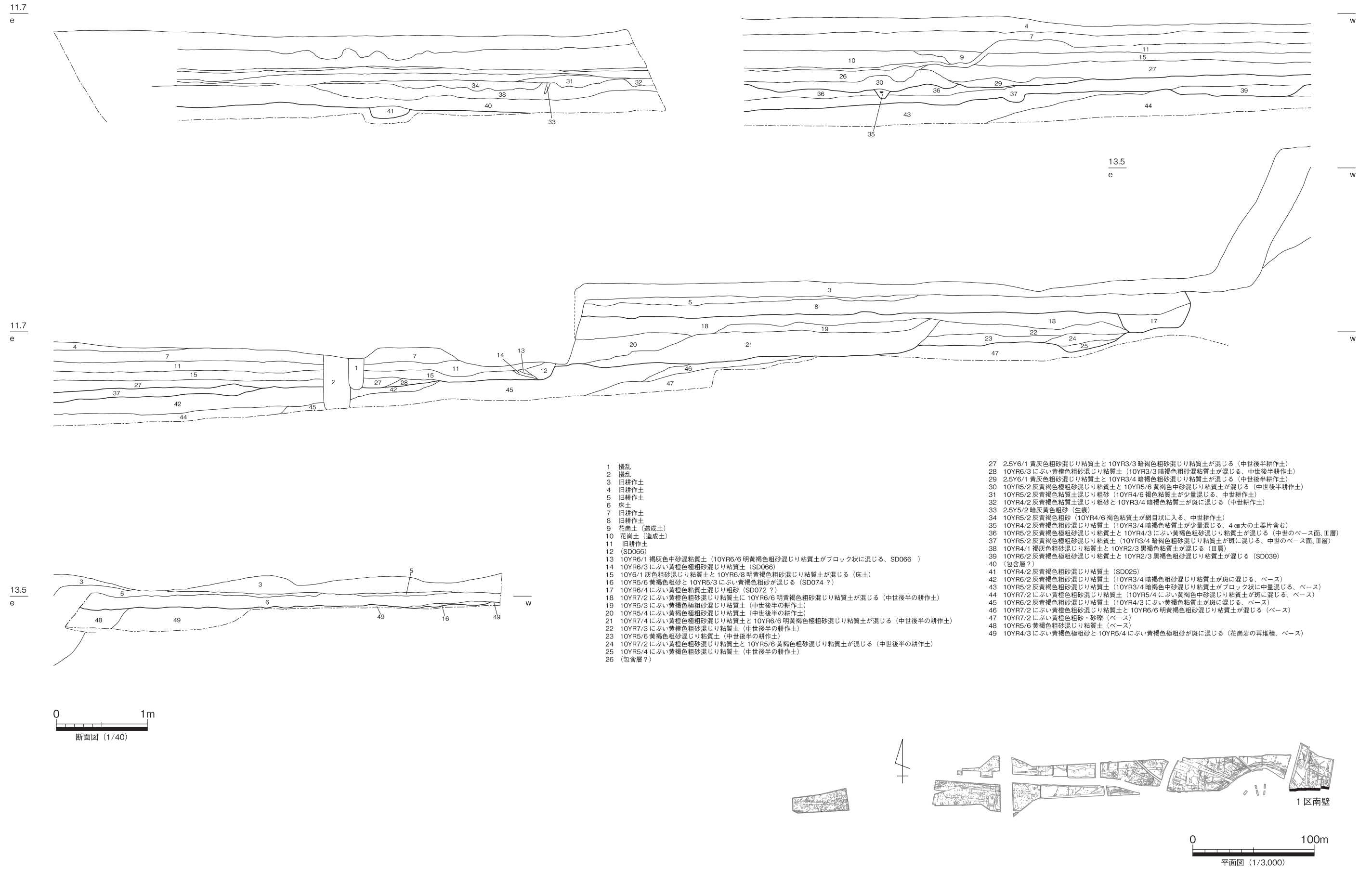
- 41 10YR4/4 褐色粗砂 (SR01)
- 42 10YR5/2 灰黄褐色細砂 (SR01)
- 43 10YR4/3 にぶい黄褐色粗砂 (SR01)
- 44 10YR5/4 にぶい黄褐色粗砂 (全体的にFeが沈着し赤色化、SR01)
- 45 10YR5/3 にぶい黄褐色細砂 (SR01)
- 46 10YR6/3 にぶい黄褐色シルト～極細砂 (SR01)
- 47 10YR3/2 黒褐色細砂～粗砂 (10YR5/3 にぶい黄褐色極細砂が少量ラミナ状に堆積、SR01)
- 48 10YR5/3 にぶい黄褐色シルト・粗砂・細砂ラミナ (SR01)
- 49 10YR5/3 にぶい黄褐色シルト・粗砂が混じり、10YR4/4 褐色粘質土が混じる (SR01)
- 50 2.5Y5/2 暗灰黄色粘質土混じり粗砂 (10YR3/4 暗褐色粘質土が小ブロックが中量混じる、花崗岩由来の黄色礫が目立つ、SR02)
- 51 10YR4/2 灰黄褐色粗砂～砂礫 (SR02)
- 52 10YR4/3 にぶい黄褐色粗砂～砂礫 (土器片少量含む、SR02)
- 53 10YR4/2 灰黄褐色粗砂～砂礫 (SR02)
- 54 10YR5/2 灰黄褐色粗砂～砂礫 (SR02)
- 55 10YR4/2 灰黄褐色粗砂～砂礫 (SR02)
- 56 10YR4/2 灰黄褐色粘質土混じり粗砂～砂礫 (10YR3/4 暗褐色粘質土がブロック状に少量混じる、SR02)
- 57 2.5Y5/2 暗灰黄色極細砂～粗砂 (2.5Y4/1 黄灰色粘質土がブロック状に少量混じる、SR02)
- 58 10YR4/3 にぶい黄褐色粘質土混じり粗砂 (SR02)
- 59 (SR02?)
- 60 10YR6/4 にぶい黄褐色粘質土混じり粗砂と10YR4/4 褐色粗砂が混じる (SR02)



第9図 1区東壁土層断面図



第10図 1区西壁土層断面図



- 1 攪乱
- 2 攪乱
- 3 旧耕作土
- 4 旧耕作土
- 5 旧耕作土
- 6 床土
- 7 旧耕作土
- 8 旧耕作土
- 9 花崗土 (造成土)
- 10 花崗土 (造成土)
- 11 旧耕作土
- 12 (SD066)
- 13 10YR6/1 褐色中砂混粘質土 (10YR6/6 明黄褐色粗砂混じり粘質土がブロック状に混じる、SD066)
- 14 10YR6/3 にぶい黄褐色極粗砂混じり粘質土 (SD066)
- 15 10Y6/1 灰色粗砂混じり粘質土と10YR6/8 明黄褐色粗砂混じり粘質土が混じる (床土)
- 16 10YR5/6 黄褐色粗砂と10YR5/3 にぶい黄褐色粗砂が混じる (SD074?)
- 17 10YR6/4 にぶい黄褐色粘質土混じり粗砂 (SD072?)
- 18 10YR7/2 にぶい黄褐色粗砂混じり粘質土に10YR6/6 明黄褐色粗砂混じり粘質土が混じる (中世後半の耕作土)
- 19 10YR5/3 にぶい黄褐色極粗砂混じり粘質土 (中世後半の耕作土)
- 20 10YR5/4 にぶい黄褐色極粗砂混じり粘質土 (中世後半の耕作土)
- 21 10YR7/4 にぶい黄褐色極粗砂混じり粘質土と10YR6/6 明黄褐色極粗砂混じり粘質土が混じる (中世後半の耕作土)
- 22 10YR7/3 にぶい黄褐色粗砂混じり粘質土 (中世後半の耕作土)
- 23 10YR5/6 黄褐色粗砂混じり粘質土 (中世後半の耕作土)
- 24 10YR7/2 にぶい黄褐色粗砂混じり粘質土と10YR5/6 黄褐色粗砂混じり粘質土が混じる (中世後半の耕作土)
- 25 10YR5/4 にぶい黄褐色粗砂混じり粘質土 (中世後半の耕作土)
- 26 (包含層?)
- 27 2.5Y6/1 黄灰色粗砂混じり粘質土と10YR3/3 暗褐色粗砂混じり粘質土が混じる (中世後半耕作土)
- 28 10YR6/3 にぶい黄褐色粗砂混じり粘質土 (10YR3/3 暗褐色粗砂混粘質土が混じる、中世後半耕作土)
- 29 2.5Y6/1 黄灰色粗砂混じり粘質土と10YR3/4 暗褐色粗砂混じり粘質土が混じる (中世後半耕作土)
- 30 10YR5/2 灰黄褐色極粗砂混じり粘質土と10YR5/6 黄褐色中砂混じり粘質土が混じる (中世後半耕作土)
- 31 10YR5/2 灰黄褐色粘質土混じり粗砂 (10YR4/6 褐色粘質土が少量混じる、中世耕作土)
- 32 10YR4/2 灰黄褐色粘質土混じり粗砂と10YR3/4 暗褐色粘質土が混じる (中世耕作土)
- 33 2.5Y5/2 暗灰黄色粗砂 (生痕)
- 34 10YR5/2 灰黄褐色粗砂 (10YR4/6 褐色粘質土が網目状に入る、中世耕作土)
- 35 10YR4/2 灰黄褐色粗砂混じり粘質土 (10YR3/4 暗褐色粘質土が少量混じる、4 cm 大の土器片含む)
- 36 10YR5/2 灰黄褐色極粗砂混じり粘質土と10YR4/3 にぶい黄褐色粗砂混じり粘質土が混じる (中世のベース面、Ⅲ層)
- 37 10YR5/2 灰黄褐色極粗砂混じり粘質土 (10YR3/4 暗褐色粗砂混じり粘質土が混じる、中世のベース面、Ⅲ層)
- 38 10YR4/1 褐色粗砂混じり粘質土と10YR2/3 黒褐色粘質土が混じる (Ⅲ層)
- 39 10YR6/2 灰黄褐色極粗砂混じり粘質土と10YR2/3 黒褐色粗砂混じり粘質土が混じる (SD039)
- 40 (包含層?)
- 41 10YR4/2 灰黄褐色粗砂混じり粘質土 (SD025)
- 42 10YR6/2 灰黄褐色粗砂混じり粘質土 (10YR3/4 暗褐色粗砂混じり粘質土が混じる、ベース)
- 43 10YR5/2 灰黄褐色粗砂混じり粘質土 (10YR3/4 暗褐色中砂混じり粘質土がブロック状に中量混じる、ベース)
- 44 10YR7/2 にぶい黄褐色粗砂混じり粘質土 (10YR5/4 にぶい黄褐色中砂混じり粘質土が混じる、ベース)
- 45 10YR6/2 灰黄褐色粗砂混じり粘質土 (10YR4/3 にぶい黄褐色粘質土が混じる、ベース)
- 46 10YR7/2 にぶい黄褐色粗砂混じり粘質土と10YR6/6 明黄褐色粗砂混じり粘質土が混じる (ベース)
- 47 10YR7/2 にぶい黄褐色粗砂・砂礫 (ベース)
- 48 10YR5/6 黄褐色粗砂混じり粘質土 (ベース)
- 49 10YR4/3 にぶい黄褐色極粗砂と10YR5/4 にぶい黄褐色極粗砂が混じる (花崗岩の再堆積、ベース)

第11図 1区南壁土層断面図

の堆積層である42・47層の上面より人為的に掘り込んだ堆積層である可能性も考えられることから、32～34層を含め、SR01とは異なる柱穴や土坑等の遺構の埋土である可能性を想定したい。なお、平面記録には、該当位置に柱穴や土坑等の記録はない。同様に、調査区南端付近でSD016の下位にレンズ状に堆積する26～31層についても、平面記録からSD018が位置するようであり、平面図との整合性を踏まえ、30・31層をSD018の埋土の可能性を想定した。しかし30・31層の底面の標高値は11.1～11.2m付近にあり、平面記録でのSD018の底面の標高値10.55m前後と大きく異なるため、課題は残る。

上述したSR01は、35・36層を除いて、調査記録では38～49層に細分される。しかし、38・39層については、40層上面より掘り込まれた別の遺構ないし包含層の堆積層である可能性も考えられる。一方、SR01の南側には自然河川SR02が調査されているが、断面図にSR02の記録はない。平面記録より50～60層がSR02に帰属する堆積層の可能性が高いと判断した。しかし、断面記録から55層は56層上面より掘り込まれた遺構の埋土のようにも見え、隣接する59層も北への広がりが見られない等、全てをSR02の堆積物としてよいかどうかは不詳である。また、上述した32～37層の南北に堆積する、SR01の41層とSR02の50層、47層と54層が対応関係にあるようにも理解が可能で、SR01とSR02が一連の流路である可能性も考えられる。

西壁（第10図）では、北側の宅地の部分と南側の耕作地の部分を小区により区分して調査を実施し、各々の西壁の調査記録を連結して図示した。両区の堆積層の相違が顕著で、さらに北側の調査区を中心に土層の記載に欠落が多く認められることから、やや理解が困難な点がある。写真等の調査記録を援用しながら、以下記載する。1区北側では、宅地に伴う盛土（1層）の下位に、宅地化以前の耕作土（5～8層）が、比高約0.6mの棚田状に2段の段差をもって水平堆積し、宅地化前には、南北方向に計3筆の耕作面に分割されていたことが伺える。さらに旧耕作土の下位には、最大14層（9～11・13～23層）に細分される床土や旧耕作土等が水平堆積し、その下面でSG01（27～38層）等の遺構を検出し、第1遺構面とした。1区南側でも、耕作土・床土（2～4層）下でSD074（24層）を検出し、第1遺構面とした。第1遺構面の標高は、調査区北部で11.10～11.34m、同中央部で11.67～11.78m、同南部で11.32～11.42mをそれぞれ測る。南側では、遺構面はほぼ平坦で、遺構の残存深も浅く、遺構面は顕著な削平を被っていることが考えられる。

第1遺構面のベースとなる40・41層は概ね水平堆積をしており、包含層の可能性が考える。本層の下面で柱穴とみられる42層の掘り込みを検出しており、本遺構面を第2遺構面とする。なお、42層に該当する遺構は、平面記録にはない。調査区北側では、上述した旧耕作土の段落ちにより遺構面は削奪され、本遺構面に帰属する遺構は確認されなかった。調査区南側では、第1遺構面下にベース層の花崗岩の風化バイラン土（55層）とみられる堆積層が露出し、第2遺構面は存在しない。第2遺構面の標高は、11.38～11.62mで、起伏が顕著に認められた。

第2遺構面のベースとなる43・44層も、概ね水平堆積しており旧耕作土を起源とする包含層と考える。本層下面で、SD069（45層）やSD068（47層）とみられる遺構を検出し、本遺構面を第3遺構面とする。第3遺構面の標高は、11.24～11.54mを測り、第2面同様に起伏が顕著に認められた。

第3遺構面下には、砂層（51～55層）が広く堆積しており、調査時にはベース層と記録され、掘り下げはなされていない。後述するように、おそらくは番屋川の旧流路の氾濫堆積物と考えられる。本区で確認された弥生時代のSX03との関係は不詳ながら、後述する2区での調査記録より弥生時代以前に遡る堆積物の可能性が想像される。

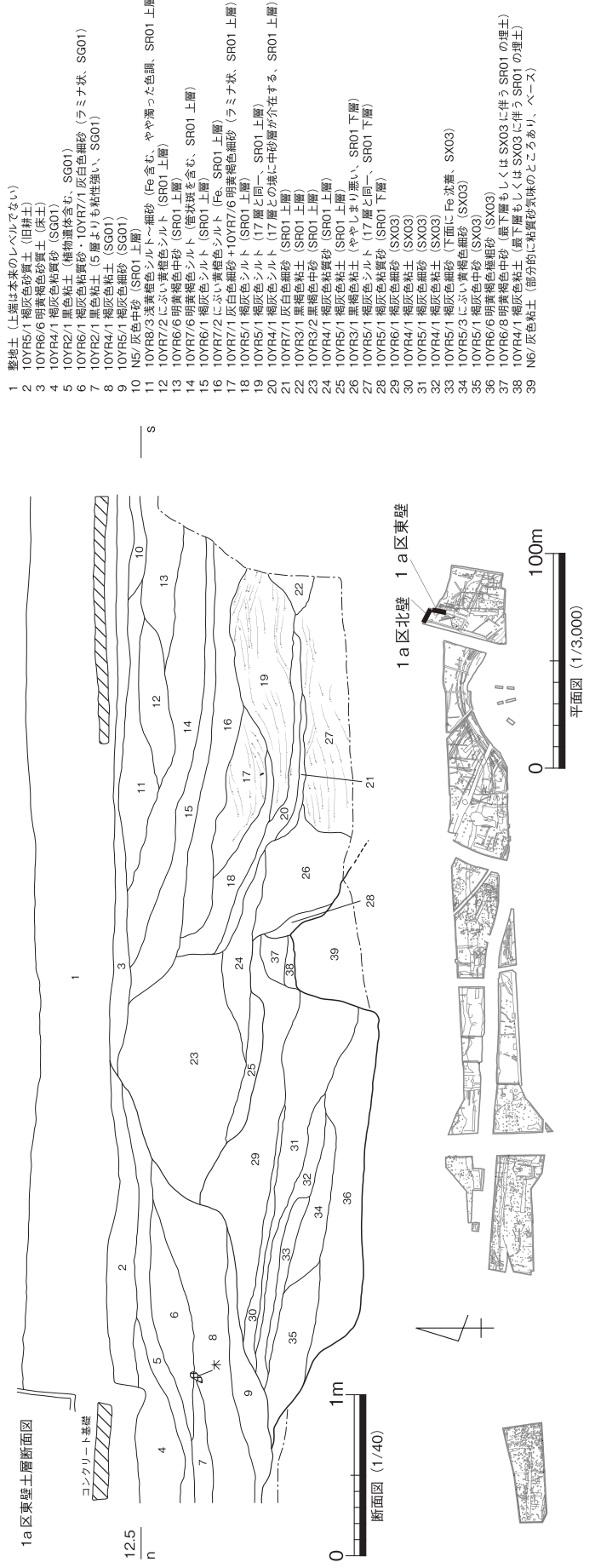
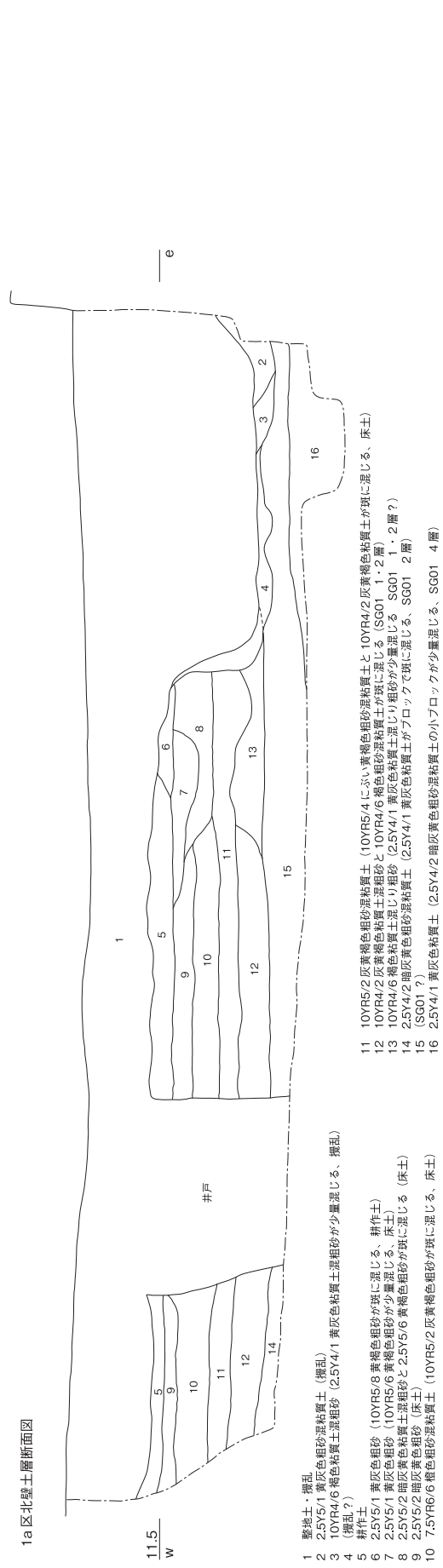


図 12 1a区北・東壁土層断面図

南壁（第11図）は、基本的な土層序は上述した西壁に近い。上下2段の平坦面に区分され、上段は耕作地、下段は宅地として利用されていた。上段は、耕作土と床土層下で花崗岩の風化パイラン土が確認され、その上面でSD074を確認し、西壁同様第1遺構面とした。

下段では、西壁同様に2段の旧耕作面が検出された。中位面では、旧耕作土（3・5・8層）下でSD072を検出し、本遺構面を第1遺構面とする。遺構面の標高は、11.85～11.92 mとほぼ平坦で、上面は顕著な削平を被っていることが考えられる。また、本遺構面は中位面でのみ検出され、東端は段落ちにより削奪され、下位面に連続しない。また、本遺構面のベースとなる18～23層は水平堆積を基調とし、24・25層を含めて、中世後半期の耕作土層の可能性が指摘されている。一方24・25層については、堆積状況から何らかの遺構の埋土の可能性も考えられるが、平面図に該当する遺構は記録されていない。下位面では、旧耕作土下でSD066を検出した。SD066は、床土層（15層）上面より掘り込まれており、近現代の区画溝と考えられる。床土層下の15・27～30層も水平堆積を基調とし、調査時に中世後半期の耕作土の可能性が指摘されている。15・27～30層下で、遺構埋土の可能性が考えられる35層が確認され、本遺構面を第2遺構面とする。しかし、平面図に該当する遺構の記載はなく、確認された遺構の可能性のある堆積層も35層のみであることから、可能性を指摘するにとどめる。第2遺構面のベースとなる36・37層は、緩やかに東へ傾斜して堆積した包含層で、本層下面でSD039を検出し、第3遺構面とした。本遺構面の標高は、10.60～11.05 mを測る。土層の対応関係が不詳だが、40層下面で検出したSD025も、検出レベルより本遺構面に帰属する可能性を想定する。

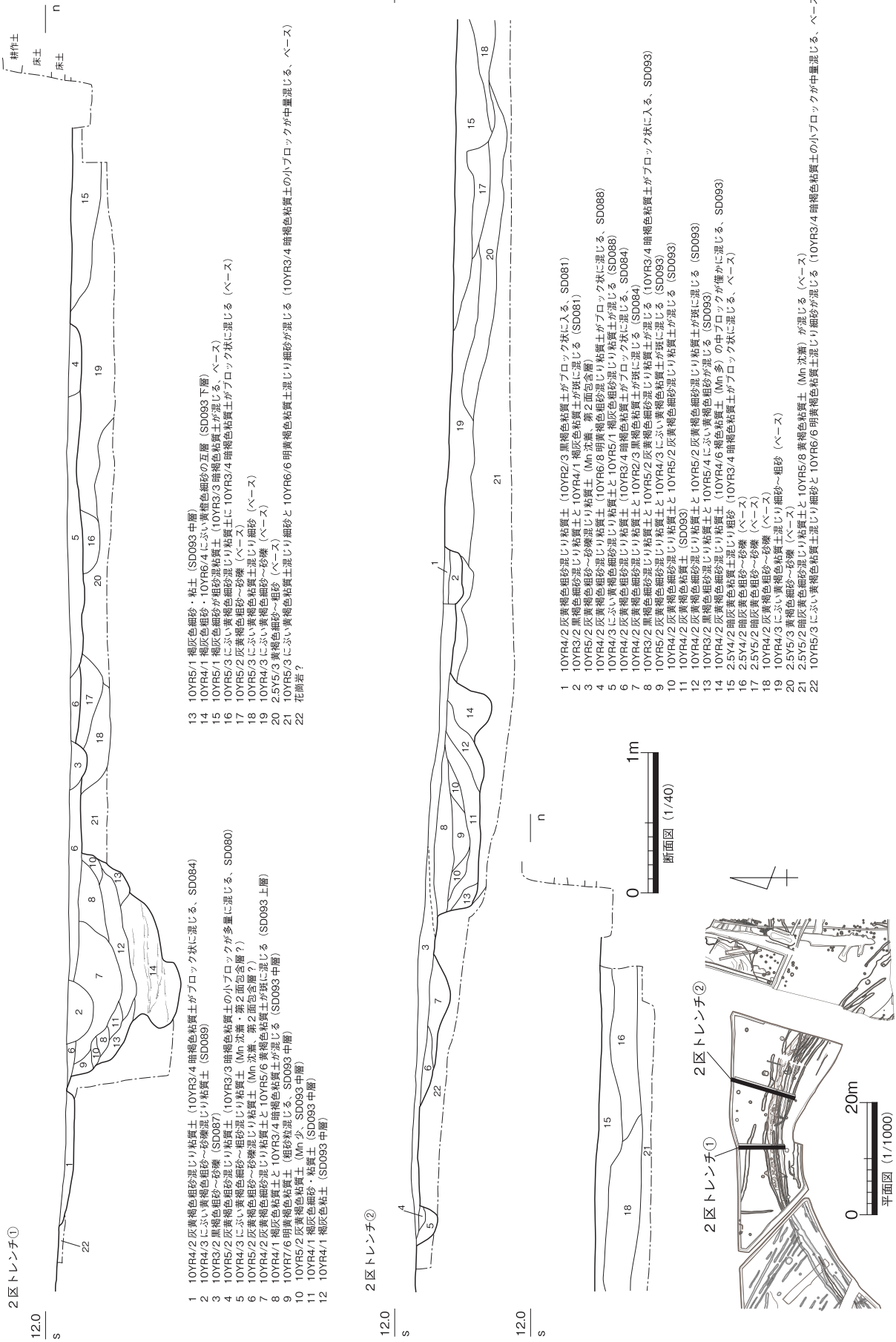
1-a区は1区北西部の小区で、北壁と東壁（第12図）において、層序を記録した。本区は宅地として利用されており、その整地土の下位に、2～6層に細分される耕作土や床土等の水平堆積が確認され、その下面でSX03やSR01を検出し、第1遺構面とした。第1遺構面の標高は、北壁で10.80～11.10 m、東壁で12.50～12.60 m前後である。

1区では、丘陵裾部を中心に複数の階段状の耕地面に造成されており、各段で1～3面程度の遺構面が確認された。調査時には、基本的に最終遺構面である3面まで重機で掘り下げ調査を実施した。

2区

2区は丘陵北側の調査区で、調査前は水田等の耕作地として利用されており、調査前の地表面の標高は11.9～12.3 m前後を測り、東へ傾斜した3筆の耕作地に分筆されていた。現地表面の起伏は、後述するように、調査によって確認された遺構面の傾斜の方向と概ね合致する。実掘面積は約501.8㎡で、2-a、2-b、2-c区の3小区に区分して調査を行なった。2区では、調査区壁面での層序の記録は作成していないが、第1遺構面まで掘り下げた後に、調査区を南北に縦断する2本のトレンチを設定し、遺構面以下の層序を記録した（第13図）。

2区では、現耕作土下に2層以上に細分される床土層等の水平堆積があり、その下面でSD080、SD087、SD089等の溝を検出し、第1遺構面として調査を実施した。第1遺構面の標高はトレンチ①周辺で11.80～11.93 m、トレンチ②周辺で11.50～11.86 mを測り、遺構面は緩やかに北東方向へ傾斜して検出された。また、遺構の残存深は概ね浅く、遺構面は顕著な削平を被っている可能性が考えられた。第1遺構面のベースには1～2層に細分される黄褐色系粘質土（トレンチ①5・6層、トレンチ②3層）が水平堆積しており、その下面でSD084、SD093等の遺構を検出し、第2遺構面として調査を実施した。第2遺構面の標高は、トレンチ①周辺で11.75～11.90 m、トレンチ②周辺で11.50～11.82 mを測



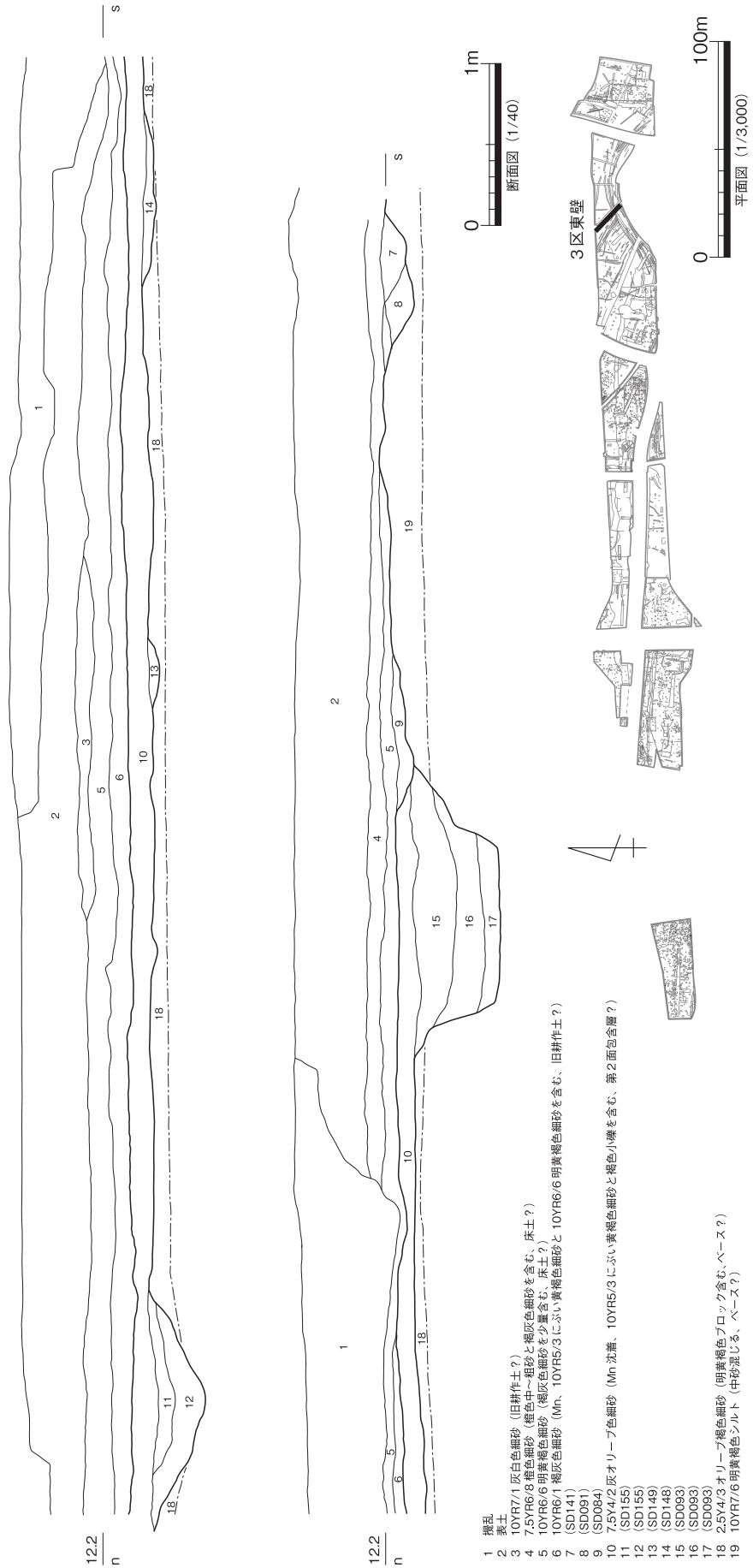
第 13 図 2区トレンチ①・②土層断面図

り、第1面同様に遺構面は緩やかに北東方向へ傾斜して検出された。この第2面包含層の黄褐色系粘質土は、調査区南半部の大型幹線水路SD093の上面を中心に堆積が確認されており、おそらくSD093開削後に南北両岸周辺が雨水等により浸食され、埋没後には浅い帯状の窪地状を呈していたものと想像される。

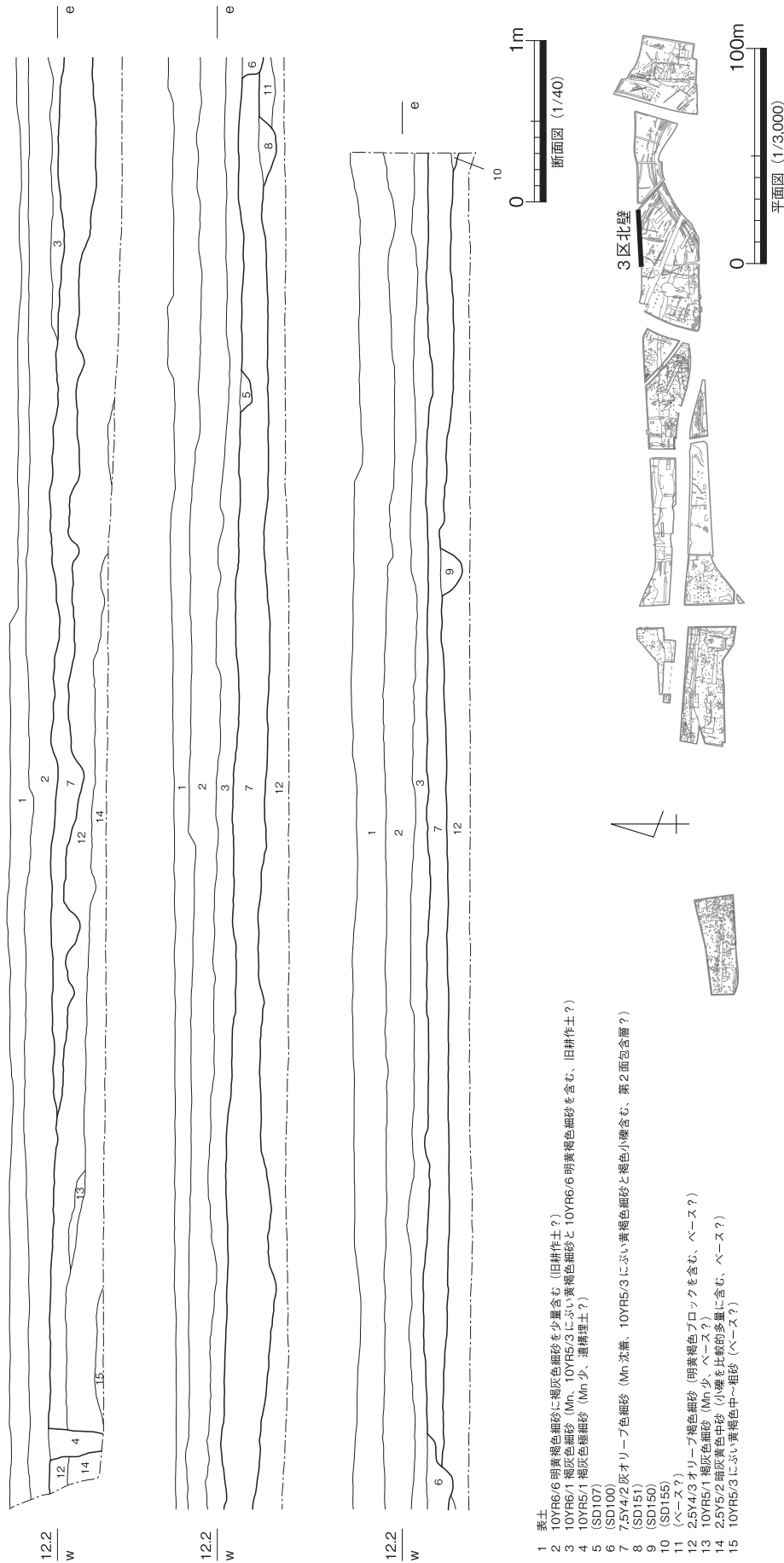
なお、第2遺構面のベースには、8層以上に細分される砂層の堆積(トレンチ①17~21層、トレンチ②15~22層)が記録されている。これら砂層は、調査時にはベース層として掘り下げはなされていない。既述したように、1区のベース砂層に連続する堆積層と考えられ、旧番屋川の氾濫堆積物の可能性を考える。

3区

3区は調査前には、水田等の耕作地として利用されており、調査前の地表面の標高は126m前後、実掘面積は約780㎡である。また、その西側の後述する4区と同一筆の耕作地の一部を、3区南として調査を行なっ



第14図 3区東壁土層断面図

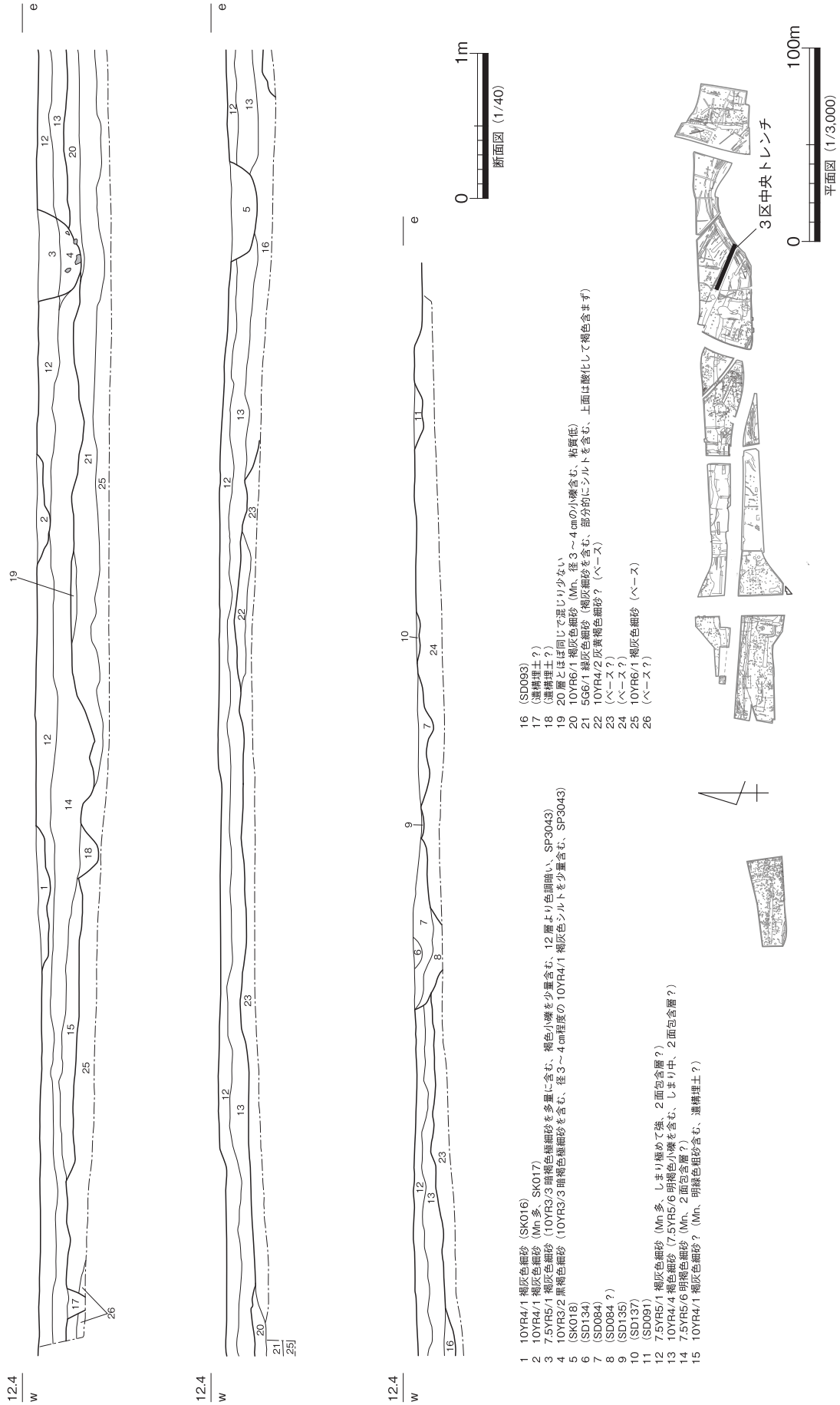


第 15 図 3 区北壁土層断面図

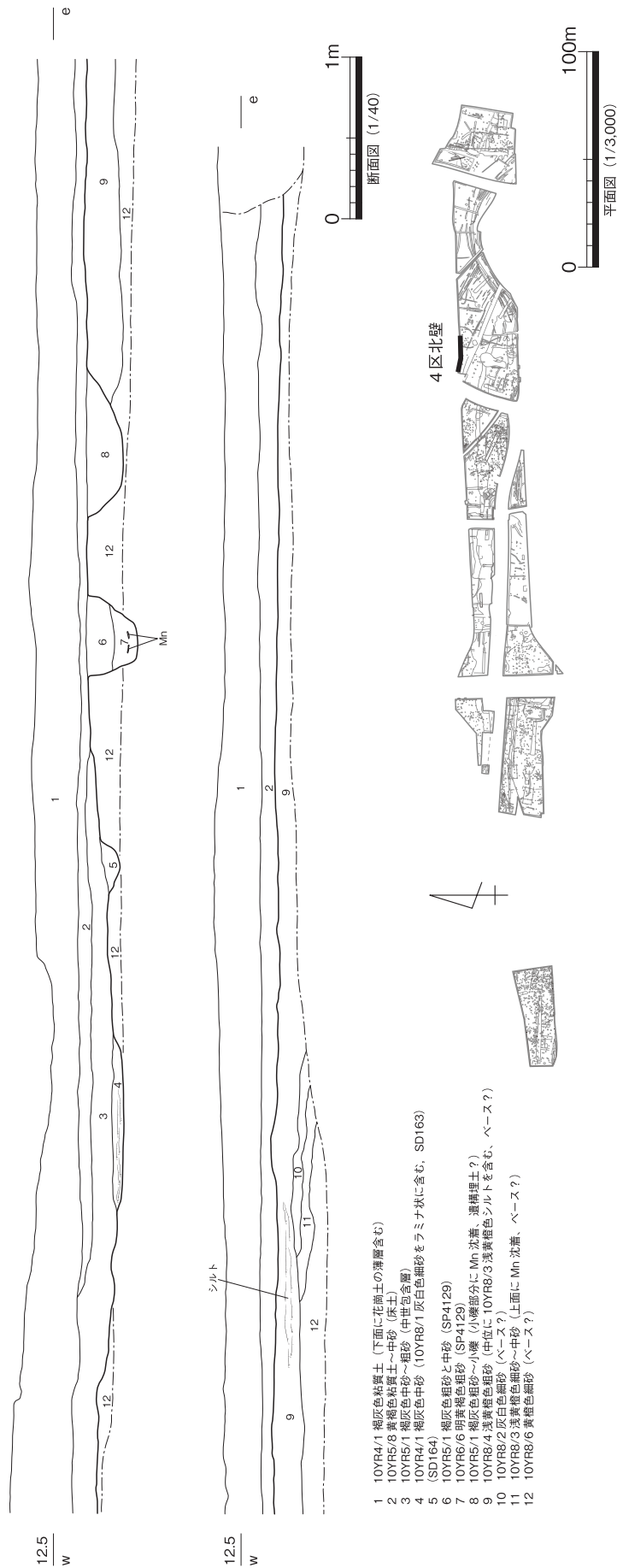
た。3 区南の実掘面積は約 207.2m²である。基本層序は、3 区東壁 (第 14 図) と北壁 (第 15 図)、および中央トレンチで記録した。

3 区では、現代の耕作土下に、2～4 層に細分される旧耕作土や床土層 (東壁 3～6 層、北壁 2・3 層) が水平堆積し、その下面で SD107 等の遺構を確認したことから、本遺構面を第 1 遺構面として調査を行った。第 1 面の標高は、調査区北西部で 12.25 m 前後、同北東部で 12.05 m 前後、同南東部で 12.2 m 前後、中央トレンチで 12.3 m 前後を測り、緩やかに北東方向へ傾斜して検出された。第 1 面で検出された遺構の残存深は概ね浅く、遺構面は近世以降と考えられる地下げ等の影響により、大きく削奪を被っている可能性が考えられる。

第 1 面のベースには、調査区北東半部



第16図 3区中央トレンチ土層断面図



第 17 図 4 区北壁土層断面図

砂 (北壁 7 層・東壁 10 層) が水平堆積しており、中世以前の耕作土の可能性が考えられる。その下面で、SD155 等の遺構を検出し、第 2 遺構面として調査を実施した。第 2 面の標高は、調査区北西部で 12.15 m 前後、同北東部で 11.9 m 前後、南東部で 12.0 m 前後をそれぞれ測り、第 1 面同様北東方向へ緩やかに傾斜して検出された。中央トレンチでは、第 2 面包含層は 3 層 (12 ~ 14 層) に細分され、褐色系細砂が概ね水平堆積していた。13・14 層は連続する堆積層と考えられ、基本的には北・東壁と同様に 2 層に分層され、また色調は調査区壁面の記録と相違するが、同一層とみて大過ないと思われる。

第 2 面のベースには、主に黄色系細砂~粗砂等が基本的に上方級化して堆積しており、既述した 1・2 区のベース砂層と一連の堆積物と考えられる。3 区南では、第 2 面をさらに掘り下げて、縄文時代晩期に位置付けられる自然河川 SR03 を検出している。第 2 面のベースとなる砂層の一部が、SR03 の埋土である可能性は高いと考えるが、基本層序には SR03 の埋土に関する記録は残されていないため、詳細については不明である。しかし、ベース砂層とした堆積物の一部が、縄文時代晩期に位置付けられることが判明した点は重要であろう。なお、ベース砂層は後述するように 4 区にも連続することから、流下時期が相違する複数の流路が重複している可能性が考えられる。

4区

4区は調査前には、耕作地として利用されていた。3区南と同一筆の耕作地の西端部分と、その南側の筆の耕作地の2筆の耕作地を4区として設定した。北側の筆の調査前の地表面の標高は約12.6m、南側の筆は約13.1mである。実掘面積は約728.3㎡である。調査区の北壁と西壁で、基本層序を記録した。

現代の耕作土や床土層（西壁1～4層）の下面には、中世包含層とされる褐灰色中砂～粗砂（北壁3層）が浅い窪地部分を中心に近世以降の地下げ等に伴う削奪を免れて部分的に残存し、その下面でSD163等の遺構が検出され、第1遺構面として調査を実施した。第1遺構面の標高は、調査区北西部で12.30m前後、北東部で12.24m前後、南西部で12.90m前後をそれぞれ測り、緩やかに北東に傾斜して検出された。遺構面下には、黄色系ないし灰色系の砂層の堆積が0.4m以上確認され、3区から連続する、番屋川の旧流路や氾濫堆積物と考えられる。

また、調査区南に所在する丘陵は、本区南で大きく南へ彎曲して、幅約70m、奥行50m以上の浅い谷地形を形成する。その谷部を、北へ流下する自然河川が本区を縦断していることが、現地地形より想像される。調査記録からそうした流路の存在を読み取ることはできないが、上述したベース砂層は、谷部を流下する自然河川の堆積物と、上述した番屋川の氾濫堆積物に大きく二分されるものと考えられる。

なお、4区では2・3区で確認された第2面包含層は削奪され確認されなかった。上述した4区包含層は、断面図のみに記録され、平面的な堆積範囲は記録されていない。本層からは、13世紀代を中心とした土師質土器皿・杯、白磁碗等の小片が出土しており、2・3区の第1面に帰属する堆積物である可能性が高く、2・3区の第2面包含層とは帰属時期が異なる。本層は、調査区北西部の残存深0.1m前後の断面皿状の落ち込み部分にのみ堆積していることから、本来は遺構埋土の一部であった可能性も考えられる。

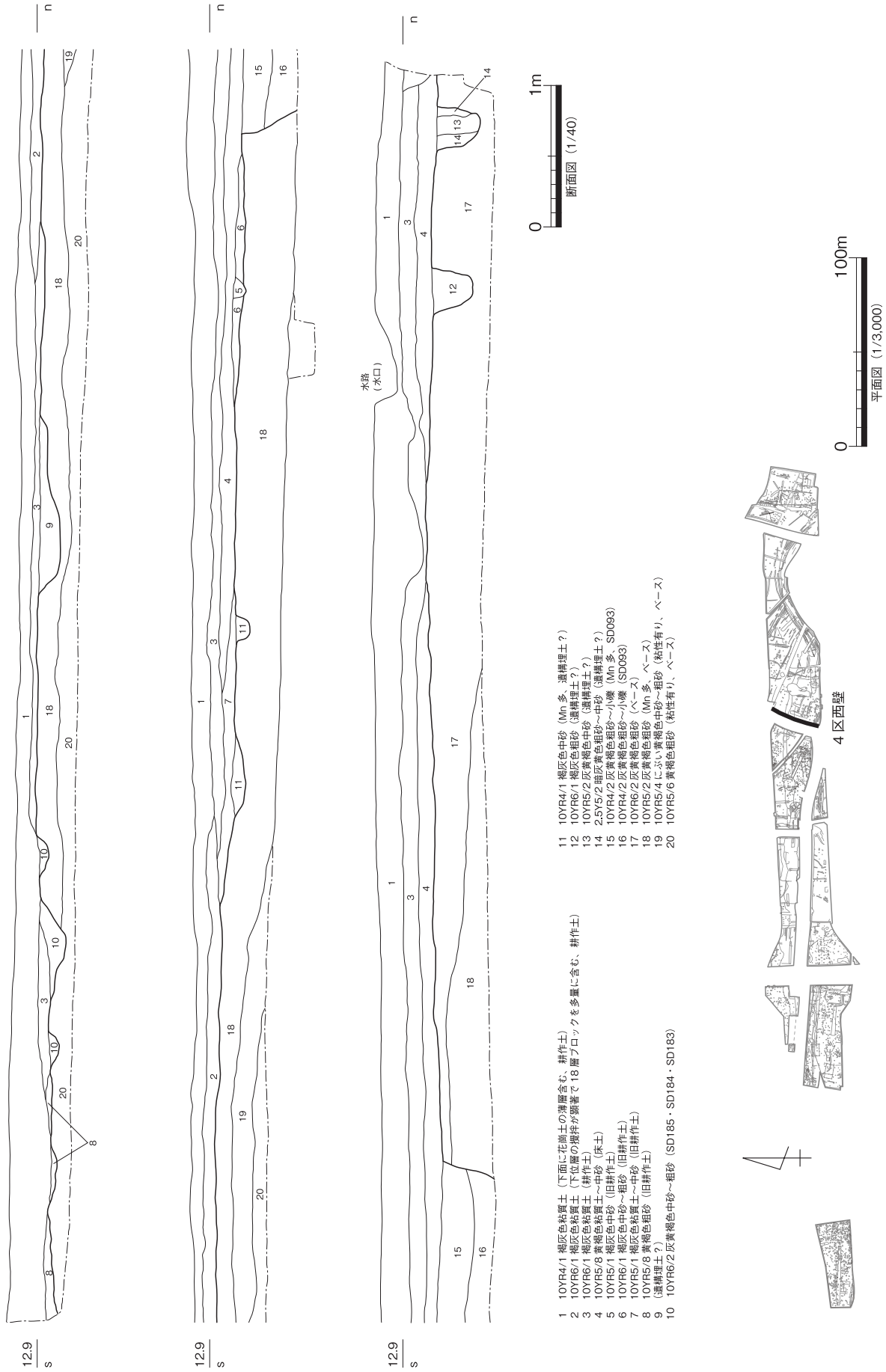
5区

5区は、2～4区とは里道を挟んで西側の調査区となる。調査前は耕作地として利用され、現地表面の標高は13.3m前後であった。地割の形状より、3区南や4区の耕作地とは、里道付設以前は同一筆の耕作地であった可能性が考えられる。実掘面積は約225㎡である。調査区の北壁で、基本層序を記録した。

現代の耕作土や旧耕作土（1・3層）下で遺構埋土（4・5層）を確認し、第1遺構面とする。第1面の標高は、調査区の北壁の東西両端で13.10m前後を測り、上面に若干の起伏は見られるものの概ね水平で、近年の耕地造成により削奪された可能性が考えられる。

第1面のベースとなる灰白色細砂（6層）は、近世以降の旧耕作土（包含層）の可能性が考えられ、第1面で検出された遺構は近世以降のものと考えられることから、調査では後述する第2遺構面まで重機で掘削し、調査を実施した。第2面では、SX09等の遺構を検出した。遺構面の標高は、調査区北西端で13.10m前後、北東端で13.00m前後を測り、緩やかに東へ傾斜して確認された。

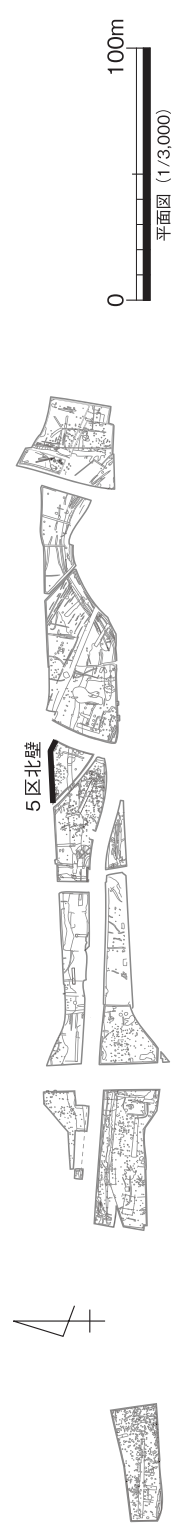
第2面のベースは、8層（23～30層）に細分される黄色ないし褐色系の細砂やシルトが堆積し、1～4区より連続する番屋川の旧流路や氾濫堆積物と考えられる。これら砂層の下位には、調査区西半部を中心に、明黄褐色粘質土（31層）が東へ傾斜して堆積しており、旧流路や氾濫堆積物の基盤層の可能性が考えられる。



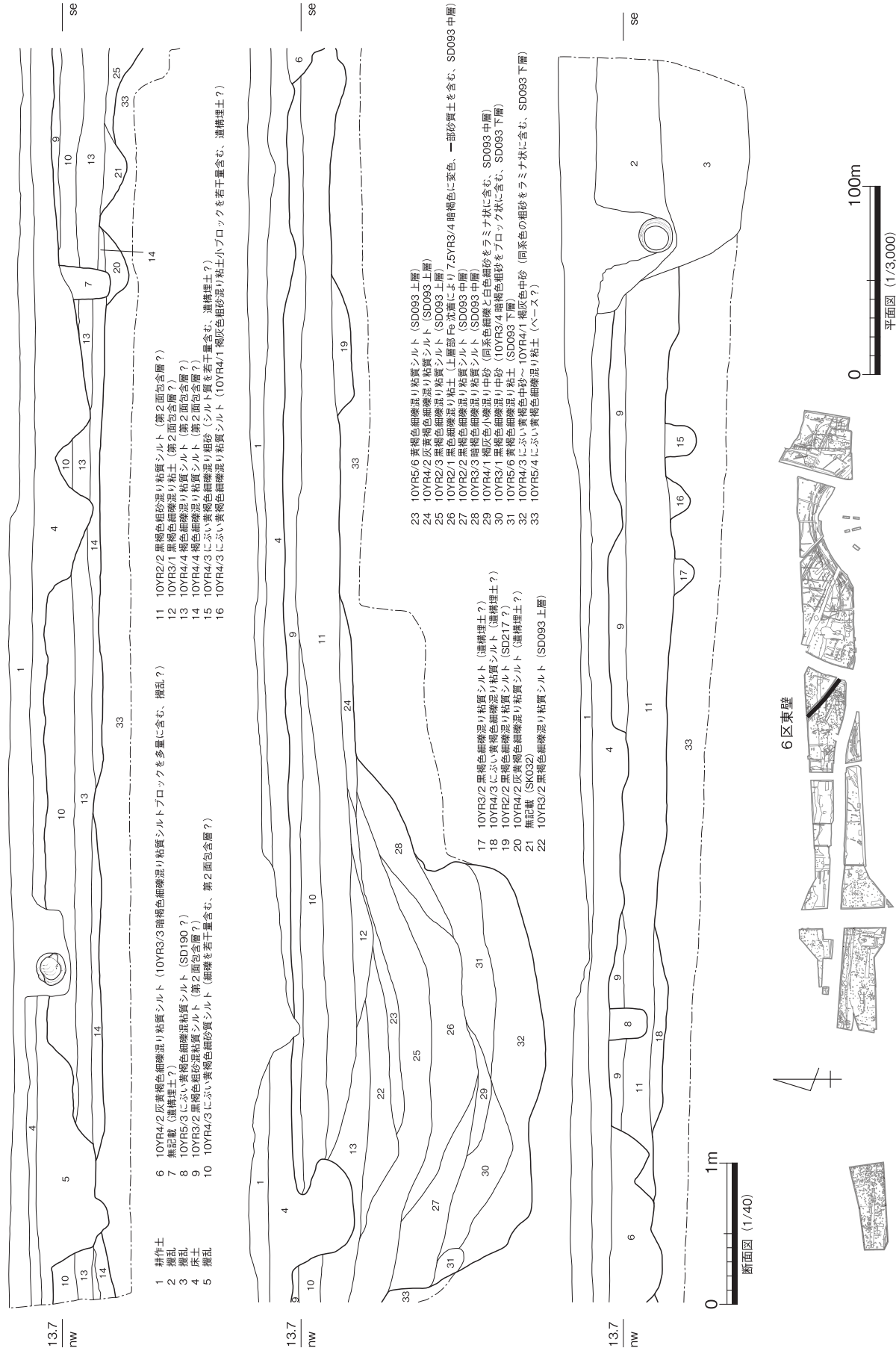
第18図 4区西壁土層断面図



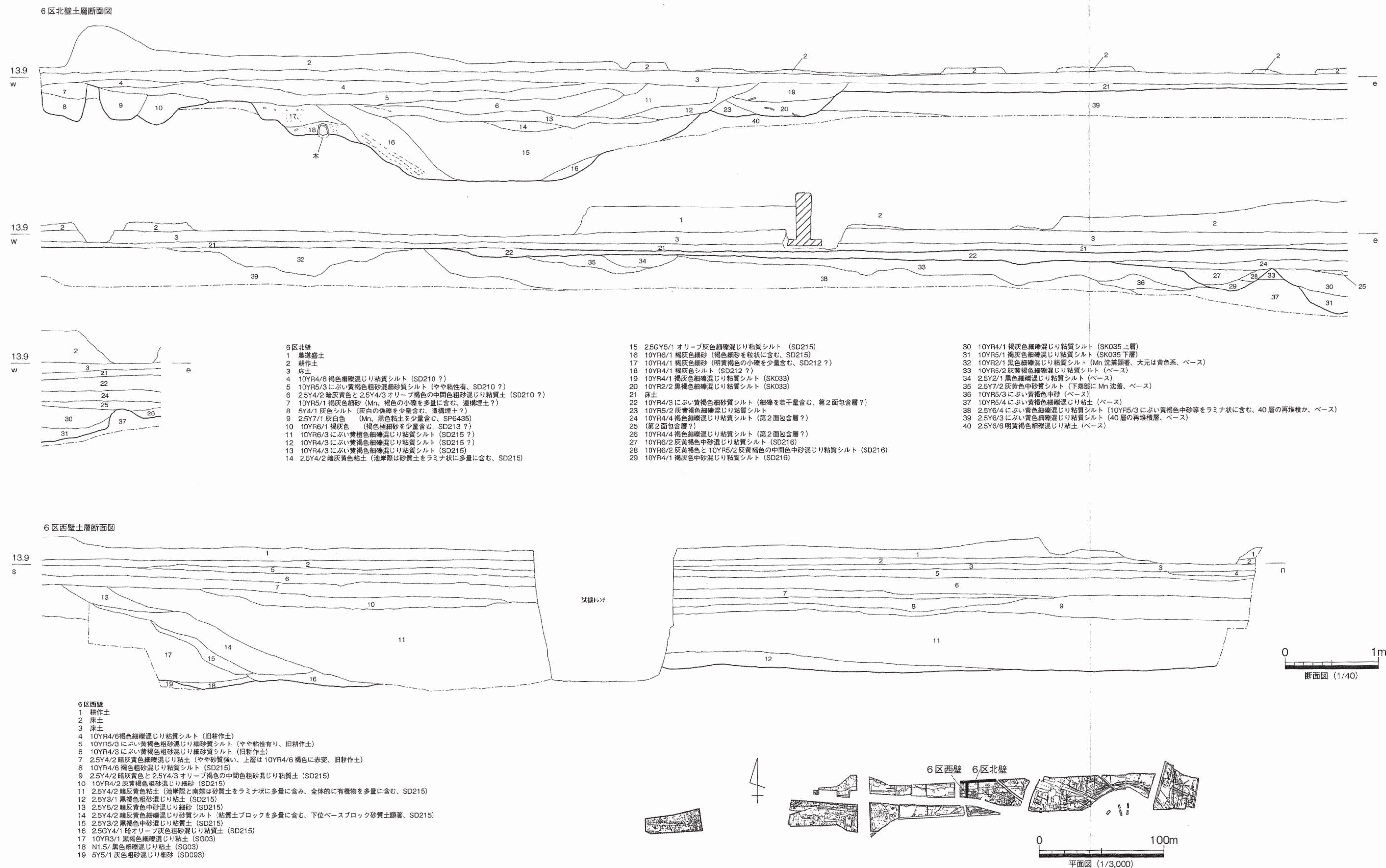
- 1 耕作土 (炭化物・礫を多量に含む)
- 2 10YR7/1 灰白色細砂 (旧耕作土)
- 3 10YR6/1 褐色 (Mn、ベース由来の黄色細砂・小礫を含む、遺構埋土)
- 4 10YR3/2 黒褐色シルト (遺構埋土)
- 5 10YR4/1 褐色細砂 (Mn少、遺構埋土?)
- 6 10YR8/1 灰白色細砂に7.5YR7/6 褐色細砂を含む (包含層?)
- 7 2.5Y8/1 灰白色細砂 (Mn 尠、褐色細砂を多量に含む、褐色粒を含む、SX09)
- 8 2.5Y5/2 灰白色小礫 (ベース由来のシルトを少量含む、柱穴埋土?)
- 9 2.5Y7/2 灰黄色細砂 (Mn 多、SX09)
- 10 10YR6/1 褐色細砂 (Mn 多、SX09)
- 11 10YR4/2 灰褐色細砂ラミナチ (遺構埋土?)
- 12 10YR7/2 に近い黄褐色細砂 (SP5090)
- 13 10YR7/2 に近い黄褐色細砂 (SP5090)
- 14 2.5Y3/2 黒褐色細砂-シルト (SP5090 柱底)
- 15 10YR4/2 灰褐色細砂 (ベース由来のブロックを含む、SP5090)
- 16 10YR4/1 褐色細砂 (ベース由来の明黄褐色ブロックを少量含む、遺構埋土?)
- 17 10YR7/1 灰白色細砂 (遺構埋土?)
- 18 10YR7/2 に近い黄褐色細砂 (Mn、褐色細砂を含む、底面付近に2.5Y6/1 黄褐色シルトを含む、遺構埋土?)
- 19 2.5Y7/1 灰白色細砂 (ベース由来の黄色粘土と褐色シルトブロックを含む、遺構埋土?)
- 20 10YR7/2 に近い黄褐色細砂 (10YR3/1 黒褐色の極細砂と小礫を含む、遺構埋土?)
- 21 10YR4/1 褐色細砂 (遺構埋土?)
- 22 10YR4/2 灰褐色細砂 (Mn 少、遺構埋土?)
- 23 10YR6/2 灰褐色細砂 (7.5YR7/6 褐色粒と小礫を含む、ベース?)
- 24 10YR6/2 灰褐色細砂 (7.5YR7/6 褐色細砂と灰白色粗砂を含む、ベース?)
- 25 2.5Y5/6 明褐色細砂 (Mn、10YR6/2 灰褐色細砂を含む、ベース?)
- 26 7.5YR7/1 明褐色細砂 (Mn 多、ベース?)
- 27 10YR7/2 に近い黄褐色細砂 (Mn、部分的に褐色極細砂を含む、ベース?)
- 28 10YR7/2 に近い黄褐色細砂 (Mn、10YR5/2 灰黄褐色シルトを少量含む、ベース?)
- 29 10YR5/2 灰黄褐色シルト (10YR7/2 に近い黄褐色細砂を含む、ベース?)
- 30 10YR5/2 灰黄褐色細砂 (部分的に Mn 沈着、ベース由来の黄色細砂を含む、ベース?)
- 31 2.5Y7/6 明黄褐色粘質土 (10YR4/1 褐色粘質土ブロックと褐色粒を含む、ベース?)



第 19 図 5 区北壁土層断面図



第 20 図 6 区東壁土層断面図



第21図 6区北・西壁土層断面図

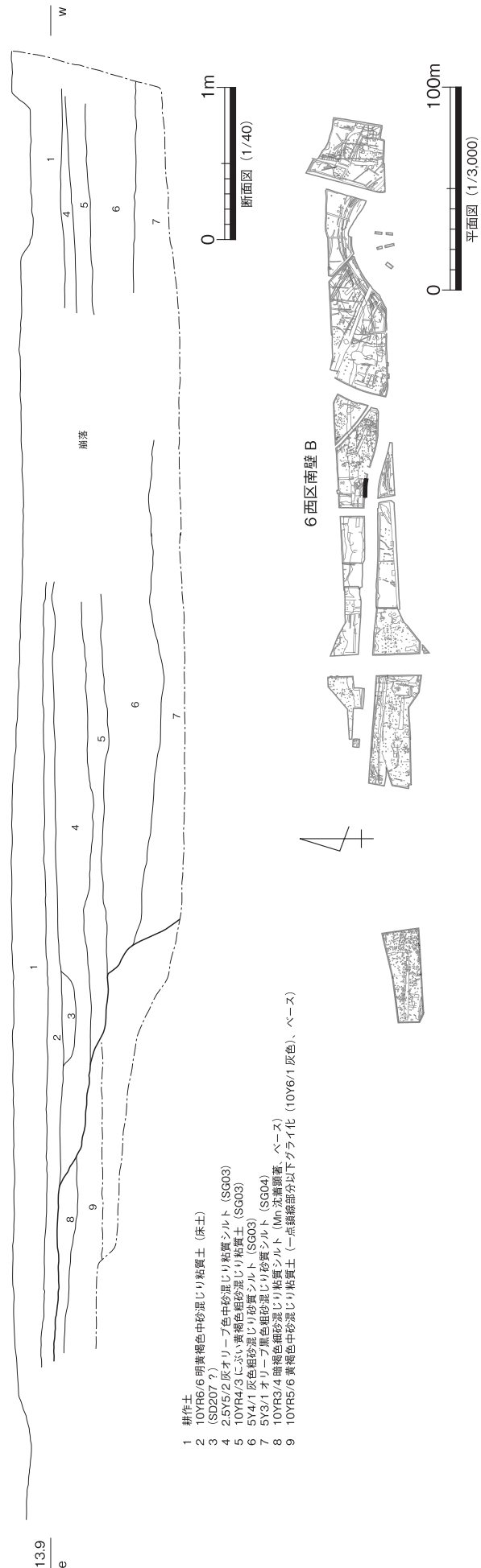


第 22 図 6 区南壁 A 土層断面図

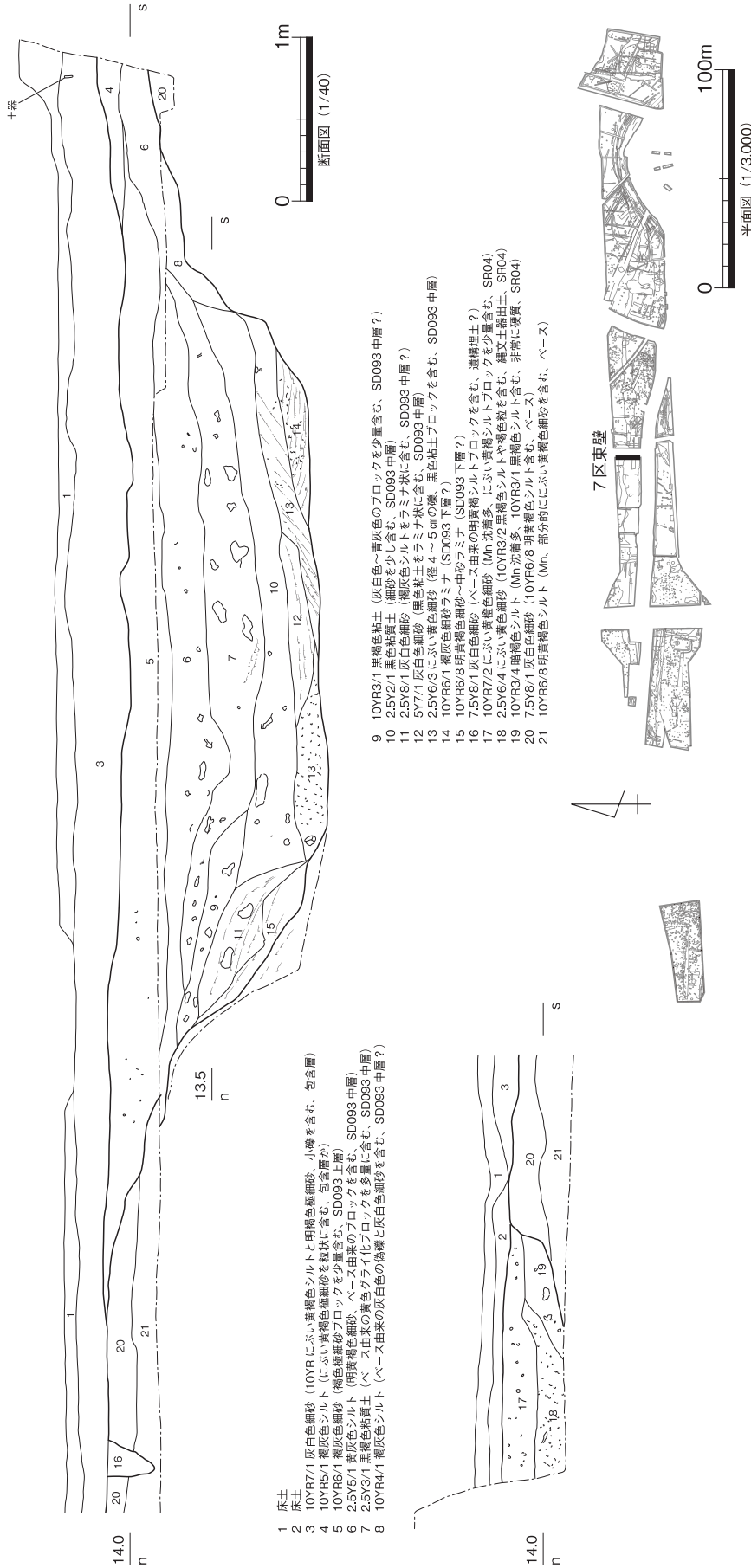
6 区

6 区は、5 区に西側に位置する。調査前は東西に 2 筆に分かれた耕作地として利用され、現地表面の標高は東側の耕作地が 14.1 m 前後、西側の耕作地が 14.2 前後 m であった。実掘面積は約 688m²で、これは当初の調査区の西端で溜井遺構 SG03・04 の東岸部が検出され、その西岸を確認するため西側へ約 4.8 m、調査区を拡張した 6 西区を含んだ面積である。当初の 6 区の周壁と 6 西区の北壁において、基本層序を記録した。なお、北壁については、旧調査区と 6 西区とで一部記録が重複する。重複部分で両図の層界位置が大きく相違していたが、妥当と思われる修正を施して一葉にまとめた。なお、後述する第 1 遺構面のベースとなるのは、調査区北壁では床土層（北壁 21 層）とされ、これは東壁の攪乱（東壁 5 層）と一連の堆積物である。さらに、東壁の第 1 遺構面は北壁 14 層上面に相当し、これらの点から北壁の調査記録には明らかに調査時の記録ミスが含まれる。明瞭な写真記録もなく、検証は不能なため、挿図は調査記録のまま提示し、以下の記載では北壁 22 層上面及び SD215 等の遺構上面を第 1 面として記述する。

各壁面では、基本的に現代の耕作土・床土層（北・西壁 1～3 層、東壁 1・2 層、南壁 A 1～4 層）下で、中世以降の溜め井遺構 SG03・SG04（南壁 B 4～7 層、西壁 17・18 層）、同 SD215（北壁 11～16 層、西壁 8～16 層）と溝 SD190（東壁 8 層）、弥生時代の土坑 SK033（北壁 19・20 層）等を検出し、これを第 1 遺構面とする。第 1 面の標高は、若干の起伏を認めるものの概ね 13.7～13.8 m 前後で一定し、遺構面は調査区西半部を中心に顕著な削平を被っていることが考えられる。その結果、調査区西半部の第 1 面のベースには、暗褐色粘質シルトやにぶい黄色粘質シルトといった無遺物層が露出し、後述する第 2 面の包含層堆積物は削奪に



第 23 図 6 区南壁 B 土層断面図

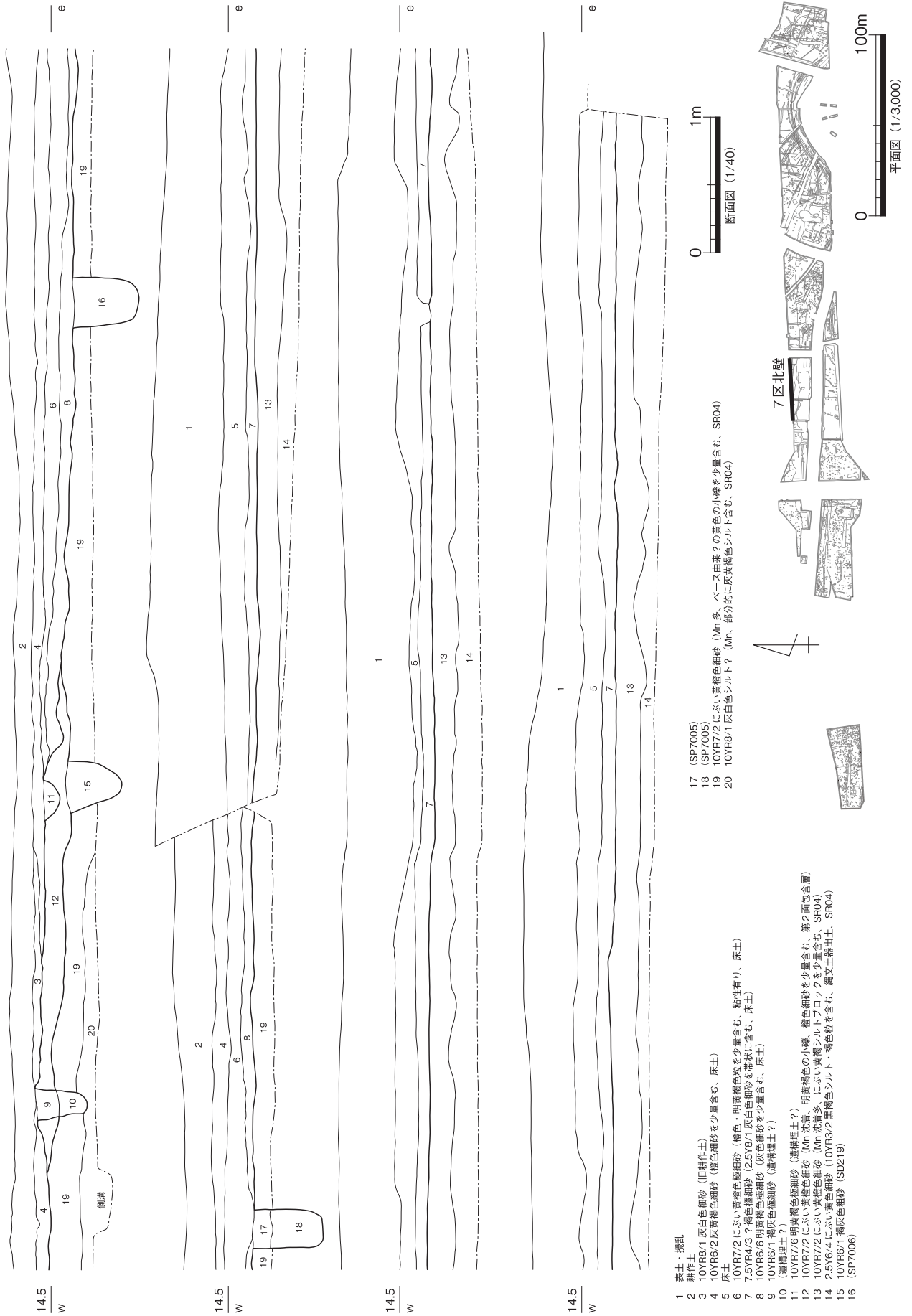


第24図 7区東壁土層断面図

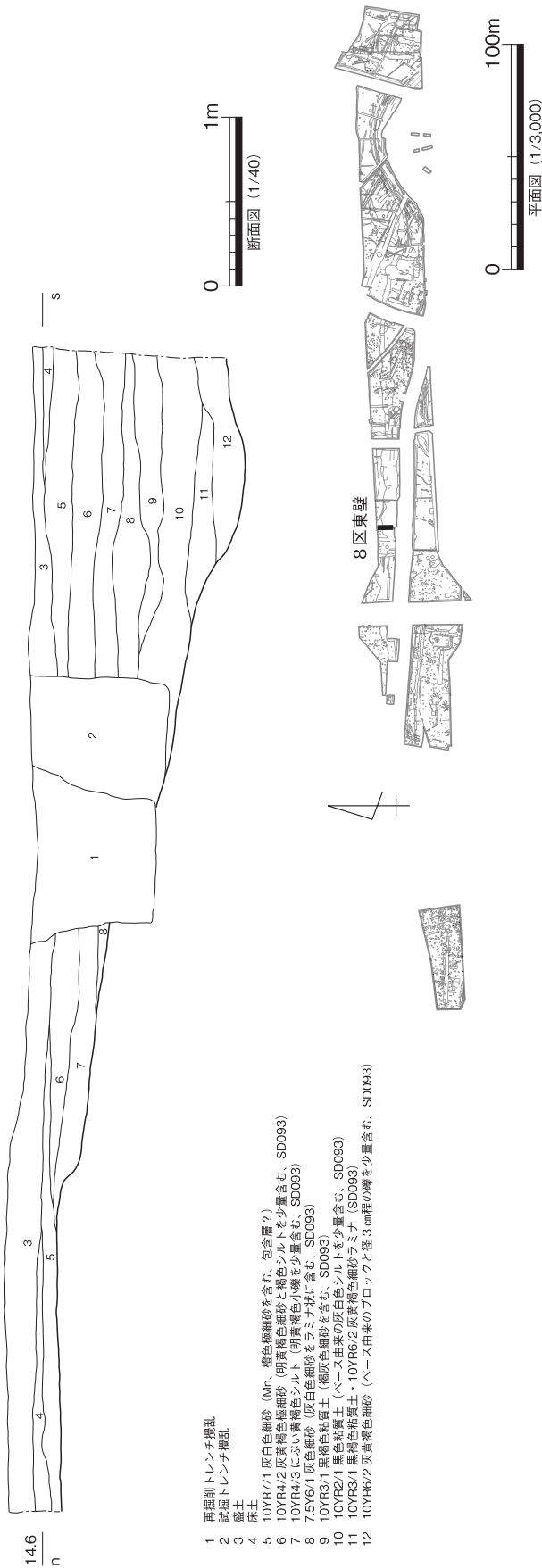
より認められない。なお、南壁では既述したように、床土層下でSG03とSG04の堆積層（南壁Bの4～7層）を確認しているが、平面図と堆積範囲や層序関係が合致していない。おそらくは断面図作成時の何らかの記録ミスに起因するものと考えられるが、検証は困難なため、床土層下で両遺構が検出されたことを確認するにとどめる。

上述したように調査区西半部では、第1面は無遺物層をベースとする。なお、床土層下に堆積するにぶい黄褐色シルト（北壁22層、東壁10層）は、調査区東半部に層厚10cm前後で広く水平堆積しており、花粉分析等による検証を必要とするものの、旧耕作土を起源とする包含層堆積物の可能性が考えられる。

一方、その下位の褐色粘質シルト（北壁24層、東壁13層）は、第2面の幹線水路SD093の上層として記録されているが、その南側に堆積する黒褐色粘質シルト（東壁11層・南壁A14層）と基本的には連続する堆積物と考えられる。また、層名無記載の北壁25層、



第 25 図 7 区北壁土層断面図



第26図 8区東壁土層断面図

その下位の褐色粘質シルト（北壁26層、東壁14層）も包含層堆積物と考える。こうした包含層下で、古代の幹線水路SD093や弥生時代の土坑SK035等の遺構を検出しており、これを第2遺構面として調査を行なった。第2面の標高は、13.4～13.75m前後を測り、緩やかに東へ傾斜して検出された。

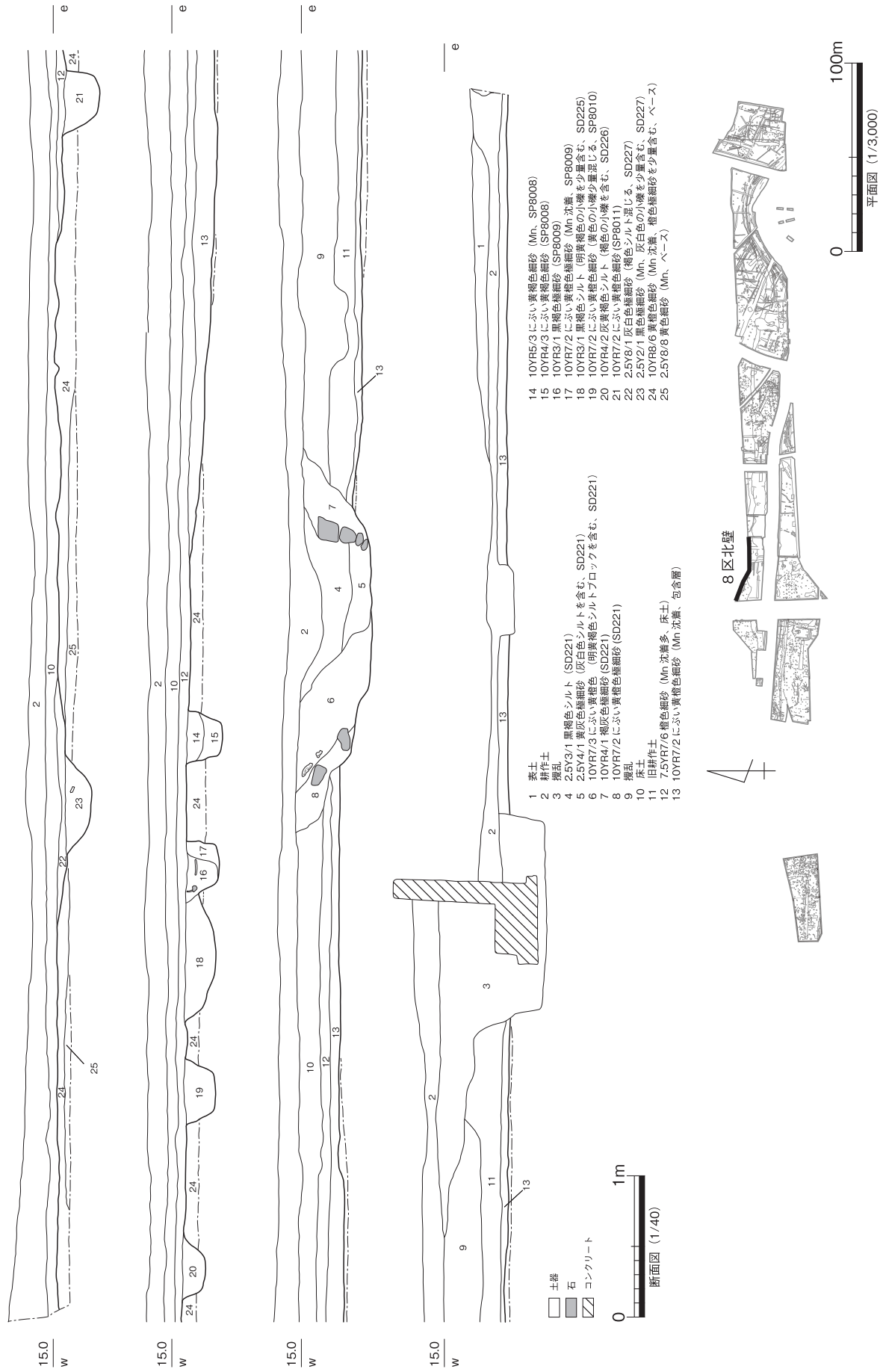
なお、上述した包含層堆積物のうち、黒褐色粘質シルト（東壁11層・南壁14層）は、調査区東半部を中心に堆積し、東へ傾斜した斜面堆積を示し、4区で述べた北へ流下する谷地形の西縁辺部の堆積物の一部の可能性が考えられる。つまり谷部は、SD093開削時には完全には埋没しておらず、浅い帯状の窪地として残されていた可能性が考えられる。

上述した第2面包含層からは、遺物が層位毎に取り上げられていない点は残念ながら、弥生土器や9世紀代の須恵器皿、11世紀代の土師器羽釜等の古代以前の遺物以外に、12～13世紀代の土師質土器皿・杯・碗・足釜、須恵器碗、瓦器碗、白磁碗、青磁碗等が一定量出土した。12～13世紀代の資料は、おそらくは第1面の遺構に本来は帰属する遺物であり、何らかの要因で混入したものと考えられる。9～11世紀代の資料が、本層堆積の時期を示していると考えられ、それは第2面の遺構の帰属時期とも整合しよう。

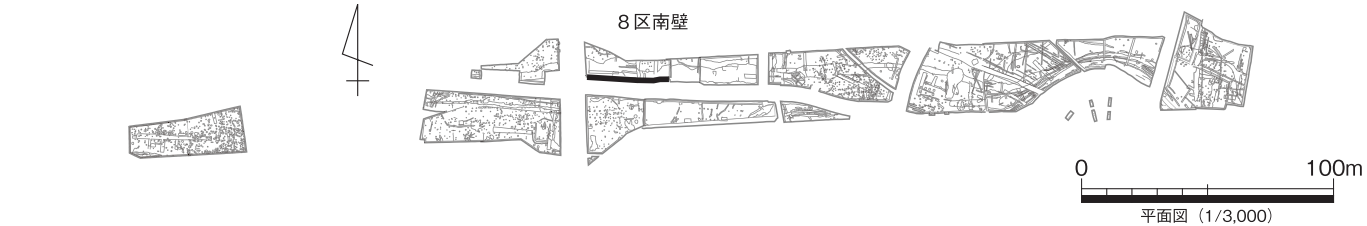
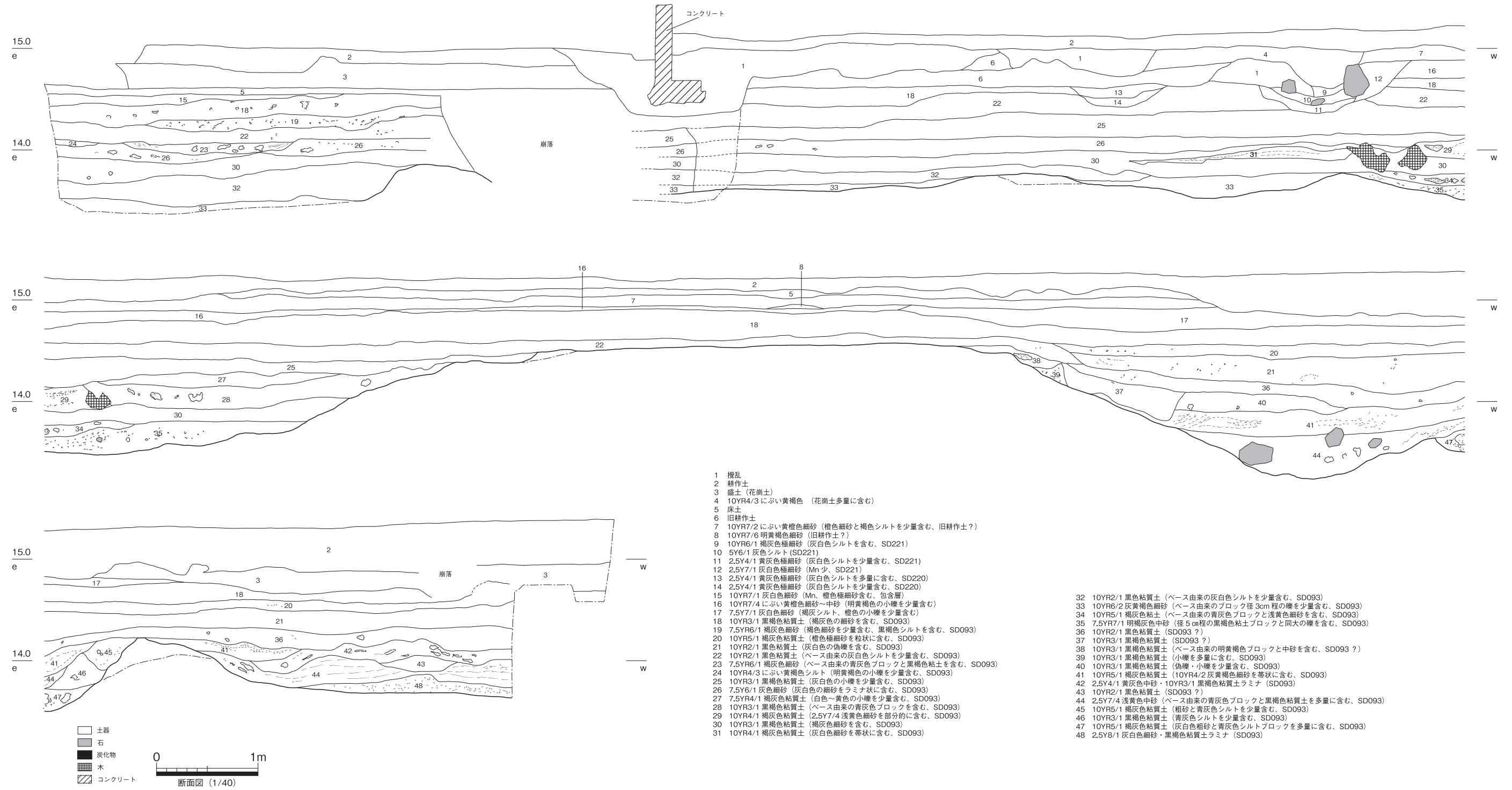
7区

7区は、6区と水路を挟んで西側に位置する。調査前は水田等の耕作地として利用され、現地表面の標高は14.8m前後であった。調査は東西に2小区に区分して行い、全体の実掘面積は約310㎡である。北壁と東壁において基本層序を記録した。

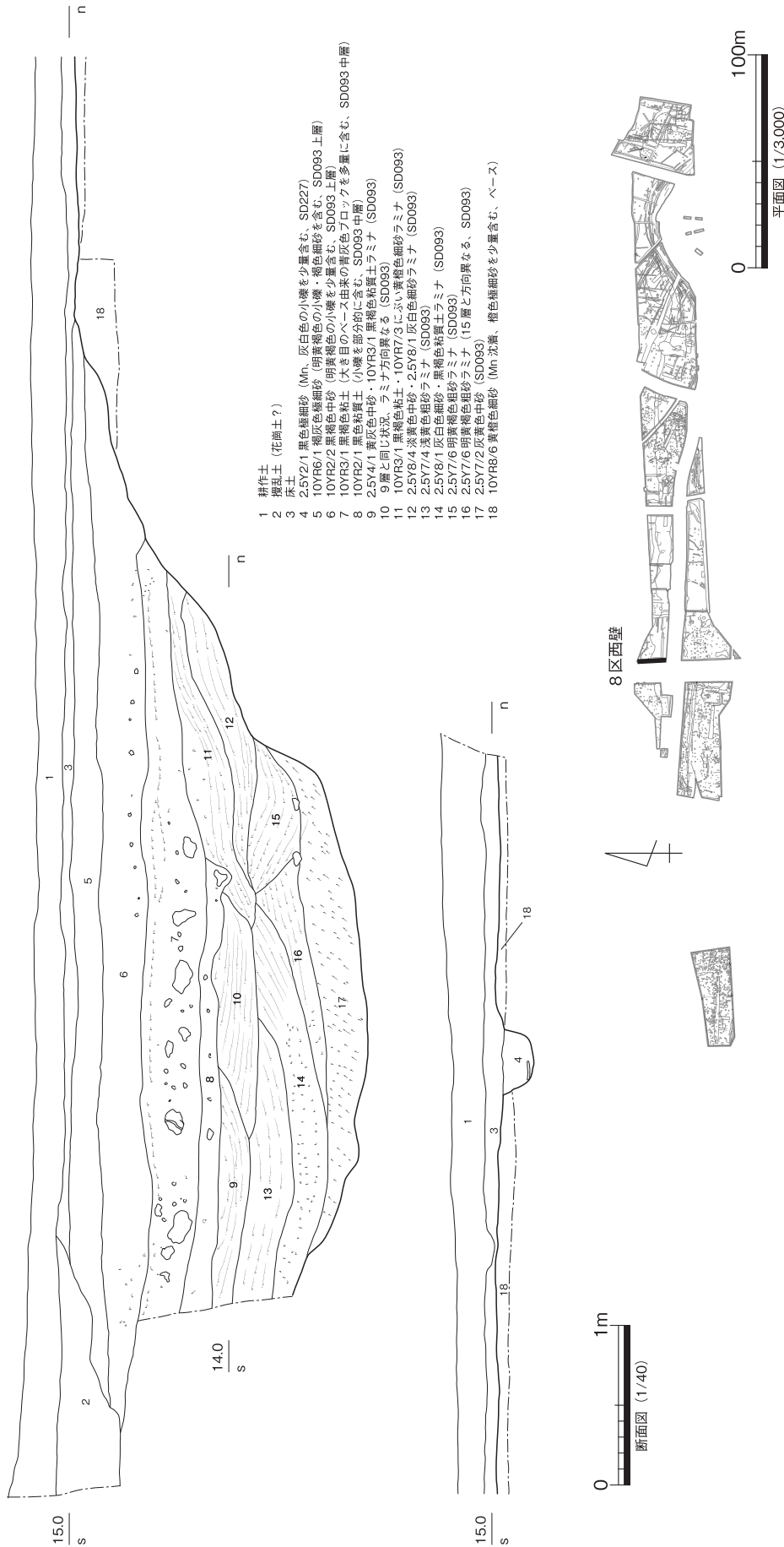
東西に区分した小区間の北壁部分で、やや層界の位置に若干のズレがみられるものの、概ね現耕作土や近世以降と考えられる旧耕作土や床



第 27 図 8 区北壁土層断面図



第28図 8区南壁土層断面図



第29図 8区西壁土層断面図

土層(北壁1～8層)下で、遺構とみられる2ヶ所の落ち込み(北壁9～11層)を確認し、これを第1遺構面とする。第1面のベースとなるにぶい黄橙色細砂(北壁12層)は、平面上の堆積範囲は不詳ながら、断面記録からは西側調査小区の西端付近の一部に堆積が認められるのみで、調査区東半部を中心に上述した旧耕作土や床土層により同層は削奪され残存しない。同様に、東壁の灰白色細砂(東壁3層)は、調査時には包含層として記録されているが、床土とされる東壁2層と同レベルに堆積し、旧耕作土の可能性が考えられる北壁3層と近似することから、東壁3層も旧耕作土ないしは床土層の可能性を想定する。

上述したにぶい黄橙色細砂の下面で、SD219を確認し、本遺構面を第2遺構面とするが、上述したように上位面の削

奪が顕著なため、調査時には、上述したにぶい黄橙色細砂の下面まで重機により掘削し、調査を実施した。したがって確実に第1遺構面に帰属する遺構として確認されたのは、上記2ヶ所の落ち込みのみであるが、平面記録にこれら遺構の記録はなく、遺構からの出土遺物にもぶい黄橙色細砂を含め不詳なため、第1面の所属時期については不明である。

SR04は調査区北端部で東西に検出された自然河川とみられる遺構で、北壁の調査記録より第2面を検出面とし、黄色系細砂や褐色系シルトを埋土(東壁17～19層、北壁13・14層)とする。上面よりSD093の支溝であるSD219が掘り込まれており、古代以前に位置付けられることは確実であるが、縄文土器1点が出土している以外に遺物はなく、調査時に掘り下げて調査を実施していないため、流下時期等の詳細は不明である。なお、周辺の調査を待つ必要はあるが、1～5区東半部で確認された、旧番屋川の自然河川もしくは氾濫堆積物の一部である可能性を想定しておく。

8区

8区は、7区の西に位置し、西側には市道を挟んで12区が位置する。調査前は水田等の耕作地として利用され、7区と同一筆の耕作地とその西側の耕作地の2筆を8区として調査した。西側耕作地の現地表面の標高は15.2m前後、実掘面積は約309.2㎡である。調査区の四周壁面(第26～29図)において、層序の記録を作成した。

現耕作土下に1～3層に細分される床土や旧耕作土、盛土等の水平堆積層下で、SD093等の遺構を検出し、本遺構面を第1遺構面とした。第1面の標高は、調査区北西部で14.98m前後、北東部で14.54m前後、南西部で14.80m前後、南東部で14.50m前後をそれぞれ測り、遺構面上面は近世以降の地下げ等により削奪され、階段状に東へ傾斜して検出された。なお、上述した旧耕作土等の堆積層中において、圃場整備以前に使用されていた石積護岸の南北溝SD211等を検出した。圃場整備以前には、西側耕作地はさらに2筆に細分されていたようだ。

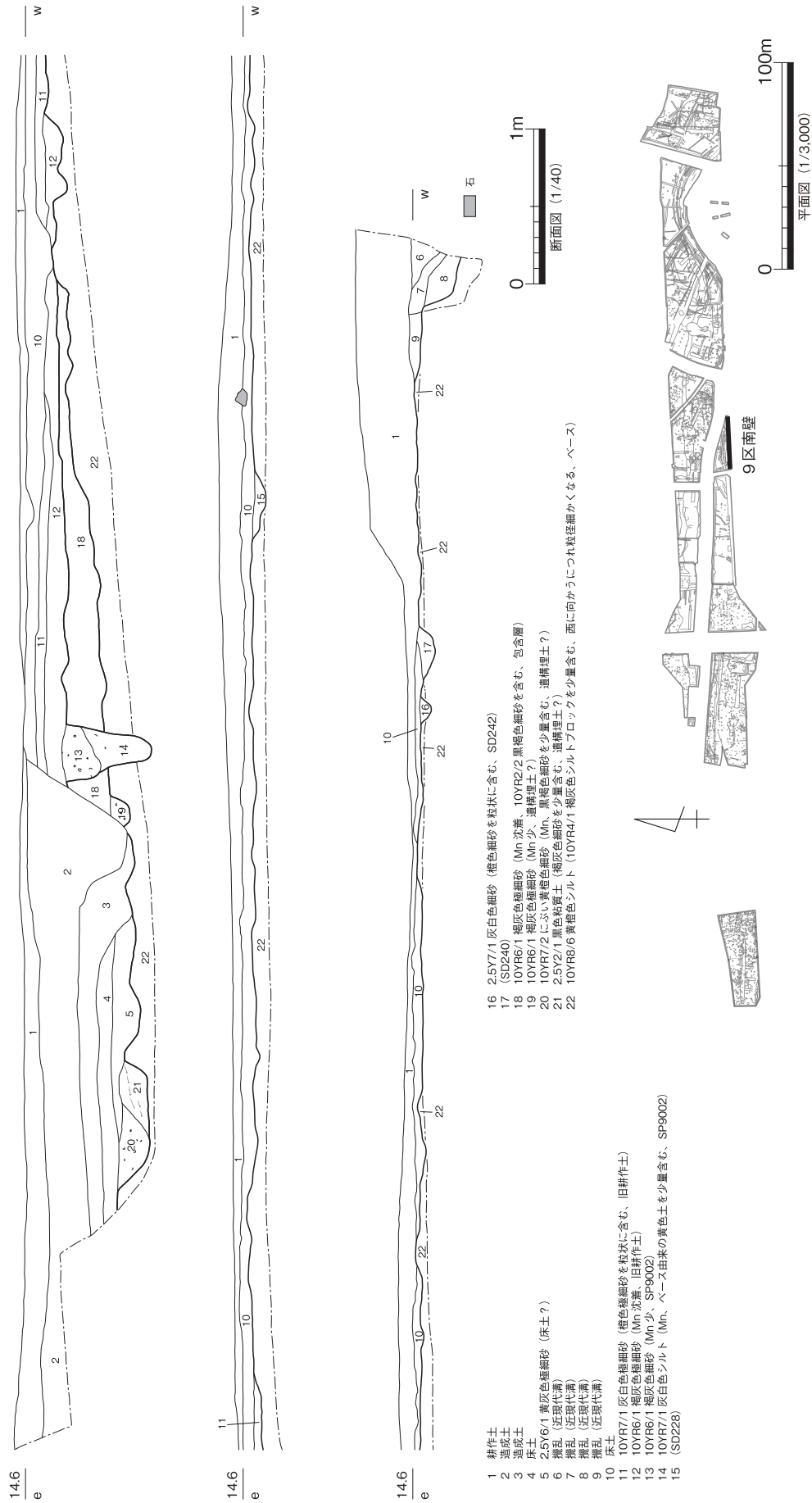
南壁では遺構面上面に4層に細分される水平堆積層(15～18層)が確認された。そのうち灰白色細砂(南壁15層・東壁5層)については、東壁ではSD093の肩部より北側のベース面を覆うように堆積していることから、包含層と判断した。北壁の下位3層については、東壁においてもSD093の掘り方内でその堆積が確認され、同溝の埋土の一部と判断した。しかし、南壁西半では、下位3層が灰白色細砂より0.3m以上高い位置に堆積しており、上述した判断には課題が残る。

第2面のベースには、北壁と西壁において黄色系細砂の堆積が記録されている。細砂の平面分布は不詳なため断定は困難だが、7区SR04の埋土と一連の堆積物の可能性も考えられる。なお、ベース層から遺物は出土していない。

9区

9区は、里道を挟んで6区の南に位置し、南側に丘陵が近接する。調査前は水田等の耕作地として利用され、現地表面の標高は14.7m前後、実掘面積は約137㎡である。南壁(第30図)において基本層序を記録した。

調査区東端部では、現在の耕作土(1層)下に、層厚最大約0.7mの圃場整備時と考えられる造成土(2・3層)が堆積し、整備以前には調査区周辺は東西に2筆の耕作地に分筆されていたと考えられる。また、調査区西端では、耕作土下で整備時に廃棄・埋没したと考えられる区画溝(6～9層)を確認して



第30図 9区南壁土層断面図

いる。整備時の造成土より西側、床土や旧耕作土と考えられる水平堆積層(10～12層)下で、SP9002やSD228等の遺構を検出し、第1遺構面とした。第1面の標高は、西部で14.60m前後、東部で14.34m前後をそれぞれ測り、緩やかに東へ傾斜する。

第1面のベースは、調査区西半部を中心に黄橙色シルト(22層)が厚く堆積し、既述した6区基盤層ののぶい黄褐色粘土(東壁33層、南壁A17層)と一連の堆積物と考えられる。東端部では、基盤層上に褐灰色極細砂(18層)が東へ傾斜して斜面堆積していた。本層の平面分布は記録されていないが、本層も既述した6区の第2面包含層である黒褐色粘質シルト(南壁A14層・東壁11層)と一連の堆積物の可能性が考えられる。なお、本調査区では本層から遺物の出土は確認されていないが、本層下面で遺構と考えられる堆積物(19層等)が確認されたことから、本層下面を第2遺構面とし、本層を第2面包含層とする。

10区

10区は、9区西に設定した調査区で、里道を挟んで北に7区が所在する。調査前は水田等の耕作地として利用され、現地表面の標高は16.4m前後であった。調査は東西2小区に区分して行い、全体の実掘面積は約422㎡である。南壁において基本層序を記録した。

耕作土(1層)下において、近年の圃場整備時の造成土や盛土、攪乱等(2～18層)が認められた。その下位には、近代以前の旧耕作土や床土層等が水平堆積(19～22・25層)していた。そのうち調査区西半部の明緑灰色土(土質は不記載、20層)の下面で、溝とみられる灰色系細砂や粘土の堆積物(23・24層)が認められ、その西側では旧耕作土とみられる灰白色極細砂(25層)の水平堆積が途切れ、ベースとなる褐灰色粘質土(48層)の盛り上がり確認された。この盛り上がりは、里道等として用いられた畦畔の可能性が高く、耕作土上面の溝(23・24層)は畦畔脇の用・排水路として開削されたと考えられる。

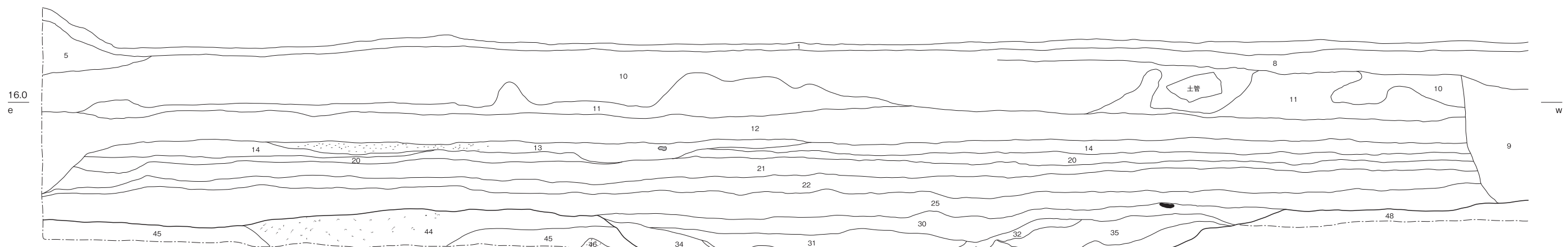
そして、上述した近世以降と考えられる旧耕作土(25層)下で、弥生時代のSD244やSD248等の遺構を検出したことから、本遺構面を第1遺構面として調査を実施した。第1遺構面の標高は、調査区南西部で15.5m前後、調査区南東部で14.9m前後をそれぞれ測り、東に緩やかに傾斜する。

第1遺構面のベースには、上述した9区のベース基盤層と一連の堆積物と考えられる、褐色系シルトや粘質土(45・47・48層)や淡黄色粘土(49層)を切り込み、褐灰色粗砂(44層)等の堆積物がみられ、弥生時代以前に位置付けられる旧流路等が埋没している可能性が考えられる。

11区

11区は、10区の西に隣接する調査区で、西は市道に接し、北に里道を挟んで8区が配される。調査前は耕作地として利用され、現地表面の標高は16.2m前後であった。調査は、旧地割により南北に11区と11s区の2小区に区分して行い、全体の実掘面積は約420.9㎡である。調査区の北・西・南壁(第32～34図)と、南小区の南壁(第35図)において、基本層序を記録した。

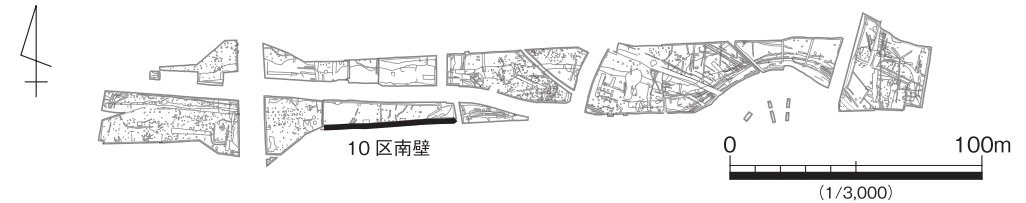
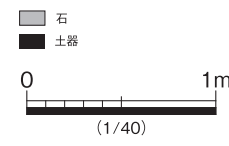
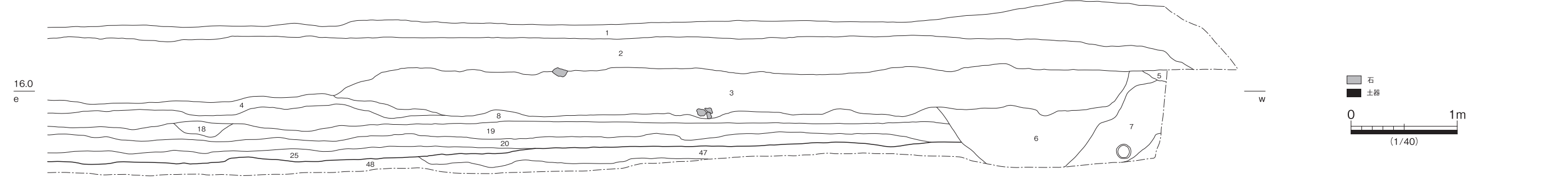
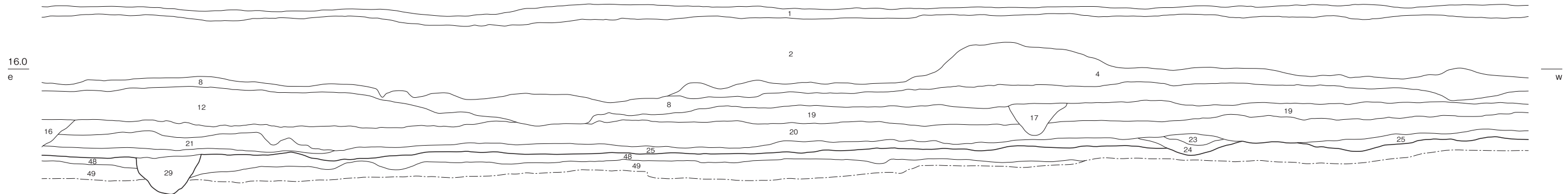
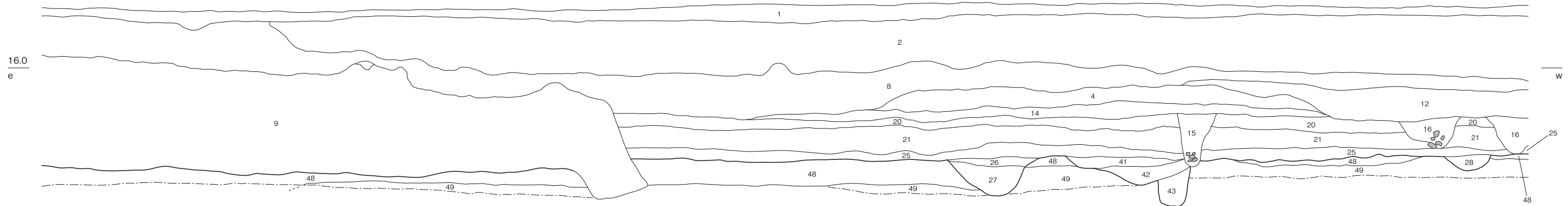
現耕作土下には、1～5層以上に細分される旧耕作土や床土層等の水平堆積(南壁3～11層、西壁3～12層)が認められ、その下面で柱穴(西壁13・14層等)や土坑SK060(南壁12層)等の遺構を確認したことから、第1遺構面とした。第1面の標高は、15.6～15.9m前後であった。近世以降と考えられる耕地に伴う地下げ等により、遺構面は階段状に削奪を被っている。



- 1 耕作土
- 2 造成土
- 3 5GY6/1 オリーブ灰色シルト (現代遺物多い、盛土)
- 4 10YR4/1 褐灰色極細砂 (明黄色粗砂を含む、盛土)
- 5 花崗土 (盛土)
- 6 5BG5/1 青灰色粘土 (床土由来の橙色ブロックを多量に含む、攪乱)
- 7 5BG5/1 青灰色粘土 (明浅黄色細砂を少量含む、攪乱)
- 8 造成土
- 9 攪乱 (試掘トレンチカ?)

- 10 10YR6/6 明黄褐色 (造成土)
- 11 10Y5/2 オリーブ灰色 (造成土)
- 12 10YR5/1 褐灰色砂質土 (径5~10cmの礫と径5cm以下の灰色粘土ブロックを局所的に含む、盛土)
- 13 盛土
- 14 10YR4/1 褐灰色 (旧耕作土)
- 15 2.5YR5/4 にがい赤褐色砂質土 (暗渠、下位に礫やレンガ片を含む)
- 16 10YR7/1 灰白色砂質土 (攪乱)
- 17 2.5Y8/4 淡黄色細砂 (攪乱)
- 18 2.5Y7/1 灰白色極細砂 (橙色シルトブロックを少量含む、攪乱)

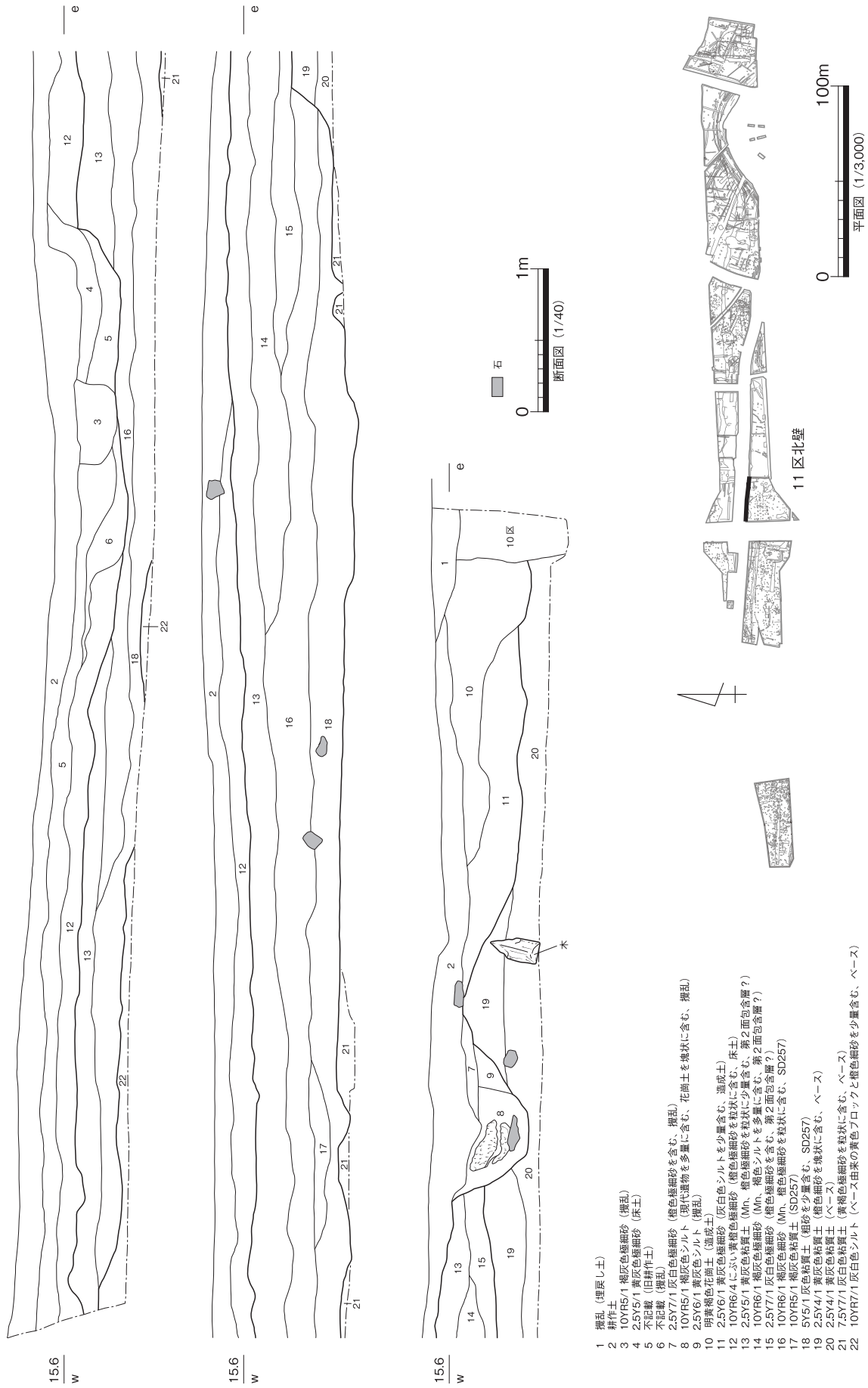
- 19 2.5GY7/1 明オリーブ灰色細砂 (黒褐色粘土と橙色細砂を含む、旧耕作土)
- 20 5G7/1 明緑灰色 (床土)
- 21 10YR8/6 黄褐色 (5G7/1 明緑灰色土?を含む、床土)
- 22 7.5Y4/3 暗オリーブ色 と 5G7/1 明緑灰色 (旧耕作土)
- 23 10YR7/1 灰白色細砂 (Mn多、溝)
- 24 N5/ 灰色粘土 (橙色シルトを少量含む、溝)
- 25 10YR8/1 灰白色極細砂 (褐色シルトを多量に含む、旧耕作土)
- 26 7.5Y4/1 灰色粘質土 (SD248)
- 27 10YR3/1 黒褐色粘質土 (SD248)



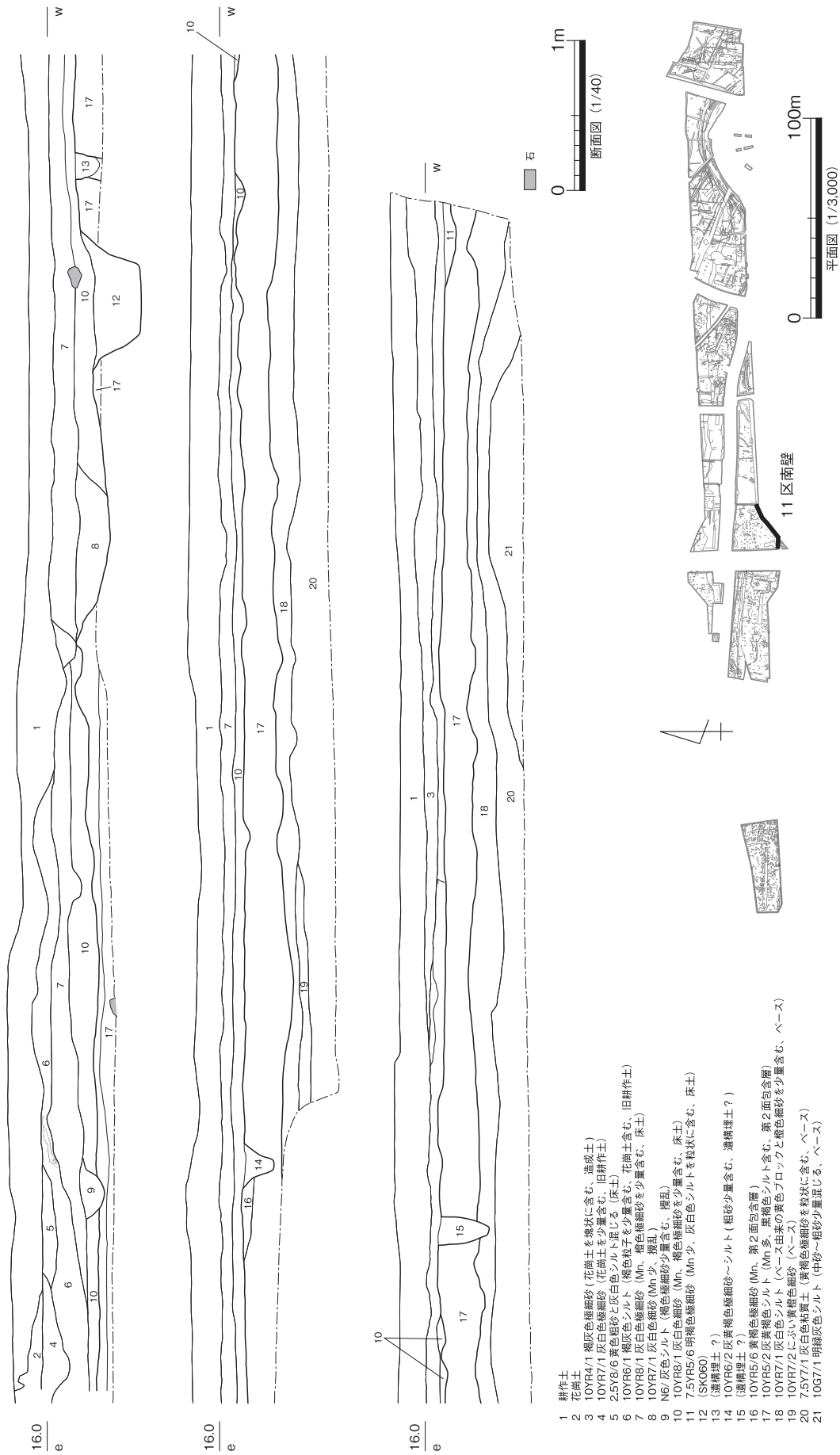
- 28 10R5/3 赤褐色砂質土 (遺構埋土?)
- 29 10YR3/1 黒褐色粘土 (遺構埋土?)
- 30 10YR3/1 黒褐色粘土 (褐色細砂含む、SD244)
- 31 N5/ 灰色粘土 (橙色細砂含む、SD244)
- 32 10YR6/1 褐灰色細砂 (褐灰色シルトと橙色粗砂含む、SD244)
- 33 10YR5/1 褐灰色粘質土 (やや灰色の細砂を少量含む、SD244)
- 34 10YR6/1 褐灰色細砂 (Mn沈着、橙色粗砂を含む、SD244)
- 35 10YR4/1 褐灰色粗砂 (黒褐色シルト、ベース由来の明黄褐色細砂と橙色粗砂を含む、SD244)
- 36 5Y3/2 オリーブ黒色中砂 (ベース由来の明黄褐色細砂と灰白色シルトブロックを含む、SD244)
- 37 10YR5/1 褐灰色粘質土 (灰白色細砂含む、SD244)
- 38 5Y6/1 灰色細砂 (褐色シルトブロックを含む、SD244)
- 39 5Y4/1 灰色シルト (灰白色粗砂を帯状に含む、SD244)

- 40 10YR6/1 褐灰色粗砂 (黒色シルトブロックと径1~2cm程の小礫をまばらに含む、SD244)
- 41 2.5YR6/2 灰赤色細砂 (SD249?)
- 42 2.5YR7/2 明赤灰色細砂 (SD249?)
- 43 10YR3/1 黒褐色粘質土 (SP10021?)
- 44 10YR6/1 褐灰色粗砂 (ベース由来のシルトブロックを少量含む、ベース)
- 45 10YR7/6 明黄褐色粘質土 (褐灰色シルト少量混じる、ベース)
- 46 10YR8/1 灰白色細砂 (ベース由来のブロックや褐色粗砂を少量含む、ベース?)
- 47 10YR4/1 褐灰色シルト (Mn沈着多、ベース?)
- 48 7.5YR6/1 褐灰色粘質土 (褐色シルトを少量含む、ベース)
- 49 2.5Y8/4 淡黄色粘土 (灰白色細砂を含む、ベース)

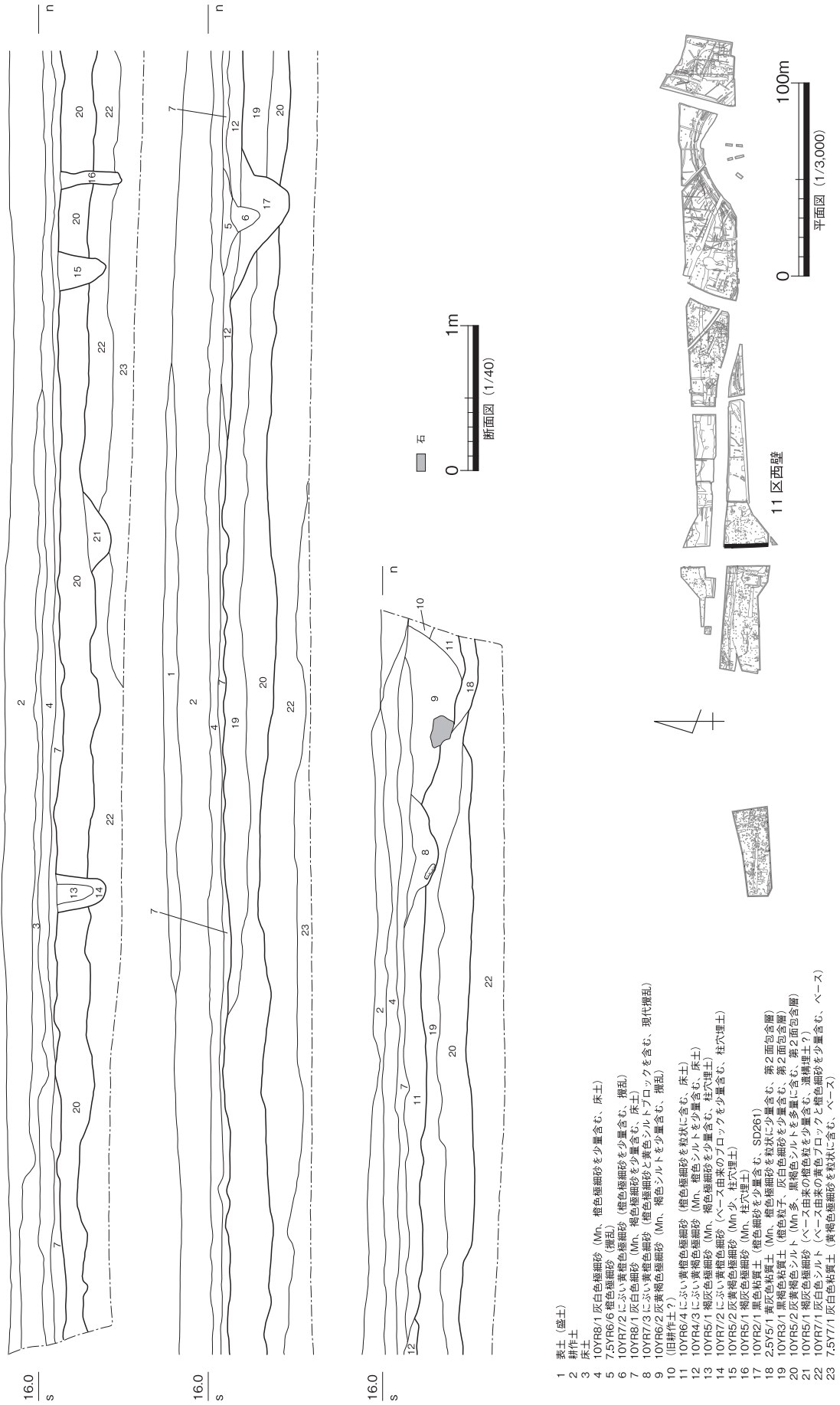
第31図 10区南壁土層断面図



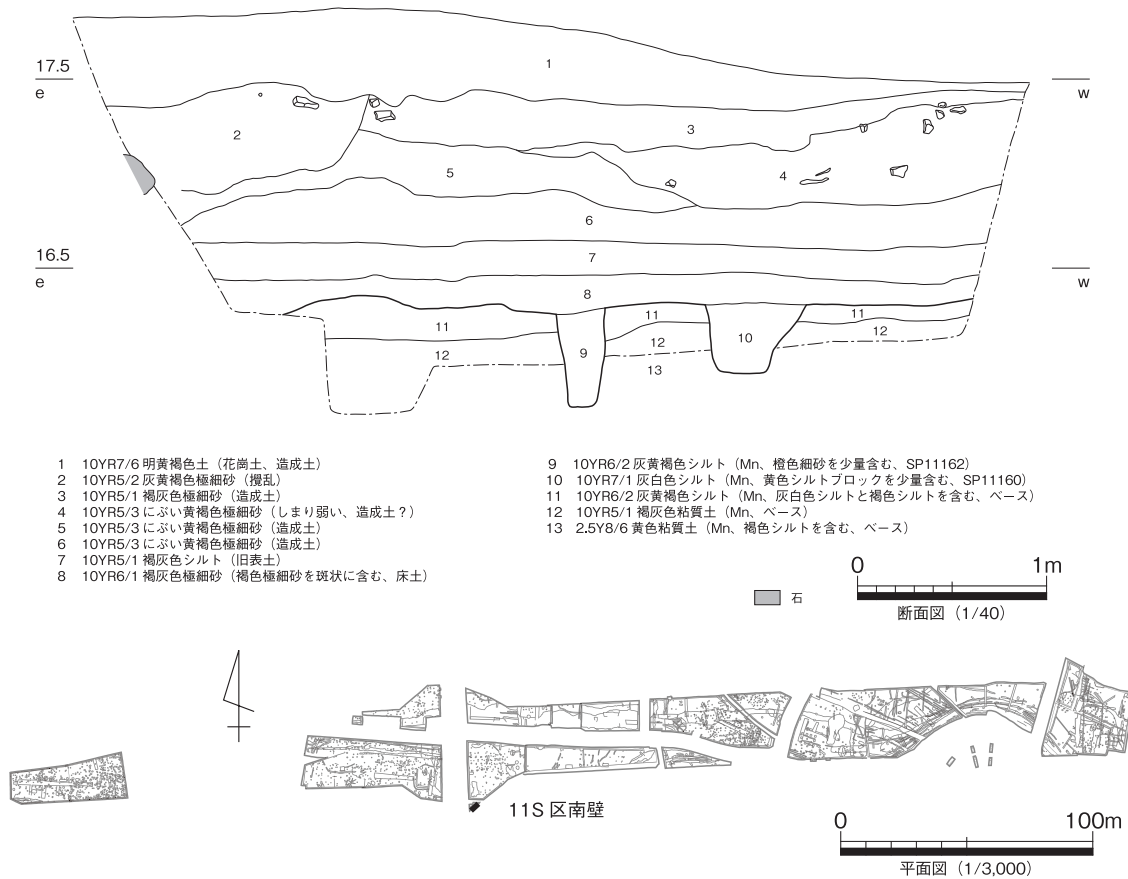
第32図 11 区北壁土層断面図



第 33 図 11 区南壁土層断面図



第34図 11区西壁土層断面図



第 35 図 11s 区南壁土層断面図

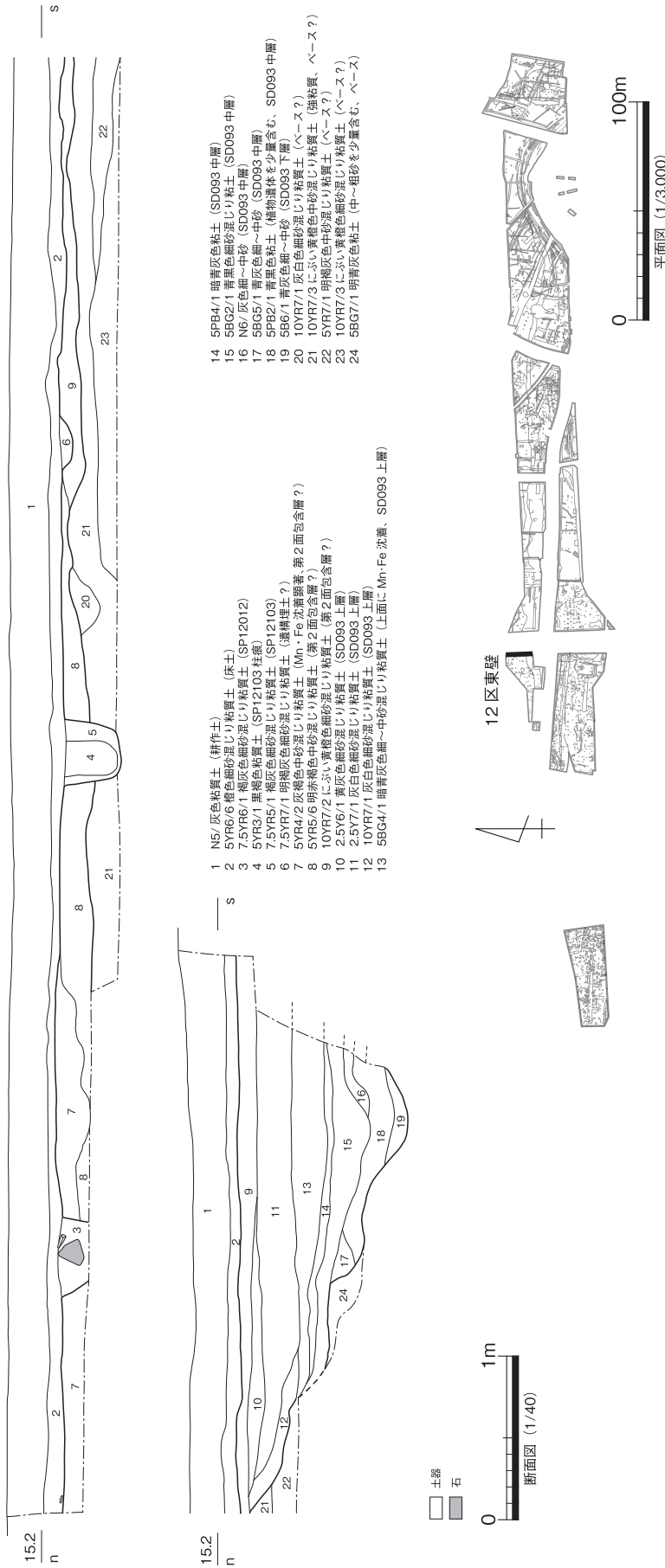
第 1 面のベースには、旧耕作土の可能性のある黄灰色粘質土(北壁 13 層)や灰黄褐色シルト(南壁 17 層、西壁 20 層)等の水平堆積が認められ、その下面で溝 SD257 (北壁 16 ~ 18 層)等の遺構を確認したことから、本遺構面を第 2 遺構面として調査を行った。第 2 面の標高は、調査区南西部で 15.6 ~ 15.7 m 前後、北西部付近で 15.4 m 前後、北東部付近で 15.0 ~ 15.4 m をそれぞれ測り、緩やかに北東方向へ傾斜して検出された。なお、本調査区では第 2 遺構面下で一部掘り下げを行い、溝 SD263 を確認したが、壁面の記録には記載がなく、掘り込み位置等の層位関係は不詳である。

第 2 面のベースには、主に灰色系のシルトや粘質土が堆積し、10 区より連続するベース基盤層と考えられる。それら基盤層に介在して、砂層(南壁 19 層)の堆積が見られることから、本層が上述した溝 SD263 の埋土の可能性も考えられる。

11s 区(第 35 図)では、厚い造成土下に旧耕作土と床土の水平堆積層(7・8 層)があり、その下面で SP11162 等の遺構を検出し、第 1 遺構面とした。第 1 面の標高は、16.3 m 前後である。標高値より、11 区第 1 面に相当する。なお、11 区で確認された第 2 面については、調査記録には示されていない。

12 区

12 区は、市道を挟んで 8 区の西側に位置する。調査前は水田等の耕作地として利用され、現地表面の標高は 15.4 m 前後であった。後述する 13 区との間に民家への進入路が所在したため、市道との取り付き部を除いて、東西に細長い調査区となった。調査区南端で大型幹線水路 SD093 の延長が確認され

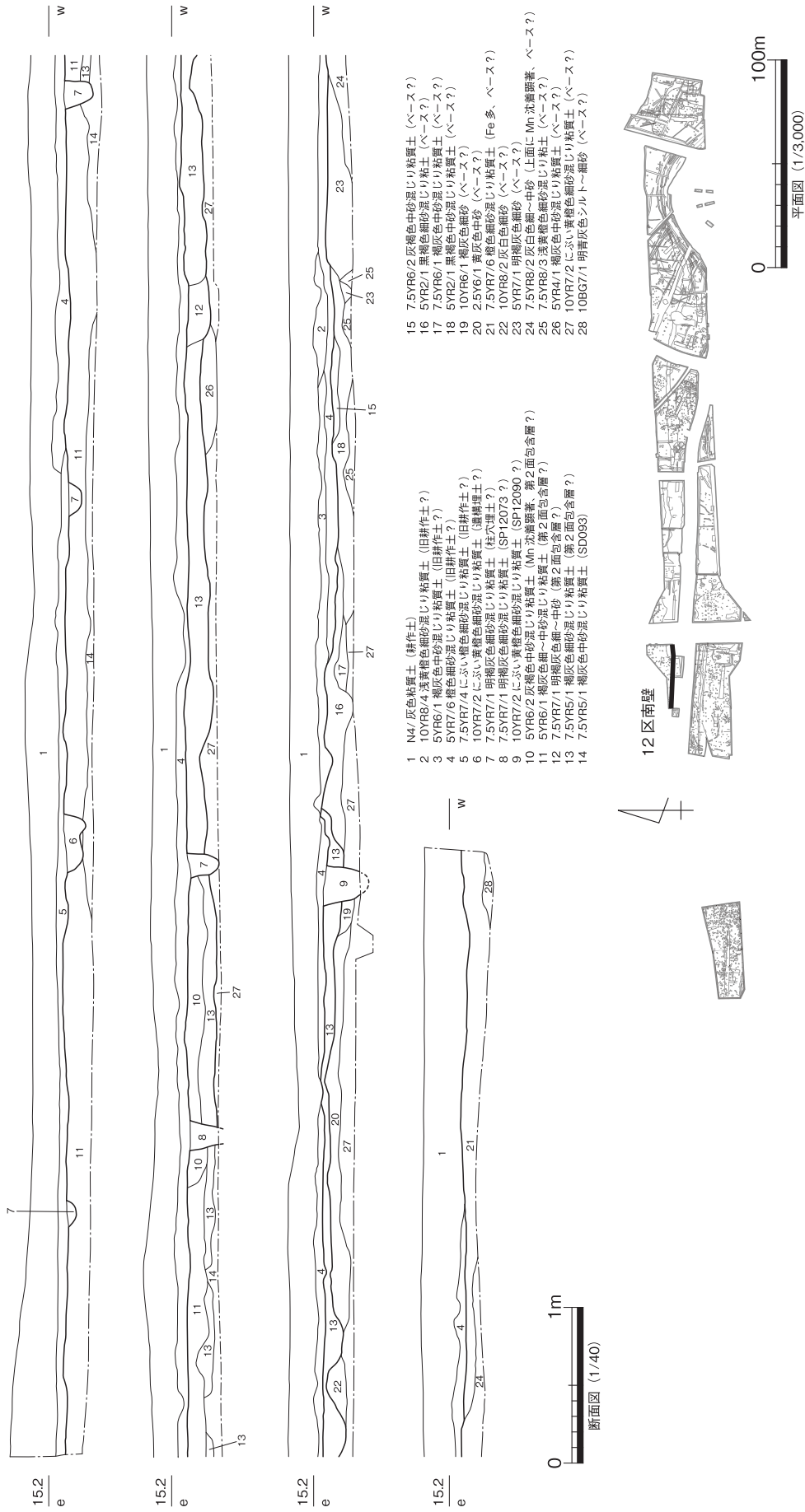


第36図 12区東壁土層断面図

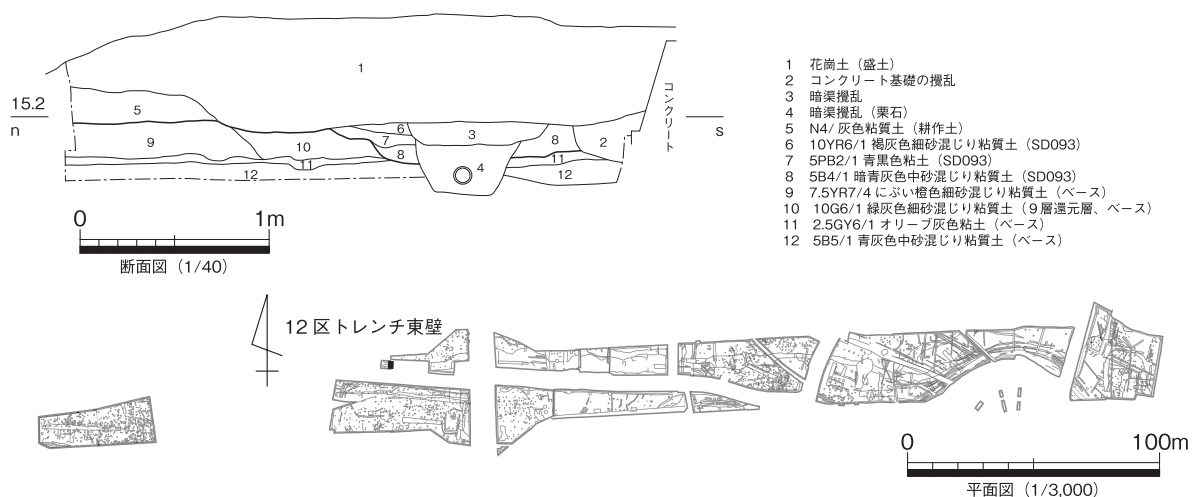
たことから、一部南に調査区を拡張 (12区トレンチ) した。拡張区を含めた実掘面積は約 241㎡である。調査区の東壁 (第36図) と南壁 (第37図)、拡張区の東壁において基本層序を記録した。

現耕作土 (1層) 下には、4層に細分される旧耕作土や床土等の水平堆積 (南壁2～5層) が認められ、その下位で柱穴等の遺構が確認されたことから、第1遺構面として調査を行った。第1面の標高は、若干の起伏はあるものの15.1m前後で一定して確認され、近世以降の耕地造成によって遺構面は顕著な削平を被っている可能性が想像された。

第1面のベース層は、3～4層に細分される灰褐色系粘質土等 (東壁7～9層・南壁10～13層) が東へ傾斜して堆積し、上述したように本層下でSD093を検出し、第2遺構面とした。なお土層図には、上述した包含層の下位にSD093以外にも、遺構埋土の可能性のある堆積物 (東壁20層、南壁19・26層等) が記録されているが、それらについては色調や土質等以外に記録がなく、また平面図にも当該位置に遺構の記録がないことから、すべて遺構面下のベース層と判断した。第2面は、調査区東半部において確認され、西半部では12区トレンチ調査区を含め、包含層は削奪され残存しない。遺構面の標高は、12区トレンチ付近で15.2m前後、北東部付近で14.9m前後をそれぞれ



第 37 図 12 区南壁土層断面図



第38図 12区トレンチ東壁土層断面図

測り、緩やかに北東方向へ傾斜する。

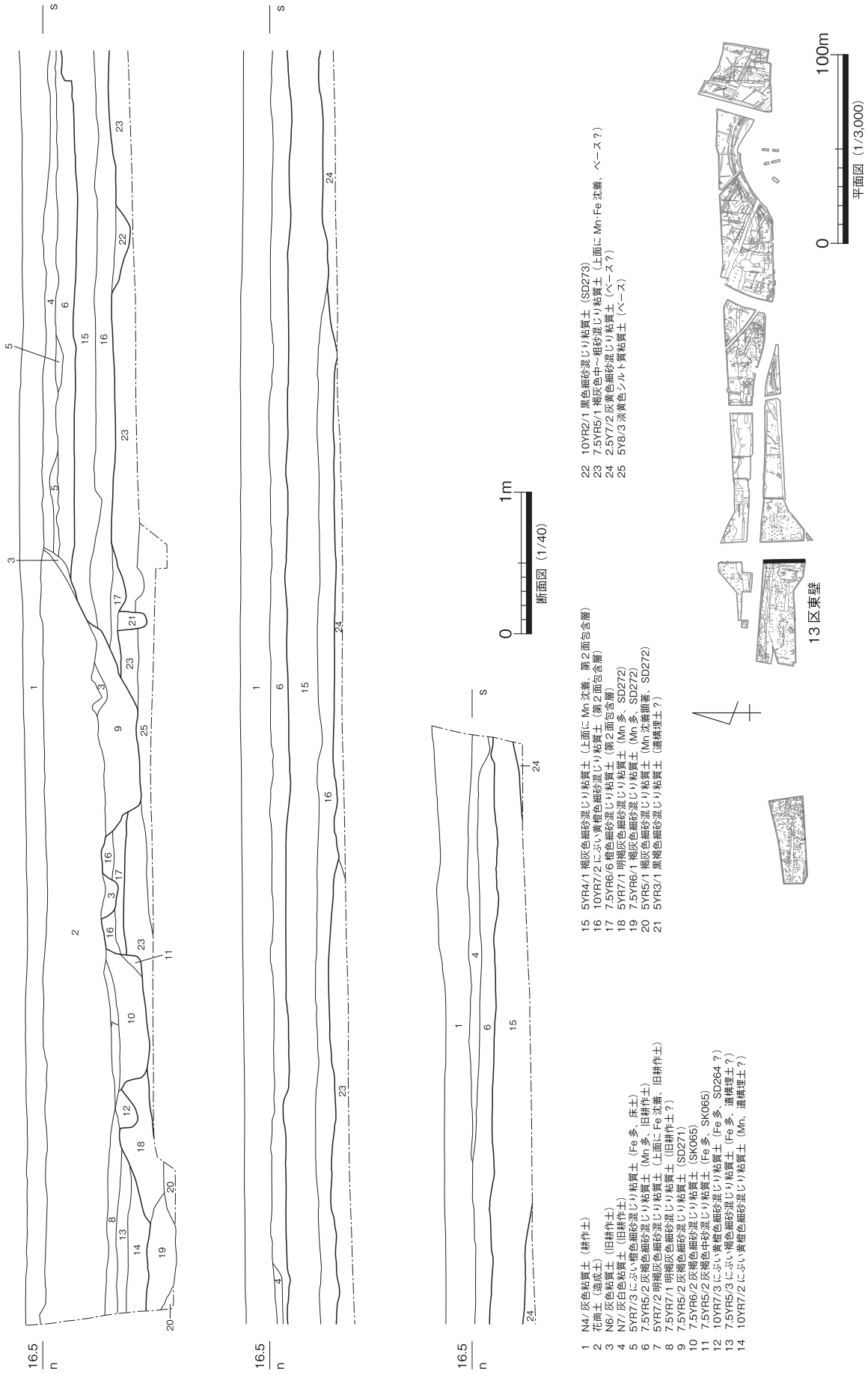
第2面のベース層には、砂層や砂混り粘質土がレンズ状等に堆積しており、流水下堆積層の可能性が考えられる。SD093以前の旧流路もしくは洪水堆積層と考えられるが、掘り下げを行っていないため、帰属時期等の詳細は不明である。

13区

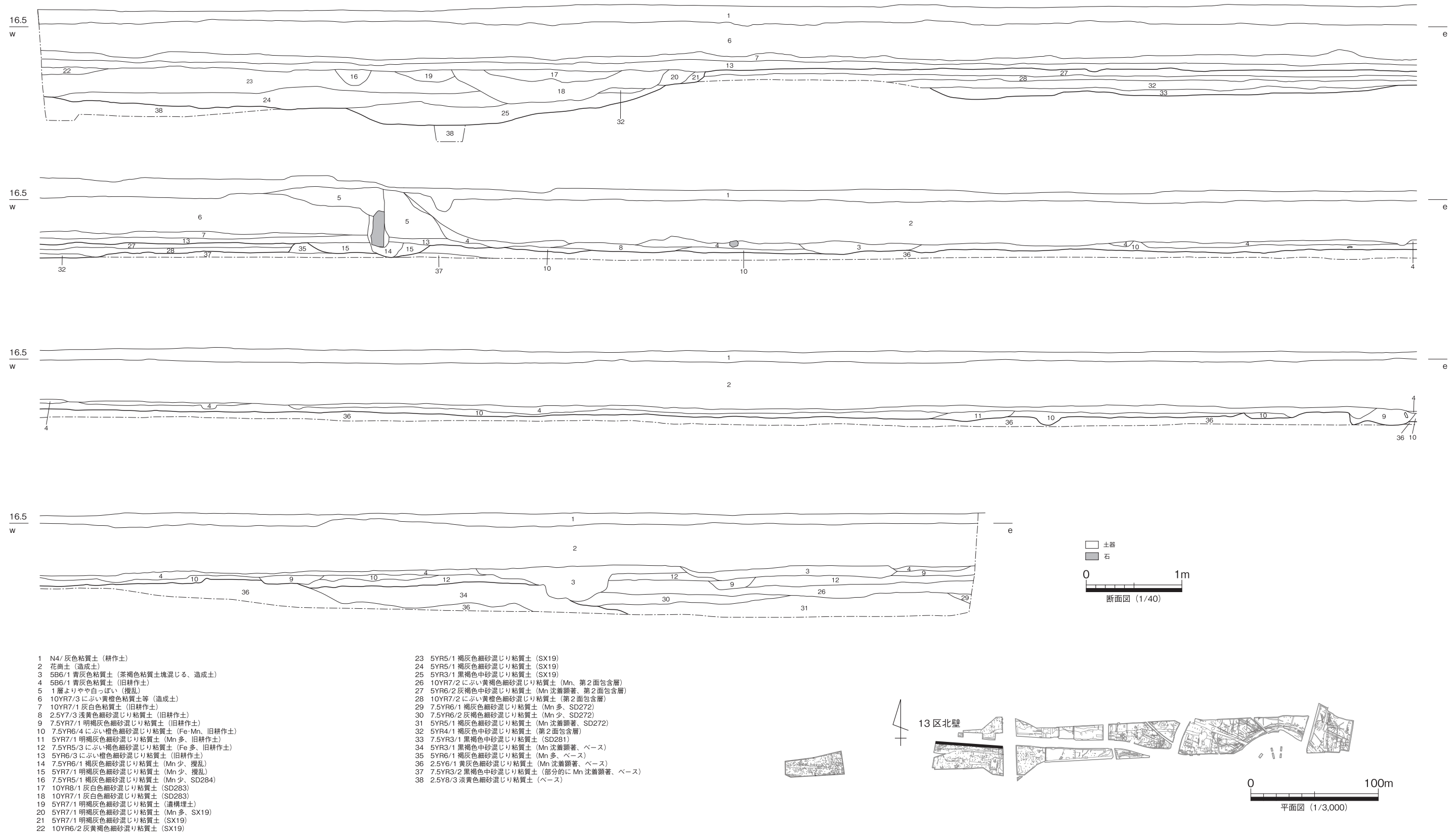
13区は、市道の西側、上述した12区の南側に隣接する。3小区（①～③区）に分割して調査を実施し、3小区を合計した実掘面積は約618.8㎡である。各小区単位の壁面にて基本層序の調査を行ない、そのうち13区四周壁面の調査成果（第39～42図）を、編集して掲載した。

本調査区も、調査前は水田等の耕作地として利用されており、一筆の耕作地に区画されている。現地表面の標高は16.6～16.8m前後で、緩やかに東に下る。北側に設定した13区③では、現耕作土下に層厚0.4～0.5mの昭和期に実施された圃場整備に伴う造成土（東壁2層、北壁2・3・6層）が堆積し、その下面で圃場整備時に埋められたコンクリート製の畦畔が確認され、本調査区は近年まで3筆以上の区画に分割されており、それは1960年代撮影の空中写真でも確認できる（写真図版表紙）。13区①・②の耕作土下には、数層に細分される床土や旧耕作土等の水平堆積（東壁4～6層）が確認され、その下面で柱穴等の遺構が確認された。これを第1遺構面とする。第1遺構面の標高は、調査区北東部で15.97m前後、北西部で16.05m前後、南西部で16.20m前後、南東部で16.36m前後をそれぞれ測り、遺構面上面を近世以降と考えられる地下げや上述した圃場等による削奪を被っているものの、概ね北東方向へ緩やかに傾斜していることが確認された。第1遺構面で検出された遺構には、SD283やSK065等があり、中・近世の遺物が出土していることから、中世12世紀後葉以降の遺構面と考えられる。

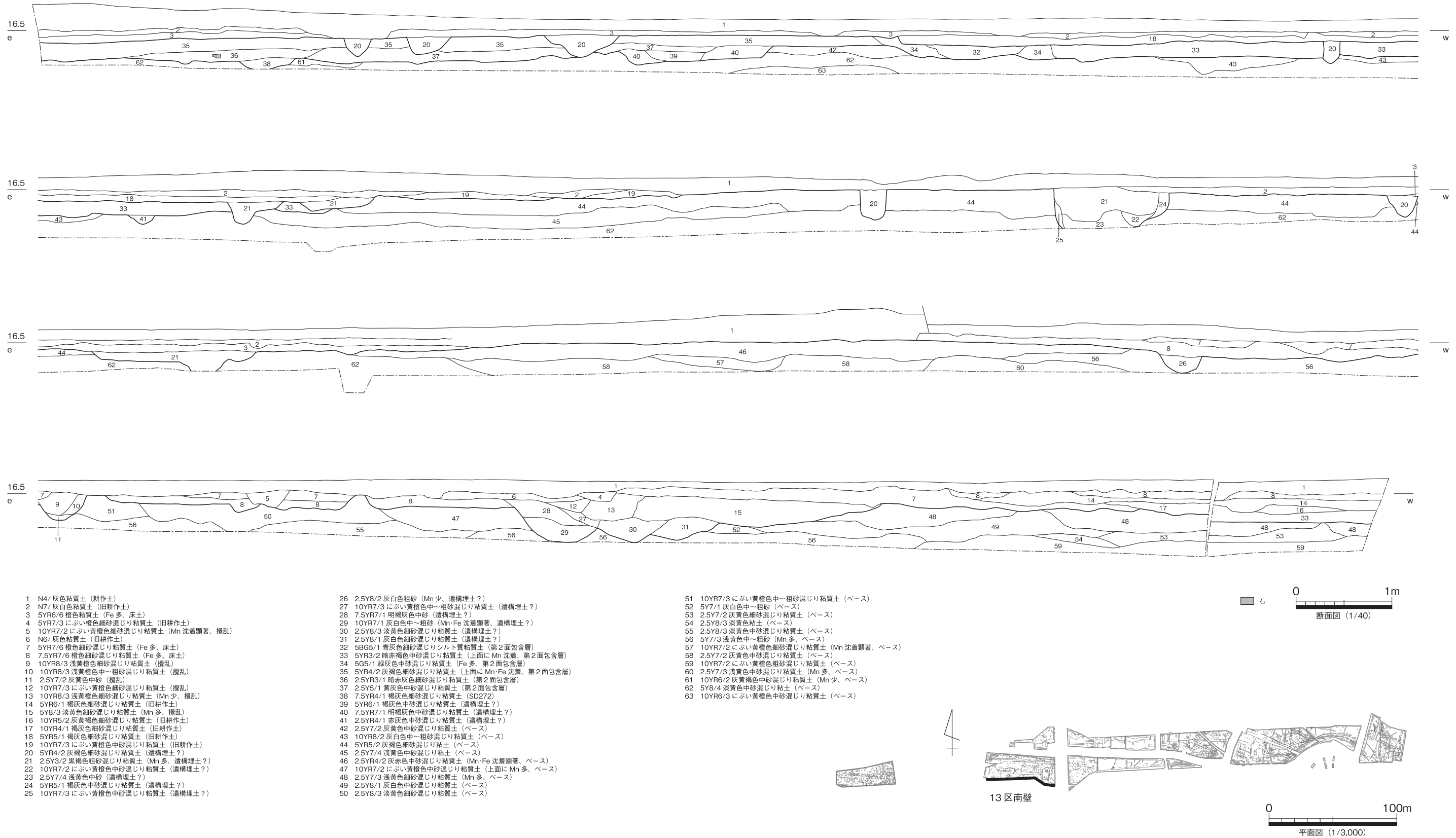
第1面のベースには、層厚10cm以下で概ね水平堆積した複数層に細分される粘質土を主とする包含層（東壁15～17層、南壁32～37層、西壁②10層）が認められた。その下面で、SD273やSD272等の遺構を検出し、本遺構面を第2遺構面とする。なお、東壁17層は、SD272の埋土の可能性も考えられたが、堆積範囲よりここでは包含層と理解した。さらに、北壁27・28層も挿図では第2面包含層としたが、東端部はほぼ直に掘り込まれており、調査区北端部より北に広がる遺構の埋土ないしは耕作土層の可能性も考えられるが、いずれとも判断し難い。遺構面の標高は、調査区北東部で15.75m前後を



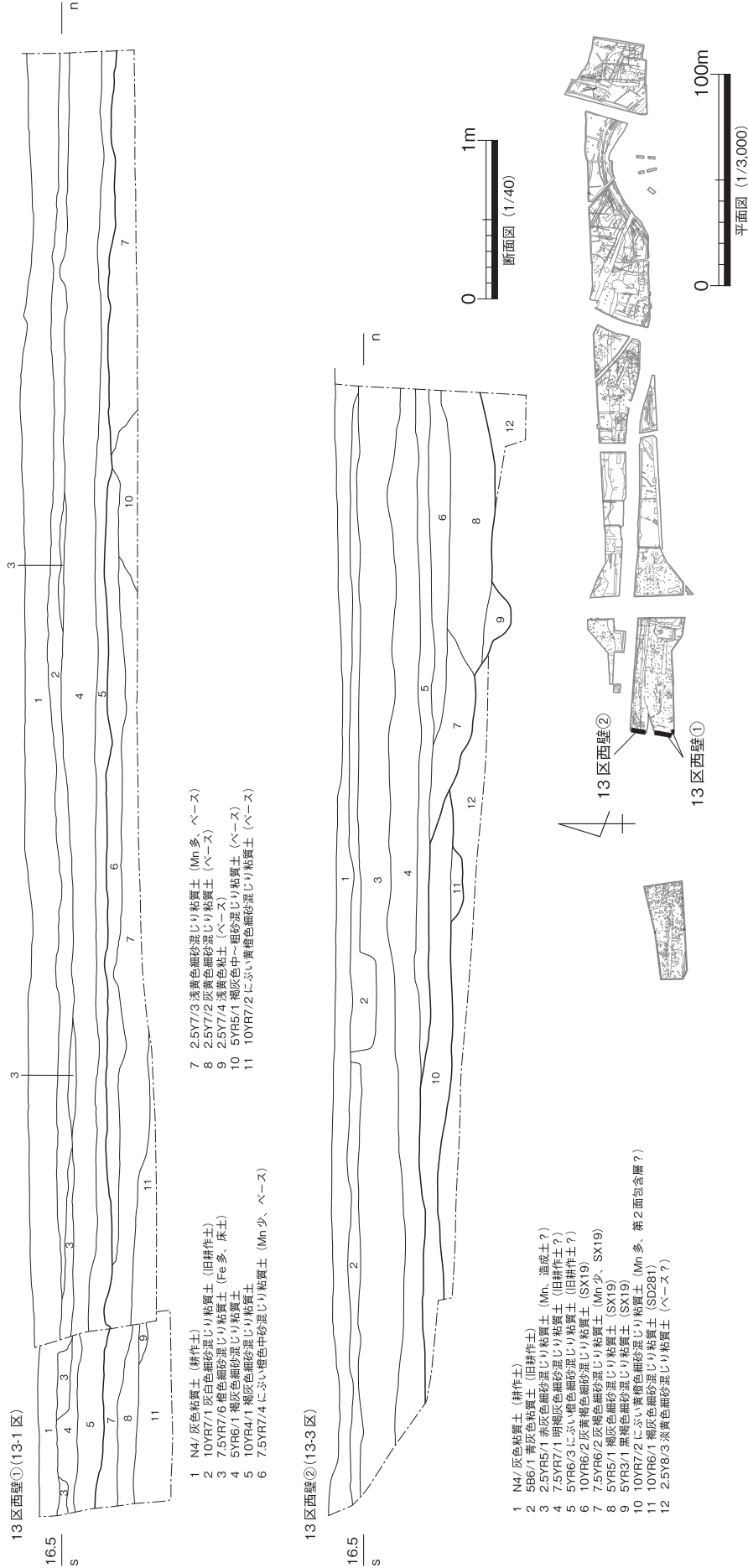
第 39 図 13 区東壁土層断面図



第40図 13区北壁土層断面図



第41図 13区南壁土層断面図



第42図 13区西壁土層断面図

測り、緩やかに北東方向へ傾斜する。第2遺構面に帰属する遺構には、SD281 や SD272 等があり、弥生時代後期から中世の遺物が出土する。したがって本遺構面は弥生時代後期以降の遺構面の可能性を考える。

上述した第2面のベースには、主に灰色ないし黄色系粘土や粘質土(東壁23～25層、南壁42～51層等)と、それらに介在して灰色ないし黄色系の砂層(南壁52・56層等)の流水下の堆積物が確認された。調査区東半部では水平堆積を基調とし、西半部では細かなレンズ状堆積がみられ、その中に砂層の混在することから、第2面形成前の旧流路の可能性も考えられるが、情報が乏しく断定はできない。粘土や粘質土を主体とすることから、11・12区より連続する基盤層と考えられる。

14区

14区は西端の調査区で、調査前は耕作地として利用され

ており、現地表面の標高は17.1m前後であった。3小区に区分して調査を行い、全体の実掘面積は約678.37㎡である。調査では、調査区四周と、中央部で南北方向の壁面の計5面の基本層序を記録した。以下では、調査区四周の壁面の調査記録を提示し、主に調査区東壁の記録(第43図下)をもとに、基本層序について整理する。

調査区北東部の旧耕作土(東壁3層、北壁3層)下で、昭和期の圃場整備に伴うとみられる造成土(東壁5～7層・北壁4・5層)を確認した。おそらく圃場整備前の調査区は、北東方向へ下る2～3筆の耕作面に分割されていたと考えられる。

調査区南部では、旧耕作土とみられるにぶい橙色粘質土(東壁8層、南壁11層)の下面で、SP14576等の遺構(南壁13・14層等)を確認し、第1遺構面とした。第1面の標高は、調査区南西部で17.0m前後、同南東部で16.9m前後をそれぞれ測り、同北半部は上述した圃場整備時の造成土により削奪されていたが、遺構面は概ね緩やかに北東方向へ傾斜していたと考えられる。

第1面のベースには、にぶい褐色粘質土(東壁12層)が北へ傾斜して堆積し、その下面で遺構埋土の可能性のある堆積層(東壁13～15層)が検出され、これを第2遺構面とした。本遺構面も、北部は圃場整備時の造成土により削奪され残存しない。

第2面のベースには、褐灰色粘質土(東壁16層)が堆積し、北端部で確認された17層も一連の堆積層と考え、本層下面でSP14599等の遺構を確認したことから、本遺構面を第3遺構面とした。本遺構面も第1面同様、北東方向へ緩やかに傾斜していたと考えられる。なお、造成土下で検出したSK1428は、第2面か本遺構面に帰属する可能性が考えられる。

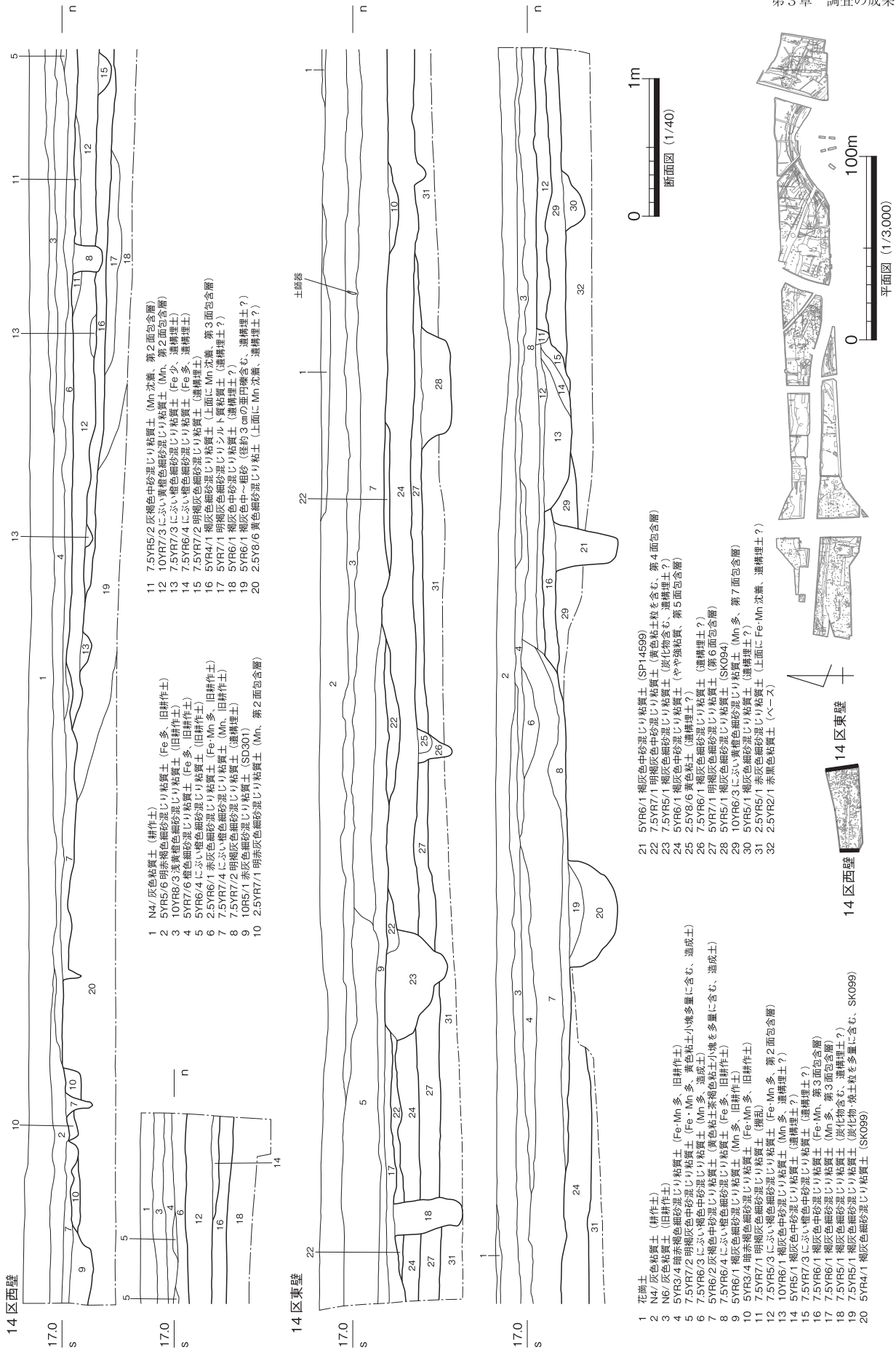
第3面のベースには、明褐灰色粘質土(東壁22層)が薄く堆積し、その下面で遺構埋土と考えられる褐灰色粘質土(東壁23層)を確認した。これを第4遺構面とするが、第4面包含層とした明褐灰色粘質土は、第3面包含層と一連の堆積物である可能性もあり、本遺構面を独立した遺構面として理解してよいかは、判断に迷う。

第3・4面のベースには、北半部で褐灰色粘質土(東壁24層)、南半部でにぶい黄橙色粘質土(東壁29層)の堆積がそれぞれ確認された。両層の関係については記録からは不明であり、また一連の堆積物とは考えられない。北半の24層下で遺構埋土と考えられる堆積層(東壁25・26層)を確認し、同様に29層下面でも遺構埋土と考えられる堆積層(東壁30層)が確認され、両層下面が遺構面となることは間違いない。この両遺構面については、24層の堆積が調査区南部へ広がらないことや、24層と29層を比較した場合、24層がより上位の包含層である23層に近似することから、24層が29層より上位の堆積層であると判断し、24層下面を第5遺構面とする。

第5面のベースには、明褐灰色粘質土(東壁27層)が北へ傾斜して堆積し、南半部は上述した第5面包含層に削奪され残存しない。本層下面でSK1422(東壁28層)を検出したことから、本遺構面を第6遺構面とする。

なお、上述した29層下面を第7遺構面とする。

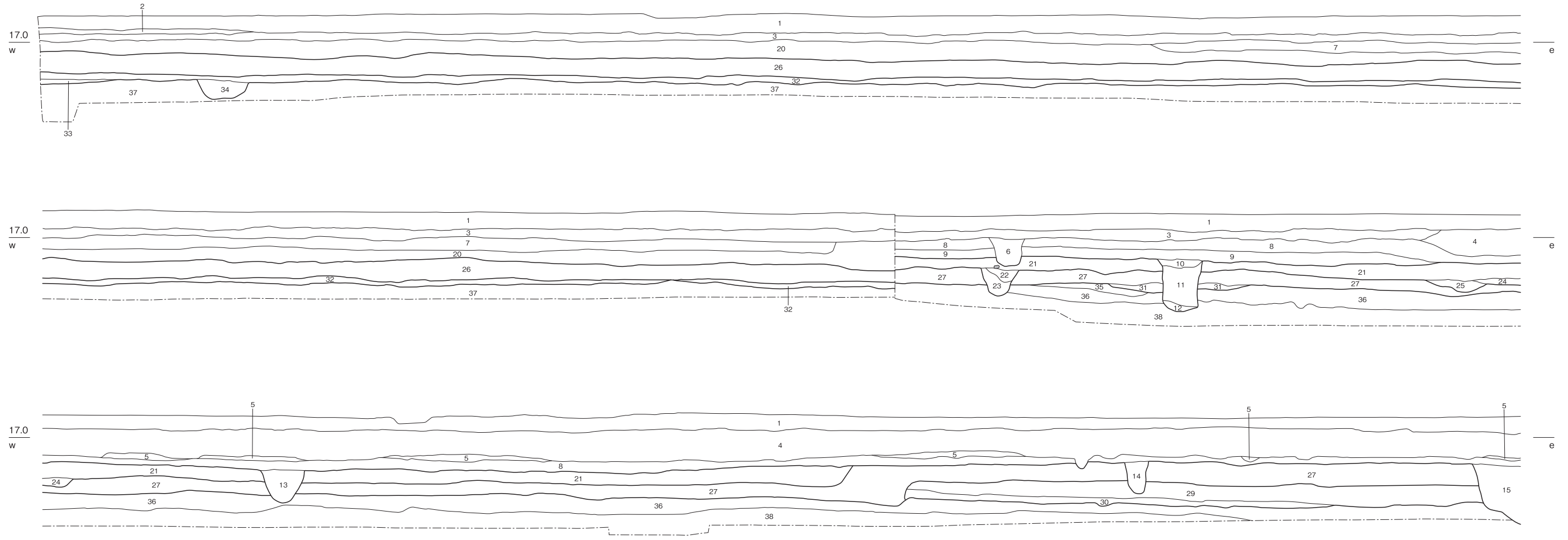
東壁で確認された7面に細分される遺構面と、他の壁面の遺構面との関係については、層界線の断絶、個別の土層の内容(包含層や遺構埋土、ベース等)が不明なこと、断面図と平面図との不一致等のため、隣接する調査区間での遺構面の連続性等の調査記録より判断した妥当と思われる解釈案を挿図中に提示するとともに、詳細については記載しない。なお、南壁では57層まで、北壁では34層まで、西壁では16層までに、柱穴や溝等の遺構埋土と考えられる堆積層が確認され、それぞれ複数の遺構面が確認さ



第43図 14区東・西壁土層断面図

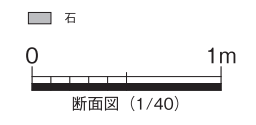
れた。調査では、これら遺構が確認された最終遺構面まで重機で掘り下げて、遺構の調査を行っている。

一方、南壁の64層において土器小片の出土が記録されている。具体的にどのような資料が出土したのかは、記録からは照合できなかったが、本層が遺構埋土ないしは包含層である可能性が考えられる。とすると、64層より上位の堆積層である59～63層についても、包含層ないし遺構埋土の可能性が考えられ、それらと一連の堆積層である、西壁17～20層、北壁の35～38層、東壁の31層については、少なくとも包含層か遺構埋土と判断される。なお東壁の32層については、31層との関係が不明ではあるものの、遺物等が出土したとの記録はなく、南壁の65層以下についても、同様な理由からベース層と判断したが、明確な根拠はない。また、西壁19層に中～粗砂の堆積が認められることから、上述した包含層ないし遺構埋土の一部は、自然河川等の可能性も想定されるが、いずれも層下端まで掘り下げられておらず、平面記録も作成されていないことから、可能性を指摘するにとどめる。

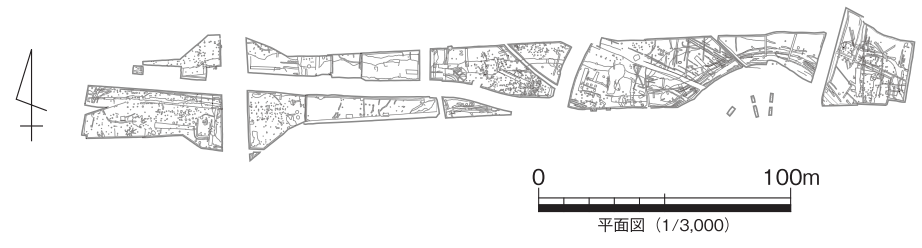


- 1 N4/ 灰色粘質土 (耕作土)
- 2 10YR8/3 浅黄褐色細砂混じり粘質土 (旧耕作土)
- 3 5YR7/6 褐色細砂混じり粘質土 (Fe 多、旧耕作土)
- 4 7.5YR7/2 明褐色中砂混じり粘質土 (Fe・Mn 多、黄色粘土小塊を多量に含む、造成土)
- 5 7.5YR7/1 明褐色中砂混じり粘質土 (黄色粘土粒を多量に含む、造成土)
- 6 7.5YR6/3 にぶい褐色中砂混じり粘質土 (Mn 多、攪乱)
- 7 5YR5/2 灰褐色細砂混じり粘質土 (Mn 多、旧耕作土)
- 8 5YR6/1 褐色細砂混じり粘質土 (Mn 多、旧耕作土)
- 9 5YR5/1 褐色中砂混じり粘質土 (Mn 多、旧耕作土)
- 10 7.5YR5/1 褐色中砂混じり粘質土 (遺構埋土?)
- 11 10YR6/1 褐色中砂混じり粘質土 (黄色粘土・炭化物・焼土粒を含む、遺構埋土?)
- 12 2.5Y5/1 黄灰色中砂混じり粘質土 (遺構埋土?)
- 13 10YR6/1 褐色細砂混じり粘質土 (炭化物含む、遺構埋土?)
- 14 10YR6/1 褐色細砂混じり粘質土 (遺構埋土?)
- 15 7.5YR5/1 褐色細砂混じり粘質土 (炭化物・焼土粒を含む、SK102)
- 16 10YR7/2 にぶい黄褐色中砂混じり粘質土 (遺構埋土?)
- 17 7.5YR6/1 褐色細砂混じり粘質土 (炭・焼土粒を含む、遺構埋土?)
- 18 7.5YR5/1 褐色細砂混じり粘質土 (炭・焼土粒を含む、遺構埋土?)
- 19 5YR6/1 褐色細砂混じり粘質土 (遺構埋土?)
- 20 2.5YR6/1 赤灰色細砂混じり粘質土 (Fe・Mn 多、第2面包含層)

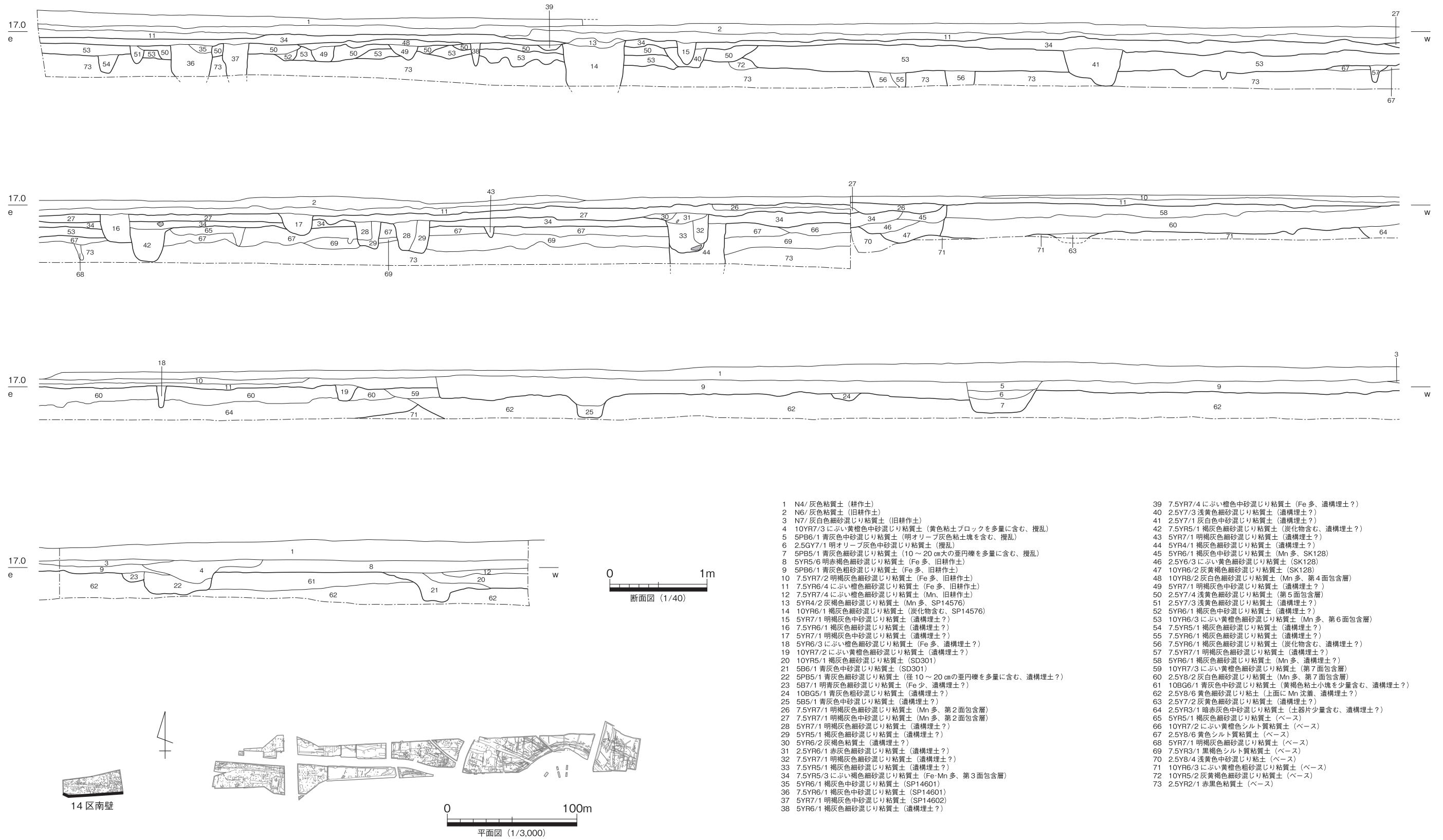
- 21 7.5YR6/2 灰褐色細砂混じり粘質土 (第2面包含層)
- 22 10YR6/1 褐色細砂混じり粘質土 (遺構埋土?)
- 23 10YR5/1 褐色細砂混じり粘質土 (遺構埋土?)
- 24 10YR7/1 灰白色細砂混じり粘質土 (炭化物・焼土粒を含む、遺構埋土?)
- 25 10YR6/1 褐色細砂混じり粘質土 (炭化物・焼土粒を含む、遺構埋土?)
- 26 10YR7/3 にぶい黄褐色細砂混じり粘質土 (Mn、第3面包含層)
- 27 7.5YR6/1 褐色細砂混じり粘質土 (Mn 多、第3面包含層)
- 28 5YR6/1 褐色中砂混じり粘質土 (やや強粘質、第4面包含層)
- 29 5YR7/1 明褐色中砂混じり粘質土 (第5面包含層)
- 30 7.5YR6/4 にぶい褐色中砂混じり粘質土 (第5面包含層)
- 31 5YR5/2 灰褐色細砂混じり粘質土 (Fe 多、遺構埋土?)
- 32 7.5YR6/4 にぶい褐色細砂混じり粘質土 (Fe 多、第6面包含層)
- 33 5YR4/1 褐色細砂混じり粘質土 (上面に Mn 沈着、第6面包含層)
- 34 5YR4/1 褐色中砂混じり粘質土 (遺構埋土?)
- 35 10YR5/1 褐色細砂混じり粘質土
- 36 2.5YR5/1 赤灰色細砂混じり粘質土 (上面に Fe-Mn 沈着)
- 37 5YR6/1 褐色中砂混じり粘質土
- 38 5YR3/1 黒褐色細砂混じり粘質土 (強粘質)



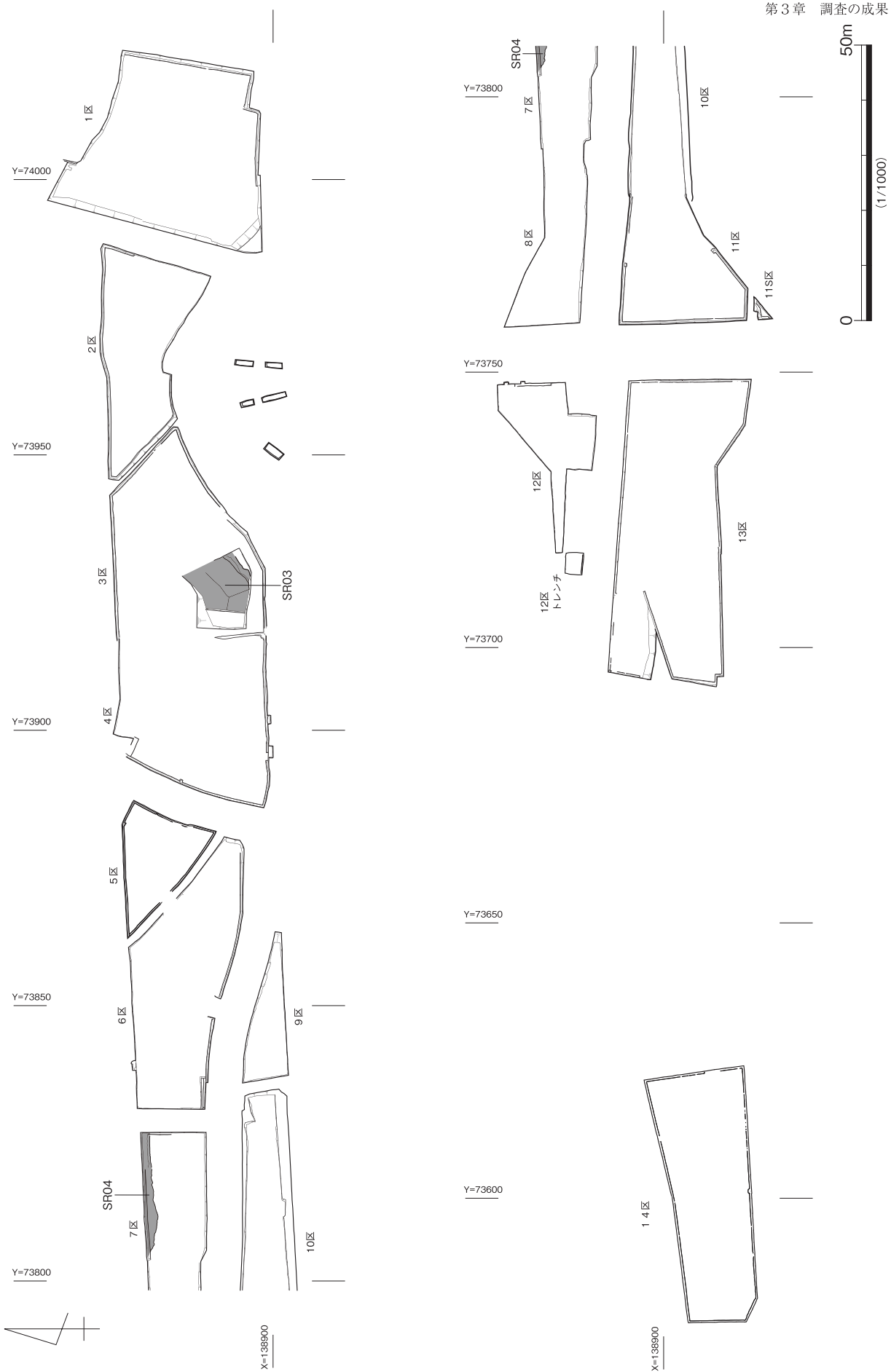
14区北壁



第44図 14区北壁土層断面図



第45図 14区南壁土層断面図



第 46 図 縄文時代遺構配置図